2024年度

日本語教育実習（国内・国外）

報告書

愛知県立大学日本語教員課程

まえがき

2024年度の愛知県立大学日本語教員課程の日本語教育実習には、国内実習15名、国外実習8名という、比較的多くの実習生が参加した。また、5月に新任教員が着任し、新しい風が本課程に吹き込んできた。1999年に本学の「日本語教員課程」が開始してから、日本語教育学分野の教員として、三代目となる。これまでのプログラムを踏襲しつつも、社会状況の変化をとらえ、これからもこの実習が進化していく可能性が広がったと確信している。

そして今年も、国内、国外実習ともに、見学や調査、教室参加、協働学習、国際交流など、多くの方々に支えられ、さまざまな学びの場が創出された。国内では、愛知県国際交流協会、いくつもの地域日本語教室および東海日本語ネットワーク、愛知県立大学日本語クラスの担当の先生方、「修了生のつどい」の共催で南山大学の文科省拠点事業関係者、ゲスト講師各位、国外では、甲南大学と台湾東海大学の実習生・教員、台中市東区長青学苑、台中YWCA、台南蓮潭小学校、東山中学校、家斉高校の教員や大勢の学習者のみなさま。 記して、心より感謝申し上げます。

外国語学部国際関係学科 教授 東 弘子

本報告書刊行および国外実習引率教員の渡航費などの経費は、2024 年度日本語教育実習諸経費による。

刊行によせて

2024年4月1日に「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」が施行され（制定は2023年5月）、日本語教育に携わる人に関心が寄せられた年だったと思います。本実習の中でも、8月のオープンキャンパスや12月の東海日本語ネットワークシンポジウムの教室交流会において、多くの方から国家資格である「登録日本語教員」と本実習との関連について尋ねられ、社会的な関心の高さが感じられました。

本実習は「教育機関で教えるための知識・技能・態度」よりも、「地域社会・共生社会の構成員として、日本語の学びや地域活動の中で活躍するための知識・技能・態度」に重点をおいたプログラムになっています。国家資格化の流れの中で「生活」分野での登録日本語教員の活用の可能性も示唆されていますが、地域での共生は、言語教師が活躍するだけでは実現しないと考えています。本学の日本語教員課程修了生は日本語教師として直接教育の場に関わる人ばかりではありませんが、同僚や住民として外国人住民とともに地域社会をつくる一員になっていきます。そのとき、本実習を通して得た「互いを尊重し、学びあう経験」が生かされると信じています。

実習生たちは本実習の履修までに様々な講義や授業を通して学んできたことを、実習を通して目の前の地域や社会の中のできごとと結び付け、議論し、さらに深い学びを獲得していきました。中には実習以前に地域日本語教室に参加したことがある実習生もいますが、実習生同士の学び合いを通して、経験をとらえ直し新たな視点を得ることができたのではないかと思います。

私自身も5月に着任し、初めて本実習を担当しました。着任するまではNPOや自治体で日本語教室を企画・運営・実施していたので、学生を受け入れる側でした。今年度は実習生を送り出す立場として、実習生たちが悩んだり迷ったりしながら熱心に活動する姿を間近で見て、ときには一緒に議論して、たくさんのことを学ばせてもらいました。

最後になりましたが、本実習実施にあたりご協力くださったすべてのみなさまに心より御礼申し上げます。本報告書が実習生の学びのまとめにとどまらず、地域日本語教育が活性化する一助となることを願います。

外国語学部国際関係学科 講師 千葉 月香

日本語教員課程履修規程

第1条　愛知県立大学学則第43条の規定に基づき、本学の外国語学部、日本文化学部、教育福祉学部の学生で日本語教員課程の履修を希望する者の履修科目及び履修方法は、この規程による。

第2条　日本語教員課程を修了するためには、別表1に従い、言語と教育12単位、言語14単位、言語と社会4単位、言語と心理2単位、社会・文化・地域2単位を含む計36単位以上を修得し、卒業しなければならない。それぞれの科目区分に相当する科目については別表2に定める。

第3条　この課程の授業科目の履修により修得した単位のうち、各学部履修規程により当該学科の授業科目と同一の場合は、卒業単位に算入する。

第4条 日本語教育実習を履修するには、科目区分「言語と教育」から「日本語教育実習」を除いた8単位、および、科目区分「言語」と「言語と社会」からあわせて10単位以上の修得が必要である。

附　則

この規程は平成21年4月1日から施行する。

附　則

この規程は平成22年7月29日から施行し、平成21年4月1日から適用する。

附　則

（施行期日）

1　この規程は平成25年4月1日から施行する。

（経過措置）

2　改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規程」という。）別表2の規定は、平成25年度以降の入学者（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、平成25年3月31日に在学するものについては、なお従前の例による。ただし、新規程別表2中の「日本語教育実習」については、平成21年度以降の入学者から適用する。

3　平成25年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規程別表2の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

附　則

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附　則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附　則

（施行期日）

1　この規程は、平成29年4月1日から施行する。

（経過措置）

2　改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規程」という。）は、平成29年度以降の入学者（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、平成29年3月31日に在学する者については、なお従前の例による。

3　平成29年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規程別表の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

附　則

（施行期日）

1　この規程は平成31年4月1日から施行する。

（経過措置）

2　改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規程」という。）は、平成31年度以降の入学者（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、平成31年3月31日に在学する者については、なお従前の例による。

3　平成31年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規程別表の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

附　則

（施行期日）

1　この規程は令和２年４月１日から施行する。

（経過措置）

2　改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規程」という。）は、令和２年度以降の入学者（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、令和２年３月３１日に在学する者については、なお従前の例による。

3　令和２年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規程別表の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

別表１

科目区分	必修単位	
言語と教育	12	2
言語	14	
言語と社会	4	
言語と心理	2	
社会・文化・地域	2	
合計	36	

別表 2

科目区分	必修単位		科目名	設置単位	科目開設学部・学科・専攻
言語と教育	8	2	共通各論(日本語教育教材論)	4	外国語学部:学部共通
			共通各論(日本語教授法)	4	
	4		日本語教育実習	6	日本語教員課程
言語	8		共通各論(日本語学)	4	外国語学部:学部共通
			共通各論(日本語文法論)	4	
			共通各論(日本語音声学)	2	
	6		言語研究入門	4	外国語学部:学部共通
			共通各論(音声学)	4	
			共通各論(言語学)	4 ※1	
			言語学		国語国文学科
			国語史	4 ※2	
			国語学特殊講義		
			国語学各論		
言語と社会	4		研究各論(民族言語研究)	2	国際関係学科
			研究各論(社会言語学)	2	フランス語圏専攻・スペイン語圏専攻 ドイツ語圏専攻・国際関係学科
			研究各論(多言語社会研究)	4	
言語と心理	2		研究各論(異文化コミュニケーション)	4	フランス語圏専攻・ドイツ語圏専攻 国際関係学科
			多文化社会とコミュニケーション	2	教養教育
			発達心理学	2	教育福祉学部:学部共通
			子ども家庭支援の心理学	2	
			子ども家庭支援論	2	教育発達学科
社会・文化・地域	2		共通各論(比較文化論)	4	外国語学部:学部共通
			共通各論(日本の行政法)	2	
			共通各論(日本の民法)	2	
			共通各論(日本の文化)	4	
			研究各論(多文化共生論)	4	フランス語圏専攻・スペイン語圏専攻 ドイツ語圏専攻・国際関係学科
			研究各論(国際協力)	2	
			研究各論(地域社会論)	2	
			日本文化史Ⅰ	2	日本文化学部:学部共通
			日本文化史Ⅱ	2	
			現代日本社会論	4	歴史文化学科
			比較社会論	2	
			地域社会学	4	
			地域社会学Ⅰ	2	社会福祉学科
			地域社会学Ⅱ	2	
			子ども発達支援論	2	
			多文化社会論	2	
計	36			102	

※1 「共通各論(言語学)」と「言語学」の両方を履修することはできない。

※2 「国語史」、「国語学特殊講義」、「国語学各論」の3科目のうち4単位までは、日本語教員課程の修了必修単位に算入することができる。

2024年度 日本語教育実習名簿

〈国内実習〉

【実習生】

豊岡 菜帆（とよおか なほ）	外国語学部 英米学科 4 年
王 暁飛（おう ぎょうひ）	日本文化学部 歴史文化学科 4 年
坂根 葵（さかね あおい）	外国語学部 英米学科 4 年
丹羽 琴美（にわ ことみ）	外国語学部 英米学科 4 年
手塚 渚月（てづか なつき）	外国語学部 ヨーロッパ学科フランス語圏 4 年
深田 琴音（ふかだ ことね）	外国語学部 ヨーロッパ学科スペイン語圏 4 年
前川 礼奈（まえかわ れな）	外国語学部 ヨーロッパ学科スペイン語圏 4 年
米山 茄穂（よねやま かほ）	外国語学部 ヨーロッパ学科スペイン語圏 4 年
朝岡 沙月（あさおか さつき）	外国語学部 ヨーロッパ学科ドイツ語圏 4 年
前田 凜子（まえだ りこ）	外国語学部 ヨーロッパ学科ドイツ語圏 4 年
上村 紗生（うえむら さき）	外国語学部 中国語学科 4 年
柴田 美夢（しばた みゆ）	外国語学部 英米学科 3 年
伊藤 明依（いとう めい）	外国語学部 中国語学科 3 年
村林 芽明（むらばやし ちひろ）	外国語学部 中国語学科 3 年
澤田 瑠依（さわだ るい）	外国語学部 国際関係学科 3 年

【SA(Student Assistant), TA(Teaching Assistant)】

寺田 栞菜（てらだ かんな）	国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程 2 年
曽田 優奈（そだ ゆうな）	日本文化学部 国語国文学科 4 年
井上 稚葉（いのうえ わかば）	外国語学部 国際関係学科 4 年

【教員】

東 弘子（あずま ひろこ）	愛知県立大学外国語学部 国際関係学科 教授
千葉 月香（ちば つきか）	愛知県立大学外国語学部 国際関係学科 講師

【ゲスト講師】※講義日順に記載

米勢 治子（よねせ はるこ）	東海日本語ネットワーク副代表
松本 一子（まつもと かずこ）	東海日本語ネットワーク
有森 丈太郎（ありもり じょうたろう）	トロント大学東アジア学科 准教授
川口 直巳（かわぐち なおみ）	愛知教育大学 日本語教育講座 准教授
川崎 直子（かわさき なおこ）	愛知産業大学短期大学短期大学 国際コミュニケーション学科 教授

〈国外実習〉

【実習生】

曽田 優奈	井上 稚葉	豊岡 菜帆	手塚 渚月
深田 琴音	前川 礼奈	朝岡 沙月	村林 芽明

【教員】

東 弘子

2024 年度 日本語教育実習（国内・国外）報告書

目次

まえがき …… i
刊行によせて …… ii
日本語教員課程履修規定 …… iii
2024 年度 日本語教育実習名簿 …… v

Ⅰ. 国内実習

1. 2024 年度 国内実習の概要 …… 2
2. 活動紹介
   - 2-1. 地域日本語教室調査 …… 5
   - 2-2. 県大交換留学生の日本語クラス支援 …… 16
   - 2-3. 日本語ボランティアシンポジウム 2024 …… 21
   - 2-4. 外部講演会参加 …… 23
   - 2-5. Facebook …… 25
3. 個人レポート …… 45
4. TA・SA からのコメント …… 65
5. 一年間の学び …… 66

Ⅱ. 国外実習

1. 2024 年度「日本語教育実習（国外）」授業概要 …… 70
2. 「日本語キャンプ」報告書(東海大學版)からの抜粋 …… 72
3. 日本文化体験：染め物（雪花絞り）ワークショップ …… 78
4. 台中日本語教室見学 …… 79
5. 台南ツアー …… 80
6. 帰国報告会 …… 84
7. 実習生ふりかえり …… 87

編集後記 …… 96

Ⅰ.国内実習

1. 2024 年度 国内実習の概要

手塚 渚月・深田 琴音・丹羽 琴美

① 概要と目標

本実習は日本語教員課程修了のために必修となる通年4単位の科目「日本語教育実習（国内）」であり、今年度は15名が履修した。期間中には3名の外部講師による講義のほか、愛知県国際交流協会（AIA）の見学、東海日本語ネットワーク（TNN）シンポジウムへの参加など、日本語教育について様々な視点から学ぶ機会が多く設けられた。

シラバスの中では、本実習の到達目標として以下の6つが挙げられている。特に6に関しては、授業やイベント後に実習生それぞれが振り返りを記入し、またそれをSA・TAがまとめ、後日全体で共有する一連の流れが生まれていたことにより、特に実習開始時と終了時での変化が大きかった点として挙げることができるだろう。

1. 言語学習支援・言語習得に関する知識を深める
2. 日本語を母語としない人と「日本語」でコミュニケーションをする際に、相手が理解できる話し方を選択できる
3. 今おきていることについて、自身の考えを自身の言葉で伝えることができる
4. さまざまな人で構成される地域社会、日本社会に必要なことを考え、実行できる
5. 異文化コミュニケーションを通して、自分自身の中にこれまでに構築してきた文化、行動規範を理解する
6. 他者とともに、意見交換をしながら創り上げる能力と態度を身につける

本実習では日本語の知識や教え方を学習するだけでなく、多文化な場面で必要なコミュニケーション能力を習得することが重視され、それぞれが自身の言葉で学んだ内容を噛み砕き、またそれを人に伝える活動が多く行われていたように感じる。そしてその能力は日本語教育の場やそれ以外の様々な場面で活かすことができるスキルであり、1月22日（水）の授業の際には学んだこと、後輩に伝えたいことなど実習生それぞれが今年度を振り返ってそれをキーワードとして残した。（詳細は本報告書の5.一年間の学び）

② 2024 年度の実習内容

基本的に本実習は水曜日の5限目に開講されるが、今年度は休日に開催される学外実習（外部講演会への参加、AIA見学等）参加のため、一部変則的なスケジュールとなっていた。

通年の授業スケジュールは後のページの表にまとめている。本節ではその中でも本実習の柱となっていた活動や特徴的な活動について簡単に触れる。

【修了生のつどい】

今年度の修了生のつどいは、トロント大学より有森丈太郎先生を講師にお招きし、「性の多様性と日本語教育：包摂的・肯定的な学習環境を考える」という内容についての講演をしていただいた。この講演は2部に分かれており、第1部は講演・グループディスカッション、第2部は講師を含めたランチミーティングと参加者のネットワークづくりであった。愛知県立大学の日本語教員課程の実習生及び修了生だけでなく、日本語教育に関わる方々がオンラインからも広く参加してくださった。愛知県立大学の日本語教員課程は1999年から副専攻課程として設置されている。そしてこれまでに400名以上の卒業生を輩出してきた。一年間の実習の中で、様々な場面で人と人の繋がりの重要性を感じる機会があったが、この修了生のつどいもまたその一つであり、次は今年度実習に参加した私たちがバトンを繋ぐ役割を担っているということができるであろう。

【地域日本語教室調査】

地域日本語教室調査は、今年度の実習の中で大きな軸の1つとなっているといえる。今年度も昨年に引き続き、参加する教室の選定から参加までそのすべてを実習生自身が行ったからだ。この経験は実習としてだけでなく、学生生活や今後のキャリアの中でも役立てることのできる経験として貴重なものであったと考える。また、10月23日（水）には地域日本語教室調査発表会をZoomにて開催。実習生が参加している地域日本語教室のボランティアの方々をはじめ、本実習に関心のある方に向けてプレゼンテーションを行った。この発表会の振り返り、参加者からの感想からも様々な学びがあったといえる。（詳細は本報告書の2－1.地域日本語教室調査）

【オープンキャンパス】

8月7日（水）と8日（木）に開催されたオープンキャンパスにて、日本語教員課程コーナーの展示を行った。日本語教員課程についてのみならず、地域日本語教室、また県大日本語クラスなどの情報についても掲示物を作成し、当日は訪れた高校生やその保護者に対して個別に説明を行った。また参加者の感想を書いてもらうコーナーでは、日本語教育に対する印象やその認知度についても知ることができ、オープンキャンパスが本実習や日本語教育について知るきっかけになっているという実感を得た。

【実習強化月間－11月】

今年度も前期から県大で実施されている交換留学生を対象とした日本語を学ぶクラスへの参加を行っていた。そして11月はその強化月間として2つ以上のクラスを実習生それぞれが選択し、全員が参加した。参加方法は見学のみのクラスから実際に実習生自身が授業に参加したクラスまで様々で、異なるアプローチのクラスに参加することができたからこそ多くのことを学ぶことができる時間となったといえるだろう。12月4日（水）には、授業内でそれぞれが学んだことをグループ、そして全体で共有した。（詳細は本報告書の3-2.留学生支援）

【年間スケジュール】

前期

4 月 10 日	ガイダンス
4 月 17 日	ガイダンス続き、自己紹介
4 月 24 日	地域日本語教育概要 1：日本語教育施策
5 月 15 日	日本語の指導が必要な子供達
5 月 18 日	AIA 見学
5 月 22 日	地域日本語教育概要 2：地域日本語教室の状況
5 月 29 日	地域支援の学びのまとめ
6 月 5 日	地域日本語教室の訪問/活動場所を考えるワーク
6 月 19 日	地域日本語教室調査 1
6 月 26 日	地域日本語教室調査 2
6 月 29 日	修了生のつどい 講師：有森丈太郎先生
7 月 3 日	地域日本語教室調査 3
7 月 10 日	協定大学クラス支援の経験の共有/質問
7 月 24 日	前期のまとめ、オープンキャンパス準備
7 月 31 日	オープンキャンパス準備 2
8 月 7 日～8 月 8 日	オープンキャンパス

後期

10 月 2 日	後期ガイダンス
10 月 16 日	地域日本語教室調査発表のリハーサル
10 月 23 日	地域日本語教室調査発表
10 月 30 日	県大留学生日本語クラスでの学びの準備
11 月 20 日	外国につながる子供達への支援 講師：川口直巳先生
11 月 27 日	TNN シンポジウムブース出展準備
12 月 4 日	県大留学生日本語クラスの共有
12 月 7 日	TNN シンポジウム参加
12 月 18 日	就学前の子供の学習 講師：川崎直子先生
12 月 25 日	地域日本語教育の推進
1 月 8 日	報告書の分担決め
1 月 22 日	まとめ

上記の授業以外に、TNN 等が開催している外部講演会への 2 回以上の参加が求められた。

２．活動紹介

２－1．地域日本語教室調査

王 暁飛・坂根 葵・朝岡 沙月・柴田 美夢

① 概要

実習生は地域日本語教育の現場を、約3ヶ月間にわたるボランティア活動を通して調査しました。その後、調査結果をもとに、オンライン（Zoom）で教室関係者や日本語教育、支援に携わる方々を招き、調査発表会を実施しました。以下、地域日本語教室調査の事前準備、各実習生の調査内容、そして調査発表会の概要について報告します。

実習生が調査した地域日本語教室とその開催地は以下の通りです。

実習生氏名	開催地	調査先の日本語教室名
豊岡 菜帆	小牧市	漢字ボランティア教室
王 暁飛	長久手市	オープンにほんご
坂根 葵	名古屋市	ことばの会
丹羽 琴美	刈谷市	はなそう にほんご
手塚 渚月	長久手市	ウェルカムにほんご教室
深田 琴音	名古屋市	がんばるーむ 99
前川 礼奈	名古屋市	ろう者が通う日本語教室
米山 茄穂	豊川市	こぎつね教室
朝岡 沙月	名古屋市	トライシクル
前田 凛子	春日井市	Tokai Batika International School
上村 紗生	名古屋市	みなみ文化日本語教室
柴田 美夢	豊田市	Alpha 日本語教室
伊藤 明依	土岐市	土岐市日本語教室
村林 芽明	長久手市	子ども日本語
澤田 瑠依	津島市	つしま日本語教室

② 活動の流れ

〇事前準備～調査発表のスケジュール

4 月 24 日	講義 地域日本語教育概論 1：日本語教育施策
5 月 22 日	講義 地域日本語教育概論 2：地域日本語教室の状況
6 月上旬	訪問する教室の候補をリストアップ
6 月下旬	教室への訪問アポイントメントの状況確認
～7 月上旬	教室の予備調査と発表

7 月～10 月	教室での活動・調査の実施
10 月上旬	調査発表の資料作成
10 月 16 日	地域日本語教室調査発表（リハーサル）
10 月 23 日	地域日本語教室調査発表（本番）

○事前準備（6 月上旬～7 月上旬）

地域における日本語学習者支援調査に向けて、まず、愛知県内にある日本語教室の学習者や支援内容、求められる支援などの情報を把握し、実習生各自が訪問先の教室のリストアップを行いました。候補の教室について、東先生と千葉先生からコメントをいただき、自分自身が興味を持ち、交通の便利さなどの要素を考えたうえで、訪問先を決定しました。

教室調査を実施するにあたり、実習生はメールや電話などを通して、教室にアポイントメントを取った後、各教室へ初回訪問を行いました。事前にインターネットで調査した基本情報、教室運営の方やボランティア、及び学習者へのインタビューから得られた生の声、実際にボランティアとして活動した感想を整理し、7 月上旬に各自の教室の予備調査結果の発表を行いました。

○各教室での活動・調査の実施（7 月～10 月）

7 月～10 月の間、本格的にボランティアとしての活動と調査活動を開始しました。実習生は各自参加した日ごとに、振り返りシート（わかったこと、課題、疑問に思ったことなど）に記録しました。授業では各自の振り返りに基づいてグループディスカッションを行いました。調査活動は 10 月までででしたが、現在でもボランティアとして引継ぎ教室にお世話になっている実習生もいます。

③ 地域日本語教室調査発表会

10 月 23 日に 3 か月の地域日本語教室でのボランティア活動で学んだことを報告する調査発表会を行いました。調査発表会が円滑に開催されるため、10 月上旬から実習生各自で調査活動の資料を作成し、10 月 16 日のリハーサルを経て、オンライン(Zoom）にて開催しました。教室関係者、日本語支援及び日本語教育に関心を持っている方々が参加してくださり、実習生が実際にボランティアとして活動ながら気づいたことや課題などを発表し、その後、質疑応答の時間も取られました。以下、参加者の方からいただいたコメントの一部を掲載します。

○地域日本語教室ボランティアからコメント

・様々な教室のことを知れて面白かったです。教室参加を通じての気持ちの変化や日本語ボランティアに関する課題や意見もそれぞれしっかり考えられており、改めて日本語教室の意義を再確認できました。今後の皆さんの活動も楽しみにしています。

・各日本業室の特徴、運営の仕方、工夫している点などをコンパクトに紹介して頂きありがとうございます。できれば、現場の説明だけでなく、学生の視点でその日本語教室への「提案」があると尚良いと思いました。

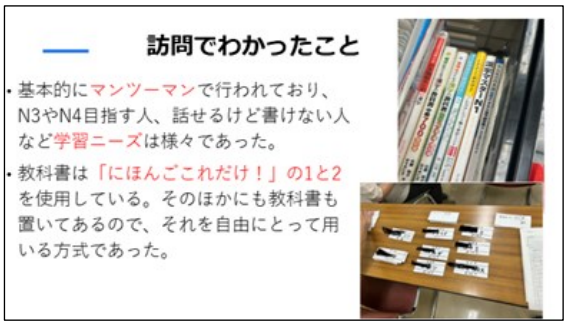
〇地域日本語教室運営者からコメント

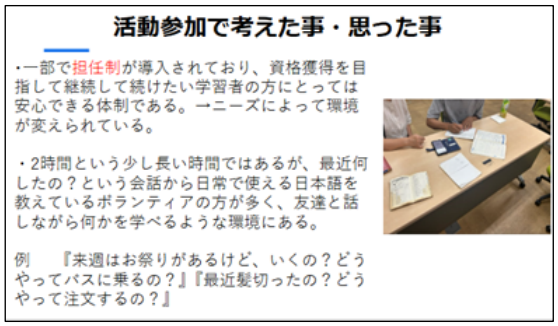
・学生さんが実践を通して多くのことを学ばれたことがわかりました。地域日本語教室に若い世代がもっと気軽に参加できるようなしくみづくりができるといいと思いました。

④ 各実習生の活動報告

以下に実習生 15 名それぞれの活動報告と発表会後の振り返りを抜粋・転載します。スライドは各実習生が調査発表会で用いたものです。

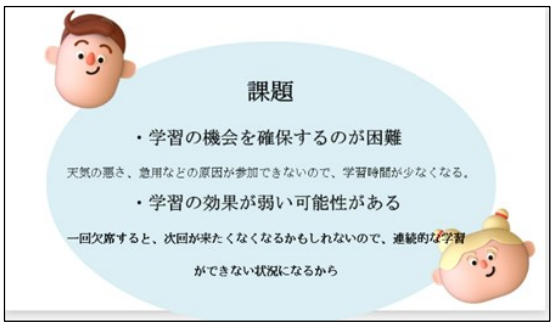
≪日本語 漢字ボランティア教室（実習生：豊岡 菜帆）≫

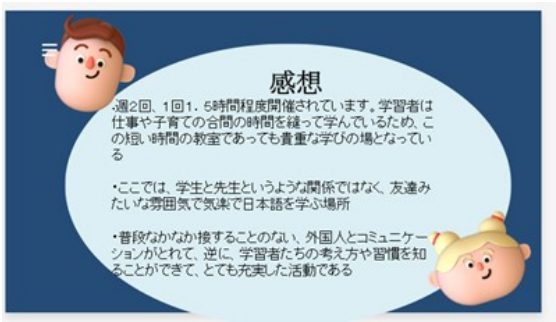




・開催地域：小牧市
・対象者：大人（N3 や N4 目指す人、話せるが書けない人など）
・活動目的：日本に来た外国人の人へ漢字学習の手助け
・学習者の国籍：中国、フィリピン、ペルー
・活動形態：マンツーマン指導
・ボランティア数：10 名
・実習生の振り返りより：担任制が導入されており、資格獲得を目指して継続して続けたい学習者の方にとっては安心できる体制である。日常で使える日本語を教えているボランティアの方が多く、友達と話しながら何かを学べるような環境にある。

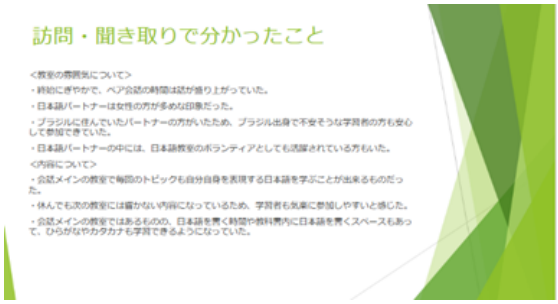
≪オープン日本語教室（実習生：王　暁飛）≫

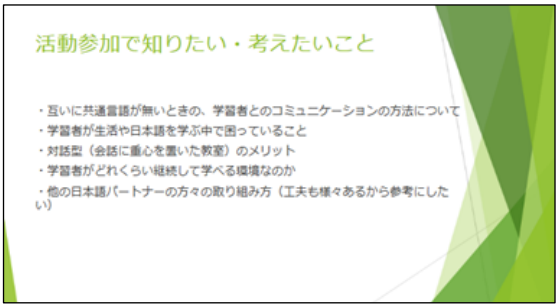




・開催地域：長久手市
・対象者：初級～上級レベルの対応（子供及び大人）
・活動目的：日常生活で必要な日本語の学習
・学習者の国籍：中国、イラン、オーストラリア、ベトナム
・活動形態：マンツーマン
・ボランティア数：18 名
・実習生の振り返りより：学習者は仕事や子育ての合間の時間を縫って学んでいるため、この短い時間の教室であっても貴重な学びの場となっている。
連続的な学習の確保が困難であるため、学習効果が弱い可能性がある。

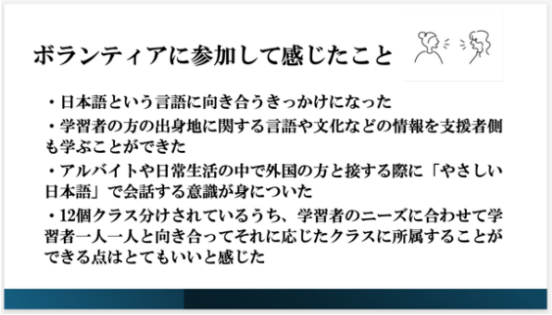
≪はなそう日本語（実習生：丹羽　琴美）≫





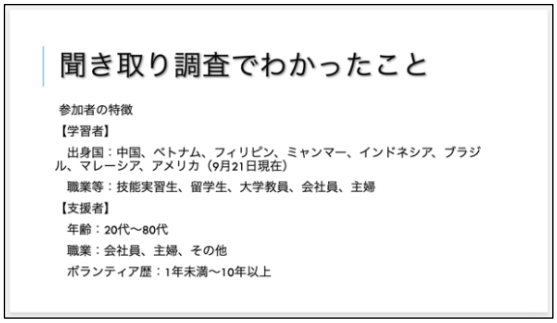
・開催地域：刈谷市
・対象者：こども及び大人
・活動目的：日常生活の簡単な表現を理解でき、話せる日本語の学習
・学習者の国籍：フィリピン、ベトナム、中国、韓国、ブラジル、ネパール、インド
・活動形態：対話型 1 対 1、1 対 2
・ボランティア数：17 名
・実習生の振り返りより：教室の雰囲気がにぎやかで、ペアー会話が盛り上がっていた。また、お互いに共通言語がないときに、学習者とのコミュニケーションの方法について考えたい。

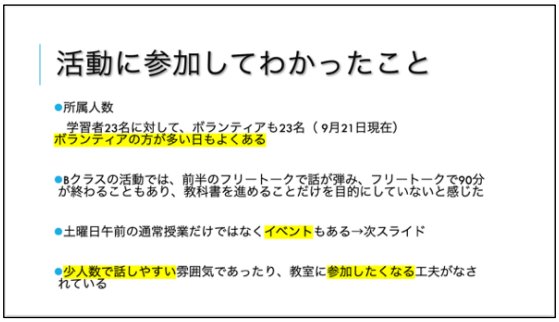
≪ことばの会（実習生：坂根 葵）≫



・開催地域：名古屋市
・対象者：大人・子ども
・活動目的：日本の文化・習慣を知る、JLPT 合格、 職場で使う日本語の習得
・学習者の国籍：中国、韓国、台湾、ネパールなどから 30 カ国以上
・活動形態：対話型
・ボランティア数：約 30 人
・実習生の振り返りより：支援者と学習者という関係性ではなくどちらも学び合う関係であるということをボランティアを通して感じた。

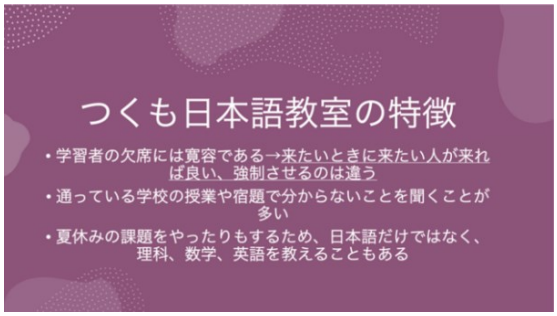
≪ウェルカムにほんご教室（実習生：手塚 渚月）≫

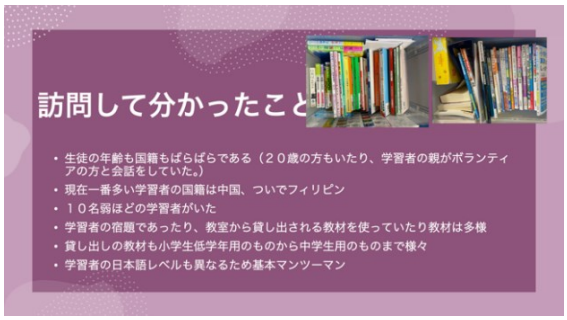




・開催地域：長久手市
・対象者：原則として大人（大人と一緒に学習できる子どもは OK）
・活動目的：日本語学習、学習発表会など教室内外のイベントに向けた準備・練習
・学習者の国籍：中国、ベトナム、フィリピンなど
・活動形態：レベル別グループ学習
・ボランティア数：23 名
・実習生の振り返りより：日本語の教え方に一つの正解があるわけではない。とりあえず自分の言い方で話してみることが大切であると感じた。

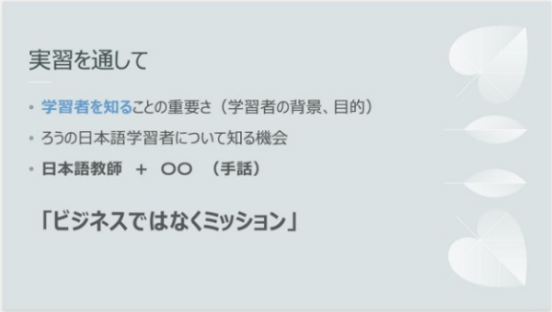
≪がんばるーむ 99(実習生：深田　琴音)≫





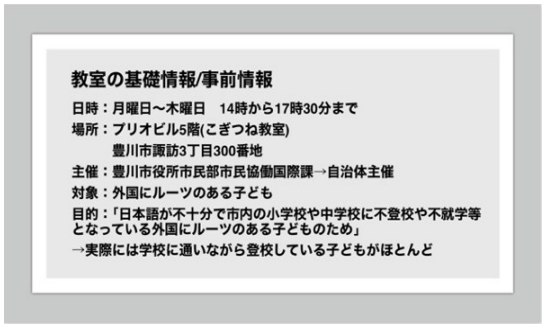
・開催地域：名古屋市
・対象者：子ども（原則小学生・中学生）
・活動目的：学校の勉強でわからないところや日本語をボランティアや友達と一緒に勉強する
・学習者の国籍：中国、フィリピンなど
・活動形態：対話型
・ボランティア数：7 人程度
・実習生の振り返りより：学習者ごとに日本語レベルや学習意欲が異なるため、その人に合った学習方法や形態を一緒に探していくことに特に力を入れていました。

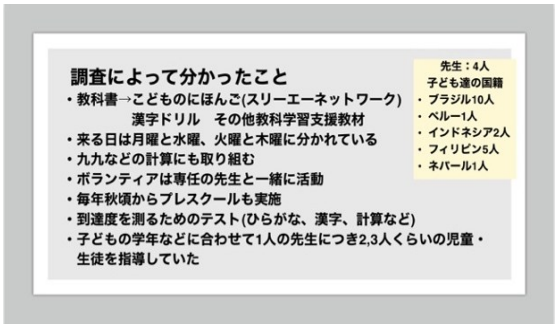
≪ろう者が通う日本語教室（実習生：前川　礼奈)≫



・開催地域：名古屋市
・対象者」外国人ろう者、日本人ろう者
・活動目的：ろうの学習者が、自動車免許の取得や就労等を目指して学ぶ、JLPT の取得
・学習者の国籍：日本、フィリピン、ペルー
・活動形態：対話型
・ボランティア数：2 人（元学習者が手話のサポートを行う）
・実習生の振り返りより：手話を第一言語とする聾者にとって、日本手話と日本語を一致させていく過程がいかに難しいかを学んだ。キム先生の「ビジネスではなくミッション」というお話が非常に印象的だった。ろうの日本語学習者について知る機会が増えるべきだと考えた。

≪こぎつね教室 （実習生：米山茄穂）≫





・開催地域：豊川市

・対象者：外国にルーツのある子ども

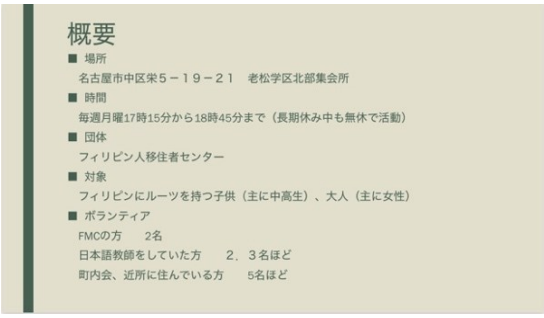
・活動目的：日本語が不十分で市内の小学校や中学校に不登校や不就学等となっている外国にルーツのある子どものため（実際には学校に通いながら登校している子どもがほとんど）

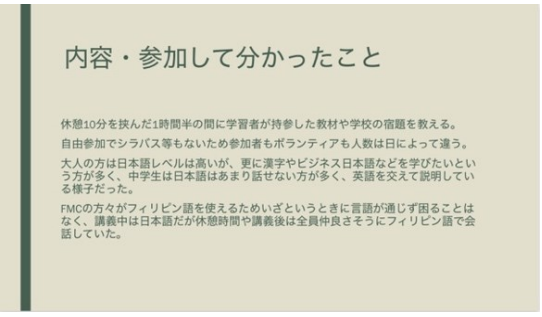
・学習者の国籍：ブラジル、ペルー、インドネシア、フィリピン、ネパール

・活動形態：1 人の先生につき生徒 2,3 人の個別授業型

・実習生の振り返りより：学習者だけでなくボランティアの特徴や教室設立の背景にも注目することで、その教室の役割や特性を俯瞰して見られるとわかりました。

≪トライシクル教室（実習生：朝岡　沙月）≫





・開催地域：名古屋市

・対象者：フィリピンにルーツを持つ子供や大人

・活動目的：学校の宿題や資格の勉強など学習者の希望する勉強を教える、在日フィリピン人の方々と地域の交流の場とする

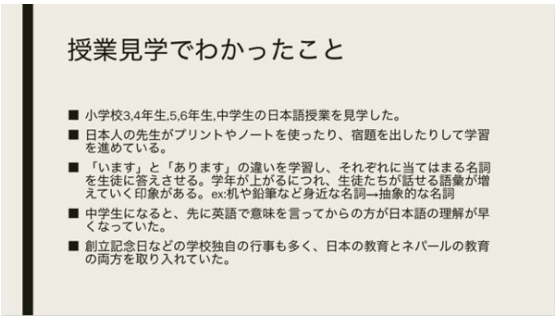
・学習者の国籍：フィリピン

・活動形態：マンツーマン（当日の人数により 1 対 2, 3 の場合もある）

・ボランティア数：10 名程

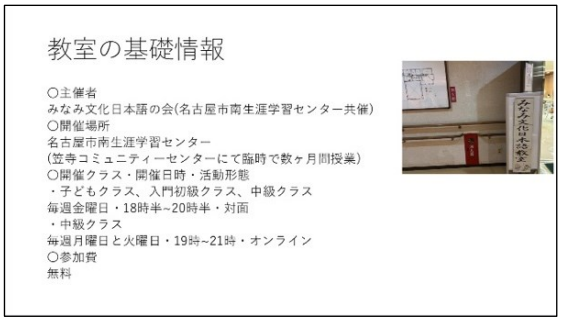
・実習生の振り返りより：日本語能力の向上だけを目的としている教室だけではないことが分かりました。私が訪問した教室はフィリピン人向けでフィリピン人だけが参加しているものだったのですが、他の教室は多言語多国籍のものが多く、そこを課題としている教室が多いように感じました。

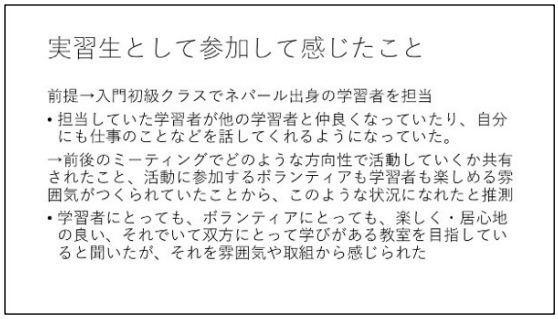
≪Tokai Batika Intarnational School（実習生：前田　凜子）≫



・開催地域：春日井市
・対象者：ネパールにルーツを持つ幼稚園～中学二年生の子ども
・活動目的：認可外保育所と小中学生用のフリースクールとして在日ネパール人の子供のサポート
・学習者の国籍：ネパール
・活動形態：授業型
・実習生の振り返りより：ボランティアで行われている日本語教室ですが、クラス分けや学習者の記録などほぼ日本語「学校」のような教室もあることがわかった。ボランティアにしては高いレベルが求められているようにも感じた。

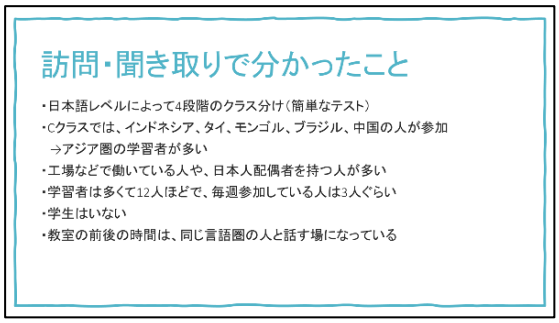
≪みなみ文化日本語教室（実習生：上村　紗生）≫

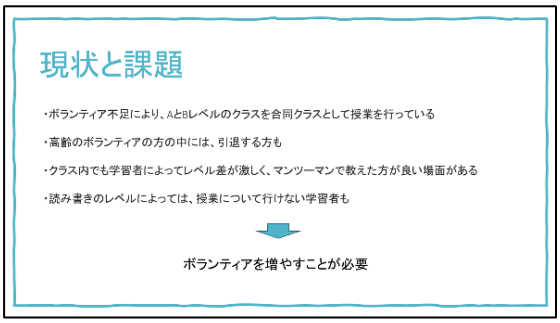




・開催地域：名古屋市
・対象者：入門～中級の小学生から大人まで
・活動目的：日本語を教える、学校の宿題などのサポート
・学習者の国籍：中国、フィリピン、ベトナム、ネパール、スリランカ、ブラジル、インドネシア、オーストラリア、マレーシア
・活動形態：クラス別授業型
・ボランティア数：毎週全クラス計 15 人前後
・実習生の振り返りより：他の人の発表を聞いたことで、自分の認知しきれていなかった疑問を見つけることができたし、自分の調査の不足に気がつくことができた。

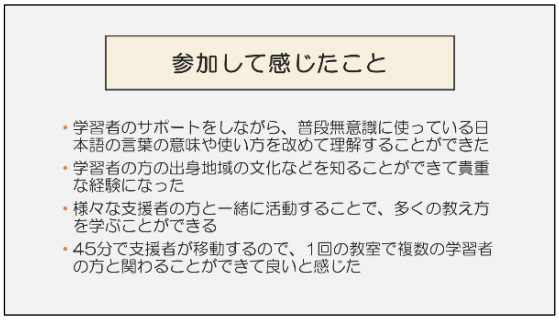
≪ Alpha 日本語教室 （実習生：柴田 美夢）≫

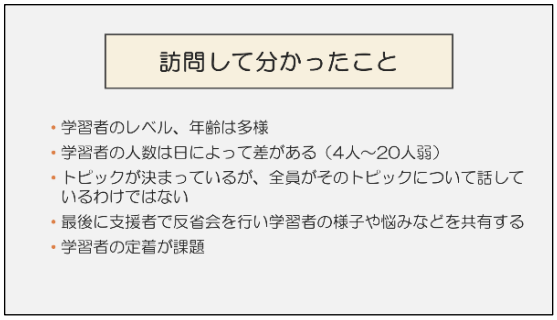




・開催地域：豊田市
・対象者：15 歳以上
・活動目的：日常生活・仕事で役に立つ日本語の学習
・学習者の国籍：インドネシア、タイ、ブラジル、中国など
・活動形態：授業
・ボランティア数：19 人
・実習生の振り返りより：学外の方も参加しており、他の教室に対する解像度が上がった。ボランティアの高齢化と不足は、多くの教室で共通する課題なのだと実感した。

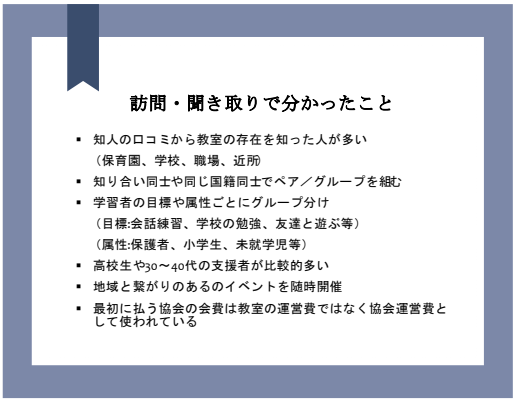
≪ 土岐市日本語教室 （実習生：伊藤 明依） ≫

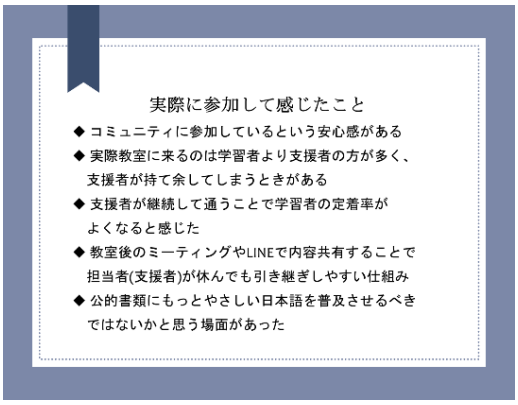




・開催地域：土岐市
・対象者：入門～中級レベル
・活動目的：外国人が地域社会の一員として生活できること
・学習者の国籍：中国、フィリピン、アフガニスタン
・活動形態：少人数グループ
・ボランティア数：約 12 人
・実習生の振り返りより：他の教室の支援者の方の話を聞くことが出来た。質問をされることで、自分が参加した教室と他の教室の違いを認識することが出来た。

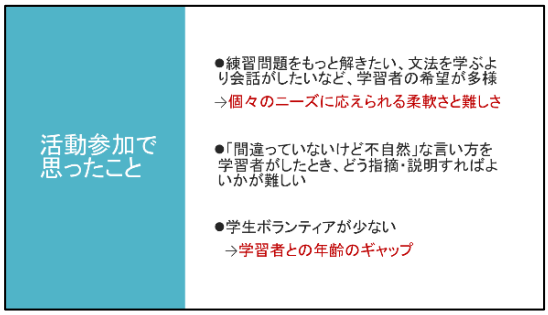
≪ こどもにほんご（実習生：村林 芽明）≫

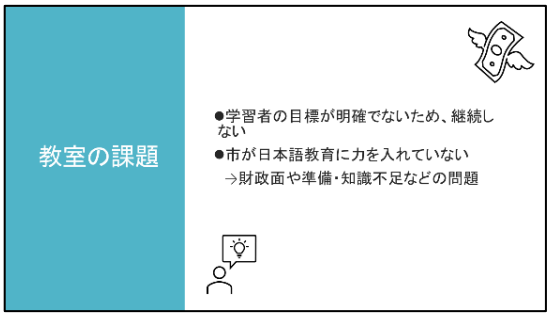




・開催地域：長久手市
・対象者：誰でも
・活動目的：コミュニケーションを通じて相互理解を図り、良い地域社会をつくる
・学習者の国籍：ベトナム、ネパール、カンボジア、フィリピン、スリランカなど
・活動形態：対話型
・ボランティア数：27 人
・実習生の振り返りより：お話をきいて改めてこどもの一人一人のバッググラウンドを配慮して接する必要があると感じた。情報共有することで新たな気づきを得ることができた。

≪ つしまにほんご教室（実習生：澤田 瑠依）≫





・開催地域：津島市
・対象者：大人
・活動目的：働く人に日本を勉強してもらう
・学習者の国籍：フィリピン、ベトナム、カンボジアなど
・活動形態：1 対 1、1 対 2
・ボランティア数：約 10 人
・実習生の振り返りより：質疑応答やコメントなどで自分にはなかった視点からの意見が聞けて勉強になった。実習生以外の前で発表する機会はとても貴重で重要だと感じた。

５．地域日本語教室調査の感想（担当者より）

ボランティア活動を通じて、学習者の多様性であったことがわかりました。また、日本語支援を通して、どのようにわかりやすく説明するのかすごく工夫しなければならないことを学びました。そして、学習者と信頼関係を築くために、「教えてあげる」という気持ちではなく、「お互いに学び合う」ことが非常に重要だと感じました。（王　暁飛）

実際にボランティアとして教室に参加して、その現場の雰囲気や、学習者が抱える課題に直接触れることができました。教室内で学習者がどのような支援を必要としているのか、どのような教え方が効果的なのかを目の当たりにすることができ、その重要性を実感するとともに、学習者が安心して日本語を学べる環境づくりがいかに大切かを実感しました。（坂根　葵）

地域日本語教室で日本語学習者やボランティアの方々と接することで、実際の日本語学習者の現状やそれに対して地域や社会でどのような取り組みが行われているのか知ることができました。また、他の実習生との情報交換から、地域日本語教室の存在意義は日本語を教えるだけの場ではなく、ニーズに合わせ様々な形の教室があることを学べました。（朝岡　沙月）

ボランティア活動を通じて、日本語を教えることの難しさであったり、教室に参加する人の多様性であったりを学びました。また、授業の前後で、学習者やボランティアたちが談笑している様子や、イベント行事が開催されていたのが印象的でした。地域日本語教室は、学習の場として以外にも、交流の場として重要な役割を果たしているのだと実感しました。（柴田　美夢）

2－2．県大交換留学生の日本語クラス支援

伊藤 明依・前田 凜子・米山 茄穂

前期の 5 月から 7 月、後期の 11 月を中心に、実習の一環として愛知県立大学に来ている交換留学生の日本語クラスに参加させていただきました。県大の日本語クラスでは、1 回 90 分の授業を 15 週にわたり行っています。実習生はそれぞれ自分が興味のある日本語クラスを選び、先生のサポートや留学生の日本語支援を行いました。以下では、実習生が参加した 6 つのクラスを紹介しています。

各日本語クラスでの活動や学び紹介

○トピック・ディスカッション（担当：前田）

担当教員：梅木陽子先生
学習者：5 名（ウズベキスタン、スペイン、中国、フランス、メキシコ）

【授業概要】
このクラスでは授業ごとに話すテーマが変わり、学習者はそれについて話し合います。それに加えて日本の昔ばなしを読んだり、留学生によるアンケート調査も行われたりしました。

テーマ：日本の貿易、日本の学校文化、日本の宗教、留学生の出身地域の祭りと料理について
昔話：「ごんぎつね」（新美南吉） 音読、語彙の確認、今と昔の言い回しの違いについてなど
アンケート調査：留学生が知りたいテーマを決める、アンケートフォームの作成、調査結果をスライドを用いたプレゼンテーションで発表する。

【実習生の役割】
基本的に留学生と一緒に授業に参加し、日本語のサポートをしました。学校文化がテーマだった時には、修学旅行の思い出や給食、制服について話しました。2 回ほど実習生が中心となって授業を進める機会を先生にいただき、おすすめの神社や伊勢神宮などの三重県の観光地について話しました。アンケート調査では、日本語支援に加え、パソコン操作のサポートを主に行いました。

【学んだこと】
留学生の出身が様々で、一つのテーマに対しても異なる角度からの意見を知ることができ、見識が広がりました。また、日本に関する何かについて説明した時や、昔と今の言葉の違いについて説明した時には、自分の知識不足を痛感しました。特に、日本語については感覚で言い方を選んでいることが多くあったので、その点で根拠を示して説明できるようになりたいと思いました。

○日本語文章表現Ⅱ（担当：前田）

担当教員：川口純子先生
学習者：14 名（韓国、スペイン、台湾、中国、フランス、ブラジル）

【授業概要】
参加した授業では「日本の行きたい旅行先」をテーマに、留学生がそれぞれプレゼンテーションのための文章とスライドを作成し、発表するという活動を行いました。文章やスライドは主に三段階に分けて作業が進められ、段階ごとに先生が内容や文法のチェックを行いました。文章やスライドはオンライン上で共有され、留学生同士でそれらに質問やコメントを加え、そのコメントをもとに文章やスライドを修正することもありました。

【実習生の役割】
留学生が書いた文章を添削したり、日本語表現の質問に答えたりしました。留学生の行きたい旅行先については、その場所へ行きたい理由や、そこでやりたいことなどについて質問し、一緒に話しました。

【学んだこと】
このクラスは初めに先生が提示したテーマについて、ランダムな順番で各留学生が話をすることから始まります。留学生同士で次に話す人に話しかけるシステムにすることで、お互いが名前を覚えやすいようにしている所に先生の工夫を感じました。留学生の日本語レベルについて、会話はとてもスムーズにできる印象でしたが、書き言葉で苦戦しているようにみえました。「てにをは」の使い分けや、表現の微妙な違いを説明することが難しかったです。

○総合日本語Ⅲ（担当：伊藤）

担当教員:苅谷太佳子先生
学習者：9 名（韓国、台湾、中国、フランス）

【授業概要】
このクラスでは社会的なテーマについて自分の経験意見を伝え合う活動を行いました。毎回ペアやグループでの活動が行われ、学生同士が積極的に日本語で交流する機会が設けられていました。また、定期的に発表の時間もあり、自分の意見や考えを表現する力を養う場となっていました。
目的：①社会的なテーマについてクラスメートと意見や考えを伝え合う
②お互いに意見・考えを伝え合うことで、学びを深める
③学びを深めることで、日本語能力も高める

【実習生の役割】
留学生とともに授業に参加し、必要に応じて日本語のサポートを行いました。具体的には、ペアワークやグループディスカッションの補助やレポートの添削を行いました。メディアリテラシーがトピックの授業では、自分の国の CM を発表する機会があり、私も日本の CM を紹介し、その特徴や文化的背景について説明しました。

【学んだこと】
14 回目・15 回目の授業では、留学生たちがこのクラスでできるようになったこと、できるようになりたかったができなかったことについて発表しました。漢字圏以外から来ている留学生が漢字を何も見ないで書くことに苦戦していることを知り、日本語学習の難しさを改めて感じました。それぞれの国の文化や価値観を紹介し合う機会が多く、異文化理解を深めると同時に多くの知識を得ることが出来ました。

○会話・聴解Ⅱ（伊藤）

担当教員：苅谷太佳子先生
学習者：8 名（台湾、中国、ロシア、ドイツ、フランス、スペイン、ブラジル）

【授業の概要】
このクラスでは、身近なトピックについて話し合い、発表をします。身近な場面での会話に、人間関係や状況を考えながら参加し、流暢なやり取りができることを目指します。最後の授業では、成果報告として「将来どうなりたいか」について発表をしました。発表後は発表者に励ましの言葉を伝え合いました。
～授業の流れ～
1.ウォーミングアップ
2.聞き取り練習
3.重要表現の確認
4.ロールプレイ

【実習生の役割】
会話のパートナーやグループワークの補助を行いました。また、練習問題のサポートを行い、答え合わせをやりました。意味が似た言葉をどのように使い分けるのかなどといった日本人の感覚を共有しました。

【学んだこと】
日本語を普段意識せずに使用しているため、留学生の方に質問されることで初めて気づくこと

が沢山ありました。自分が当たり前だと考えていた表現や使い方が、いざ説明しようとすると難しいことを実感し、日本語について改めて考える機会になりました。また、「支援する」という一方的な意識ではなく、お互い学び合うことの大切さを学びました。さらに、先生が誤りを直接指摘するのではなく、より自然な表現に直して復唱される方法をとっていらっしゃったことが印象的でした。そうすることで、学習者が萎縮せず自然な日本語を身につけられると思いました。この授業を通して、日本語を教えることは単に正誤を指摘することではなく、相手の立場に立って一緒に考えることが重要であると学びました。

○日本語実践Ⅱ（担当：米山）

担当教員： 池谷日都美先生
学習者： 14 名(台湾、ブラジル、スペイン、フランス、ポルトガル)
【授業概要】
このクラスでは、食文化や家、宗教など、身近なテーマについての語彙を学んだあと、グループに分かれてテーマに沿ったプレゼンテーションを行います。
テーマ例：宗教と食文化、自分の家

【実習生の役割】
基本的に見学を行いました。加えて、留学生の質問に答えたり、発表に対して質問やコメントを行ったりました。

【学んだこと】
この授業では、プレゼンテーションに対して質問が活発にでていたことが印象的でした。ペアワークでも意見がたくさん交わされている感じがしました。また、内容も、多くのが詳細に調べて発表していることが分かり、勉強になりました。また、プレゼンテーションの中での言葉の使い方に違和感を持つことがありましたが、上手くそれを説明することができませんでした。もし自分が添削をする立場になった時、自分自身がその言葉に対してどんな感覚を持っているのかを理解し、どう説明するのか、ということに気をつけていきたいです。

○総合日本語Ⅱ（担当：米山）

担当教員：藤森秀美先生
学習者：6 名(ウズベキスタン、フランス、ポルトガル、スペイン、ブラジル)

【授業概要】
このクラスはグループディスカッションやポッドキャストの制作などの様々な活動を通して日本語

を学ぶ授業です。他にも、ポスター発表などの活動を行っているようです。グループディスカッションはファシリテーター、タイムキーパー、書記、発表者という4つの役割を学んだあと、グループでさまざまなディスカッションをします。ポッドキャストでは、配信のテーマに沿って原稿を書き、録音するだけでなく、実際に配信した学生もいたようです。

【実習生の役割】
必要に応じて日本語の質問を考えたり、グループディスカッションで人が足りない時に参加したりしました。
【学んだこと】
ポッドキャストの制作やディスカッションなど、実践的な活動を通じて日本語を学ぶのが面白いと思いました。グループディスカッションではテーマを選ぶことがあったのですが、政治的な要素を含むものもあり、それを扱うことは少し難しいと思いました。また、グループディスカッションを時間内で終わらせる、というものは難しく、私が補助として参加した際も思うようにできませんでした。実践的な活動を用いた授業を行うことは、日本語以外の知識も求められると分かりました。

2－3. 日本語ボランティアシンポジウム 2024

上村 紗生

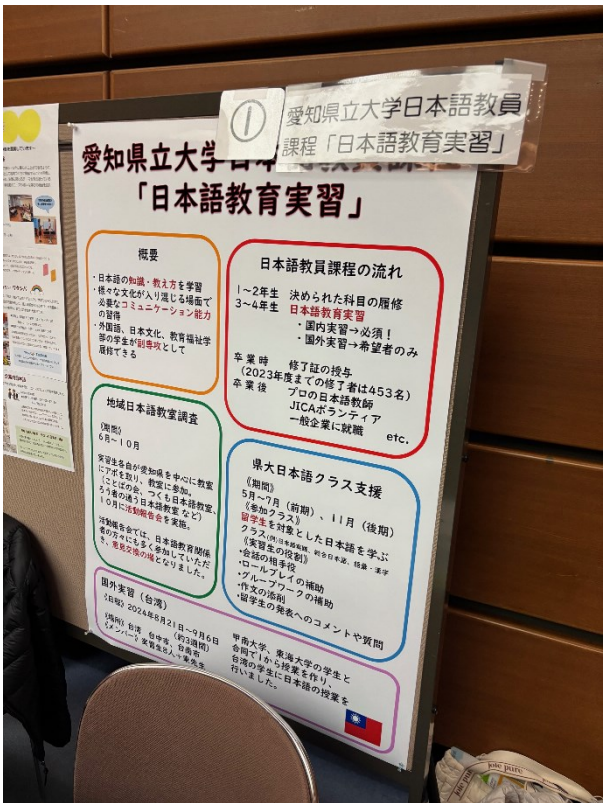
概要

テーマ:「ライフステージと日本語」
開催日:2024 年 12 月 7 日
開催場所:名古屋国際センター 別棟ホール
参加者:日本語学習支援に携わっている方、関心のある方

ライフステージと日本語教育の関わりについて基調講演及びパネルディスカッションを通して各ライフステージにおける日本語教育について考えることができました。

教室交流会「聞いてみよう!教室のリアル」

東海地域で活動されている日本語教室やボランティアグループの方々、またそれらの活動に興味を持っている方々に混ざり、「愛知県立大学日本語教員課程『日本語教育実習』」としてブースに参加しました。ブースではこれまでに実習で取り組んできたことや学んだことをまとめたポスターや日本語教育実習報告書を通して愛知県立大学の日本語教育実習について紹介しました。ポスターは、実習生で作業を分担し、昨年度のポスターを改良する方針で作成しました。



（愛知県立大学日本語教員課程「日本語教育実習」のブース）

当日は想像以上に多くの方が足を運んでくださり、ポスターや日本語教育実習報告書をご覧になりました。また、実習生に質問をされる方も多く、地域日本語教室の選び方・参加日数・教室に対して感じていること等といった地域日本語教室に関する質問や、日本語教員課程そのものへの質問や日本語教員課程をとっている学生についての質問等、様々な質問をいただきました。加えて、ブースにいらっしゃった方の中には、ご自身の所属する教室へお誘いしてくださる方もいらっしゃいました。ここまで大学生の日本語学習支援活動に関心をもたれていること、大学生ではなく一人の日本語教育に携わる者としてみなされていることに大変喜びを感じました。ブースにいらっしゃった方との情報共有の時間も短く感じられるほど大盛況していました。

愛知県立大学のブースでの活動紹介後は、他のグループのブースでお話を伺う時間もあり、各教室の特色ある活動内容を知ることができました。

反省

ブースでの紹介活動中にいただいた質問の中で、日本語教員課程が登録日本語教員の資格取得の際にどのような利点があるのかという質問等の登録日本語教員と日本語教員課程との関係についての質問がありました。これらの質問は答えることが特に難しく、先生が代わりに答える場面があり、学生が登録日本語教員の資格取得に関する情報や日本語教員課程と資格取得に関する知識をより深めておく必要性を感じました。

加えて、愛知県立大学のブースに対する反省点としては、机上資料が昨年から減り、日本語教育実習報告書のみとなっていたので、来場者のことを考えポスターを小さく印刷した資料を置いておく等と言った工夫があっても良いのではないかと感じました。

また、自分自身の反省点としては、自分が他のグループのブースを回り活動内容に対する疑問点を伺う時に、控えめに行動したためにできなかった質問があったり、ブース担当者に余裕ができるまで待ったために他のブースを回る時間が少なくなってしまうようなことがあったりと、時間を有効活用しきれなかったので、もう少し時間を考えて効率的にブースを回れれば良いと感じました。

基調講演「ライフステージによりそう日本語教育:地域で広がる学び合い」
講師:松尾慎氏（東京女子大学 教授、Villa Education Center 代表）

ミャンマー出身難民当事者とともに難民の日本語教室活動(Villa Education Center)を立ち上げ、VEC で代表理事を務める東京女子大学教授松尾氏による基調講演では、VEC での活動についての話を聞くことができました。この基調講演の中で印象的だったのは、活動は全員が学び合うことが目的であるということ、活動中のコミュニケーションには否定されない安心感があることで活動参加者は活動に積極的に参加することができるということで、このことを含め講演のなかで語られたことには自分の今後の日本語教育の活動にも生かせるヒントがたくさんあり、大変有意義な講演でした。

パネルディスカッション「日本で暮らしてきて思うこと」

松尾氏をコーディネーターとして、バスネット サグン氏、伊藤クリスティーナ氏、徳森エリカ氏、木下貴雄氏の 4 人をパネリストとしてパネリストディスカッションが開催されました。各々の来日前後のことや日本での生活と日本語、今の生活や今思うことについての話を通し、在日外国人の方の多様なバックグラウンドや日本生活で感じることを学ぶことができました。

2－4. 外部講演会参加

澤田 瑠依・村林 芽明

今年度は、東海日本語ネットワーク（TNN）などが定期的に開催している、地域日本語教育や多文化共生などに関する講演会の中から、各自が 2 つ以上選んで参加した。合計 9 講座への参加があったが、本稿では 2 講座を取り上げ、概要および実習生の学びを、一部紹介する。

◆ 2024 年度春季大会一般公開プログラム「複言語・複文化主義と日本語教育—教師養成及び教育実践現場の課題と展望—」（主催：日本語教育学会）

概要

ヴォロビヨワ・ガリーナ氏（キルギス共和国　元ビケシク国立大学東洋国際関係学部日本語日本文学学科准教授）、亀田美保氏（大阪 YMCA 日本語教育センターセンター長）、名嶋義直氏（琉球大学グローバル教育支援機構教授）、李在鎬氏（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）（五十音順）によるお話。まず、各登壇者から日本語教育に従事する立場に基づき、またそれぞれの専門的視点から「複言語・複文化主義と日本語教育」についての考えが示された。その後、「複言語・複文化主義とはどのようなものか、またそれらの課題とは何か」、「複言語・複文化主義を実現するには、どのような素養、技能、知識を持った日本語教師が養成されるべきか、またそのためには何が必要か」、「複言語・複文化主義の視点から、多様な背景を持つ日本語教師同士の協働をどのように実現していくか」といった 3 つのテーマについてディスカッションが行われた。

所感

○ 特に印象深かったのが、亀田氏が多言語・多文化社会を複数の言語・文化が存在する多様な社会と定義していたことで、今まで言っていた多文化社会というのは状態のことだったということに気付かされた。

○ 各登壇者の複言語・複文化主義の話を聞いていて、多文化社会の状態はとっくに過ぎていて、これからはどんな言語・国籍であろうと、個人にフォーカスを当てる複言語・複文化主義でいかないと少なくとも日本は回っていかなくなるのではないかと感じた。

○ 多文化という観点でみると、日本語教育の場は複言語複文化を学ぶ最高の場であるという亀田さんの話を聞き、日本語学習の対象に外国人や外国ルーツのある人だけでなく、多文化に触れたい日本人も組み込むことによって、より活発で地域の繋がりを感じられる、地元の日本人も楽しめる場になるように思った。

○ 現在多様性や多文化がうたわれる社会の中で、国籍というフィルターを介してその人を決めつけるのではなく、一個人として理解しようとすることが大切だということを学んだ。

○ 多言語・多文化主義を受け入れるには時間がかかるけれど、諦めずに色んな人と関わる機会を継続的に見つけていきたい

◆ **第 4 回お話を聞く会「知ってほしい！インドネシアのホント～私が感じたインドネシアと日本の違いを通して～」（主催：東海日本語ネットワーク）**

概要

インドネシア出身の NIC 地球市民教室講師であるハフィヤンダ ラザン（Hafiyanda Razan）氏が、大学卒業後に日本に来て感じた母国との違いについてのお話。言葉に関する話のほか、食べ物や飲み物、宗教などにおける文化の違いについても紹介があった。自身が日本語を勉強する際に苦労したこととして、ひらがなやカタカナ、漢字といった文字の多さ、漢字の音読み・訓読み、助詞や同義語、イントネーションなどを挙げた。

所感

○ 同義語をどのように区別し、使用するのか、単語の発音を教えるだけでなく、一個一個を説明し、例文を出すのが日本語教育上では非常に重要かなと思う。

○ インドネシアには約 700 の民族語があるそうで、方言などといったようなものではなく、お互い全くわからない言葉だそうで驚いた。同じ国の人だとしても、必ずしも同じアイデンティティを持っているわけではなく、彼らを一括りにしてはよくないのだなと改めて感じた。

○ 日本語学習者のなかには、読み書きよりも先に日常生活で必要な会話の習得を望んだり、文法の勉強より会話の練習のほうが楽しい、と感じたりする人も多くいると思うが、日本語を学ぶ難しさの一つとして文字の問題は避けられないなと感じた。

○ イントネーションが難しいという話の中で、イントネーションは方言によって異なることもあり、それを覚える意味があるのか疑問だと言っていて、確かにその通りだと感じた。イントネーションの学習方法やその重要性について、もっと知りたいと思った。

その他に実習生が参加した講演会の名称は以下の通りである。

・高齢化する外国人住民：日本の年金制度と介護保険制度（主催：愛知県立大学）

・第 2 回お話を聞く会「外国ルーツの子ども・若者を地域で育むために」～支援者が知っておくこと、配慮するとよいこと～（主催：TNN）

・外国につながる子どもと教育－日本での実践と途上国の教育支援から学ぶ－（主催：教育協力ウィーク事務局）

・定住型日系ブラジル人と日本の地域社会 ～豊田市での多文化共生と次世代育成～（主催：JICA 横浜 海外移住資料館）

・第 6 回 研修会 お話を聞く会 「今、ムスリム家族の子ども達が増えている理由と現状」（主催：TNN）

・多文化共生セミナー「多様性豊かな社会の一員として生きていくために」（主催：公益財団法人 かながわ国際交流財団）

・シンポジウム反省会（主催：TNN）

さまざまな立場で日本語教育にかかわる人の話を聞き、日本語教育についてより多角的な視点から理解を深められる非常に良い機会となった。

2-5. Facebook

丹羽 琴美・手塚 渚月・深田 琴音

本校日本語教育実習の Facebook では、授業の様子や実習生が感じたことなどを記録してきました。

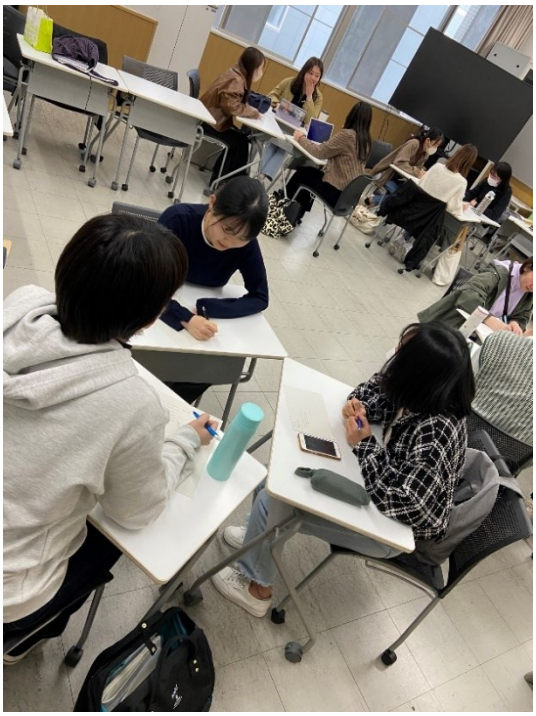
Facebook には本稿では掲載しない写真や台湾で実施された国外実習の様子も投稿しています。ぜひご覧ください。

愛知県立大学日本語教育実習＠kendainihongo

https://www.facebook.com/kendainihongo/

〇4 月 10 日

本日は、2024 年度日本語教育実習の第 1 回目でした。アイスブレイクとして、3 人 1 組になり、他の実習生を紹介するスライドを作ってもらいました。初対面で緊張しているのではと思っていましたが、どのグループも楽しそうに話しており、良いスタートを切れたのではないかなと思います。私は SA を務めるのが初めてで、少し緊張していますが、実習生のみなさんと一緒に頑張っていきたいと思います。(SA：曽田)



〇4 月 17 日

2024 年前期 2 回目の授業は前回授業の振り返りと、前回作成した他の実習生を紹介するスライドの発表を行いました。性格、趣味、苦手なこと、抱負などを共有し、お互いを少しでも知ることができたと思います。日本語教育に関わろうと思ったきっかけなど、他の実習生のバックグラウンドを聞くこともでき、学ぶことも多かったです。個性溢れるメンバーで、私自身これからの 1 年間がとても楽しみになりました。 後半は 1 年間の予定確認を行いました。様々な実習活動が予定されており、多くのことが吸収できる一年になると思うと、期待が膨らみました。私は 4 年生のため、卒業論文などで忙しくなると思いますが、地域日本語教室や、留学生クラス参加をはじめ、積極的に参加したいと思います。（豊岡）

〇4 月 24 日

本日は 2024 年度日本語教育実習の第 3 回目の授業で、東海日本語ネットワークの米勢治子先生による特別講義でした。

今後地域日本語教室に参加する上で重要なことをたくさん学ぶことができました。地域日本語教室の目的や共生社会の実現のための日本語教育のあり方、日本語教育人材に求められることなど、これからの活動において心得ておくべきことをたくさん吸収できました。今後地域日本語教室に参加する際、本日学んだことを振り返って臨みたいです。（坂根）

○5 月 15 日

本日は、日本語教育実習第 4 回目の授業で、東海日本語ネットワークの松本一子先生による特別講義でした。日本語教育の中でも、特に日本語の指導が必要な子どもたちについての講義を聞きました。彼らが抱えている課題について、在留資格や中学校・高校卒業後の進路、そのような子どもたちへの取組みといったさまざまな観点から学ぶことができました。特に印象に残ったのは、支援者が日本語の支援をすることはもちろん、子どもと親の関わり方も重要であるということです。子どもが話している日本語が難しくて、親が理解できないことや、学校卒業後の進路を決めるため際に、子ども本人だけでなく親への説明も不可欠になることは、子どもたちがぶつかる高い壁であると感じました。日本語指導が必要な外国人児童生徒について知識を深め、今後の活動に活かしたいです。（手塚）

〇5 月 18 日

本日は AIA（愛知県国際交流協会）を訪問し、国際交流や人材育成、多文化ソーシャルワーカーによる支援まで、多岐にわたる取り組みをご教授頂きました。 特に私にとって初めての現場を見る機会であった日本語教室の見学では、多くの学びがありました。ボランティアの方がどんな教材で、どのような授業展開をされているのか、学習者の反応はどうか直接学ばせて頂いたことで、実習への気持ちがより高まった時間でした。教室内は、学習者の日本語レベルに合わせて国籍を問わずグループが構成され、初級は英語での確認を交えた文法の授業、上級以上では日本語のみで会話に力を入れた授業が行われていました。同じ空間で様々なレベルの学習者が学ぶことは、成長していくビジョンを描くことができ、日本語学習のモチベーションに繋がるのではないかと考えました。日本で 2 番目に外国人が多く住む愛知県における国際交流の発展の可能性を強く感じ、自分もその一員として貢献したいと考えました。(前川)

○5 月 22 日

5 月 22 日は、東海日本語ネットワークの米勢治子先生から地域日本語教室についてのお話を伺いました。開催日時、開催場所、主催者、活動内容などが異なる多様な地域日本語教室があり、その特徴に合わせた支援者、学習者が集まることがわかりました。また支援者、学習者にも様々な特徴があり、それぞれ目指す活動が異なることもわかりました。また、地域日本語教室には、支援時間が足りない、誰がいつ来るかわからない、多様な背景をもつ学習者への対応がボランティアには難しいなどの課題があることを知り、そこから解決策を考え意見交換を行いました。子どもを預かれる状況を作る、文法シラバスではなく場面シラバスにする、授業を録画し後から見れるようにする、予習課題を出すなど、休むことを前提に、休んでも参加しやすい授業にするための意見が多く出され、一回でも参加できる意義を実感する授業づくりが大切であることに気がつきました。実際の教育現場のリアルな課題を知り、話を聞くだけでは見つからない更なる課題やその解決方法を、実際に地域日本語教室に参加することで見つけていきたいと感じました。(朝岡)

○5 月 29 日

本日は第四回目の松本一子先生の特別講義及び第五回目の AIA(愛知国際交流協会)訪問時の振り返りを行い、日本語教室での活動イメージについて千葉先生に講義していただきました。振り返りでは、各々の感じたこと、疑問をクラスに共有し、先生方の実際の経験も踏まえた新たな発見を得ることができました。また、日本語教室での活動イメージについての講義では、千葉先生の経験談や現時点で実習をしている実習生の様子を知ることができたので、今後の活動に活かしていきたいと思います。(上村)

○6 月 5 日

本日の授業では前半に第五回目・第六回目の授業の振り返りを行いました。それぞれが感じたことや疑問に思ったことを全体で共有し、新たな気づきや学びに繋がりました。授業の後半は、今後各自が調査する地域日本語教室の候補を全体で共有しました。先生方から学生が候補にあげた地域日本語教室について具体的な実態を教えていただいたり、アドバイスをいただきました。今後本格的に調査に行く教室に行く際に参考にしたいと思います。(伊藤)

〇6 月 26 日

本日の授業では前半に第八回目の授業の振り返りを行いました。各グループで、前回疑問に思ったことや、地域日本語教室に参加する中で感じたことなどを、全体で共有しました。千葉先生からもコメントをいただき、多様な考え方を理解することに繋がりました。授業の後半は次回の授業で行う予定のプレゼンの練習を行いました。それぞれ、調べてある内容の量に差があるものの、たくさん質問をしたり、互いのプレゼンをみたりしたことで、次回クラスの前で行う良い練習になったと思います。私は、グループのメンバーの発表のなかで、地域日本語教室は、ただ日本語を学ぶための場ではなくて、地域の人や同じ境遇の人との関係を深める場でもあるという意見が印象に残っています。「繋がり」は生活をする中で大切なので、外国人の人にも、日本人の住民にも、このような場があると認知されて欲しいと思いました。次回は他のグループの実習生のプレゼンも聞ける予定なので、たくさんの意見や状況を知ることで、日本語教室に対する理解を深めたいです。(丹羽)

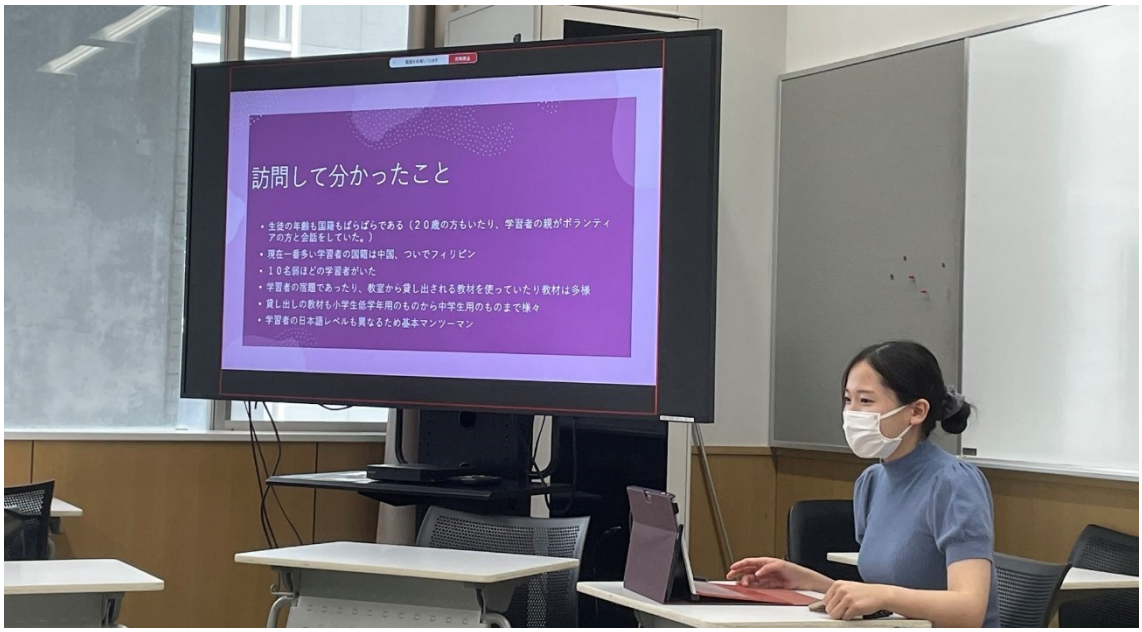
○6 月 29 日

本日は有森丈太郎先生による「性の多様性と日本語教育：包摂的・肯定的な学習環境を考える」という内容についての講演をしていただきました。講演は 2 部に分かれており、第 1 部は講演・グループディスカッション、第2部は講師を含めたランチミーティングと参加者のネットワークづくりでした。第 1 部での講演内容についてですが、まず、性の多様性についての紹介です。性の多様性には関わる 4 つの要素があります。それは①性的指向（好きになる性）、②性自認（心の性）、③性表現（表現する性）、④生物学的性（体の性）です。続いて、インクルーシブ教育に関する内容です。インクルーシブ教育とは「個々の背景や特性を理由に学びの場から排除されたりせず、だれもが質の高い教育を受けられる教育実践」です。この教育の目的は UNESCO（2009）では、多様性に対する否定的な態度や対応の欠如から生まれる排除をなくすことと述べられています。排除をなくすために、社会では「プライドイベントの開催」や「パートナーシップ制度」などの方針を打ち出しました。教育上でも様々な努力をしました。例えば、児童・生徒への対応や、教職員向けの研修などです。さらに、学びのバリアフリー化の内容です。学びのバリアフリーにするために、排除の要因、教材の問題点、ジェンダー化された日本語の扱いの 3 つの面から考えることが必要です。最後に、グループディスカッションを行いました。

講演内容で最も印象に残っていること一つ目は、テキストの問題です。自分も多くの日本語テキストを持っており、文法や印刷上の問題があるかどうかだけを見ますが、「性の多様性」の面からこの表現が適切かどうかということを考えたことがありませんでした。テキストはそのまま使うのではなく、多角度、批判的に見るべきだということがわかりました。二つ目は、自分は日本語を学んだ時、先生がこの単語は女性用の言葉ですよ、この言葉は男性用の言葉ですよと言っていました。その時はなにも考えずに、当たり前に受け止めました。自分は女だから、女性言葉を使うべきだと思います。しかし、構築主義の考え方によって、ことばによって、主観性（自分の意識、願望など）がアイデンティティを構築されます。つまり、アイデンティティはことばに影響を与えるのではなく、ことばはアイデンティティに影響を与えるのではないかと考えられます。（王）

〇7 月 3 日

本日は地域日本語教室の調査報告ついての発表を授業内で行いました。発表後数分間発表に関する質問の時間もあり、疑問に思ったこと、具体的に聞きたいこと等を質問しました。入会費が必要な教室、参加費が無料な教室、オンライン対応可であるところ等様々な特徴を持った教室の活動や概要について知ることができました。発表していただいた教室の活動場所も、名古屋市、小牧市、長久手市、土岐市など散らばっていてその地域特有の教室運営について学ぶことができました。発表を聞いていて、学習者は大抵どこの教室も中国、フィリピンの方が多いと知り、東海地方の在留外国人の国籍の割合と一致していると感じました。また、ボランティアの人手不足と学習者の継続的な日本語教室での活動の 2 点が大きな課題であると感じました。しかし学習者の出席欠席を全く気にしない教室も存在していて非常に興味深かったです。私自身はコロナウイルスが流行した際に世界的に広まったオンライン授業というものが、あまり地域日本語教室には浸透していなかったことに驚きました。そして私たちは今回の訪問を通してボランティアの方とコミュニケーションを取りたい、様々な教授法を学びたい、自分が訪問した以外のクラスの授業を見てみたい等の気持ちが芽生えたため今後の地域日本語教室への参加を通して、学んでいきたいです。（深田）



〇7 月 10 日

本日は前回に続き 3 人の学生が地域日本語教室の発表を行いました。また、地域日本語教室の発表や 6 月 29 日に行われた講演会の振り返りと意見交換を行いました。実習生の行く教室の在り方はとても多様で、その発表から学ぶことが多くありました。例えば、学習者だけでなくボランティアの特徴や教室設立の背景にも注目することで、その教室の役割や特性を俯瞰して見られるとわかりました。日本語教育と性別との関わりを学んだ講演会を踏まえ、ジェンダーに配慮した教え方に悩んだ経験を発表した学生もおり、とても考えさせられました。地域日本語教室へ参加する際には、本日学んだ視点を活かして客観的に教室のあり方を考えてみたいです。（米山）

〇7 月 24 日

本日は前回までの授業の振り返り、現在各々が参加している地域日本語教室でのボランティアの状況、オープンキャンパスでの日本語教員課程の紹介方法などについて話し合いました。前期のまとめとして、「地域日本語教室への参加前と後での印象の変化」と「参加する上で見えてきた課題」をグループで共有しました。印象の変化については、参加する前の予想よりも学習者に親身になって対応している教室が多いという意見が多かったです。課題については、地域日本語教室で長年ボランティアをしている高齢の方との関わり方の複雑さについての意見が出ました。複数の教室でスマホを学習時にどう扱うか悩んでいる実習生がおり、高齢のボランティアの方と教え方が違うことについてモヤモヤした気持ちがあるようでした。例えば、説明しにくい単語を高齢のボランティアの方は絵や簡単な言葉で時間をかけて説明している際に、実習生のボランティアがスマホの画像検索で一回で終わらせてしまうことに抵抗があるという悩みが共通していました。学習者との関係はもちろん、ボランティア同士の関係もネガティヴな感情が少ないように保つことがより良い教室運営につながるのかなと感じました。授業の後半では、オープンキャンパスでの役割分担を決めました。日本語教育のおもしろさや前期での学びを来てくれた高校生にうまく伝えられるよう、頑張りたいと思います。（前田）

〇7 月 31 日

本日は、オープンキャンパスの準備を進めました。紹介する内容としては、愛知県立大学の日本語教員課程、日本語教育事情・社会事情、実習生の生の声、国外実習、留学生日本語クラス、地域日本語教室の 6 つがあり、前回決めた分担にそって作業を進めました。ペンや模造紙、パワーポイントなどを使って、分かりやすくなるように工夫しながら制作しました。来週の 7 日、8 日にオープンキャンパスがあります。来てくれる高校生に、日本語教員課程がどのようなものなのかを、分かりやすく伝えられるように頑張りたいです。（柴田）

〇8 月 7 日

本日は長久手キャンパスのオープンキャンパス 1 日目でした。1 日目の対象学部は日本文化学部、教育福祉学部、情報学部です。日本語教員という職業自体あまり知らなかったとおっしゃる方も多く、少しでも多くの方に知ってもらうためにまず呼び込みから始まりました。そして事前に作成したポスターを掲示し、来場してくださった高校生や親御さんに日本語教員課程について紹介をしました。最後に感じたことを付箋にコメントとして記録していただいたのですが、「日本語教育について詳しく知り、興味が湧いた。」、「日本語の教科書を初めて見た。英語圏の人が私たちの英語の教科書を見る時はこんな感じなのかなと不思議に思った。」という声が多かったです。また愛知県の特徴から「この地域では日本語教育は重要だと感じた。」というお声も頂きました。来場者の方と交流する中で、愛知やその他東海地域の出身の方に「自分の地域や学校に外国人の方は多いですか？」と質問したところ「言われてみれば結構多いね」と答えてくださる方が多く、私自身もやはりこの地域ならではの特色なのだと改めて実感しました。愛知県立大学のこの日本語教員課程では、そんな地域の特色の強みを活かした日本語教育を学べていると感じています。オープンキャンパスは明日も開催されるので、引き続き様々な方に愛知県立大学の日本語教員課程について知ってもらえたらなと思います。（村林）

〇8 月 8 日

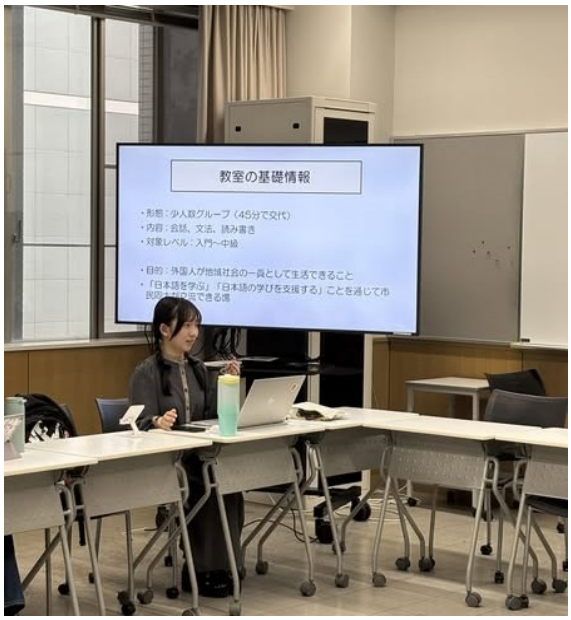
本日は長久手キャンパスのオープンキャンパス 2 日目でした。2 日目の対象は外国語学部でした。日本語教育に興味がある方もいればあまり知らないという方も多く、日本語教育とはどのようなものか、ということから紹介しました。展示として、日本語教育の場で使われている教科書を置いていたのですが、それを見た高校生から「ローマ字でふりがなが書いてあるものはありますか？」と聞かれて、そういえばそういう教科書は見たことがないなと、私自身が新しい視点に気付かされる場面もありました。また、日本語教員課程だけでなく、大学生活や受験そのものに関する質問も多くいただき、それぞれの学科の特色や留学などについても紹介しました。来てくれた方たちが、少しでも日本語教育や県大について理解を深めてくれていたら嬉しいです。（澤田）

〇10 月 2 日

10 月 2 日から後期の授業が始まりました。久しぶりの実習ということで、各々で取り組んでいる地域日本語教室調査の進捗状況をお互いに報告し合うことや、今後の実習予定について確認しました。10 月には地域日本語教室調査報告会があります。気を引き締めて取り組んでいきたいです。また夏休みには実習生、AT の 8 人が国外実習のため台湾に行きました。台湾で学んだことを実習生全員で共有し、他の実習生の新たな発見につながるといいです。(豊岡)

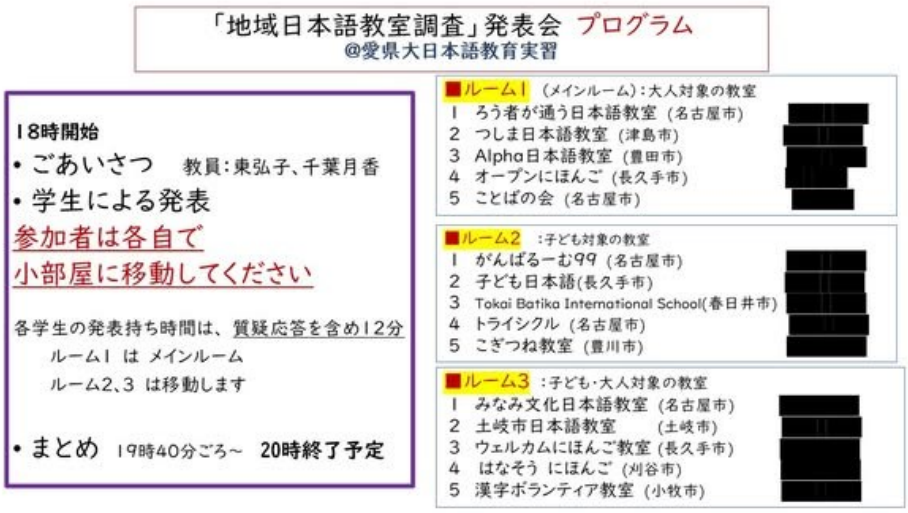
〇10 月 16 日

本日(10 月 16 日)は 10 月 23 日の地域日本語教室発表会に向けてのリハーサルを行いました。実習生各自が通っている日本語教室での活動内容をまとめたパワーポイントを用いて発表しました。お互いのパワーポイントをみて何を改善すべきか実習生同士で意見を交換することによって客観的な視点を聞くことによって改善すべき点を見つけることができたと思います。今日見つけた改善点を持ち帰って来週の発表に向けて発表準備に磨きをかけて本番に臨みたいです。(坂根)



○10 月 23 日

10 月 23 日の報告です。本日は、地域日本語教室調査発表会の本番を zoom にて行いました。実習生がお世話になった地域日本語教室の方や、国際交流協会、定時制高校の先生など、日本語教育に関わる方々に 20 人以上もお集まりいただき、発表をすることができました。私たち学生のような若い人が、地域日本語教室に参加すると教室の雰囲気が明るくなって良いとのお言葉をいただけたので、訪問して良かったなと思いました。この言葉を励みに、今後も継続して地域日本語教室に参加したいです。（手塚）



〇10 月 30 日

本日は、前回の地域日本語教室報告会での簡単な振り返りや聴講者の方々の感想や質問についてのまとめをしました。自分達のグループ以外でも、私たちの活動に関して言語教育や国際交流に携わって活動している方々から多くの前向きなコメントをいただいたことを知り、とても励みになると同時に、私達が今後考えていくべき課題も見えました。また、留学生のクラス支援や国外実習報告会など今後のスケジュールを確認し、これからの自分達のやるべきことを明確にしました。（朝岡）

〇11 月 20 日

本日は愛知教育大学川口先生より、外国につながる子どもたちへの支援を考える講義をしていただきました。日本語指導が必要な児童生徒が日本で最も多い愛知県の特徴と歴史的背景を再認識し、外国ルーツの子どもの母語と家庭との繋がりに関するケースついて、学生同士で意見を交わしました。日本語指導が必要な児童生徒には、外国籍の親を持つ日本で生まれた子どもや、保育園から日本で過ごす子どもも含まれることの認識の必要性をご教授くださいました。また、母語や母国の魅力と大切さを子ども自身が理解するためには、当事者の子どもが所属する社会に対するアプローチ(例えば学級での母語を使ったゲーム感覚のアクティビティ)が効果的であると学びました。このような取り組みは、外国ルーツの子ども自身の自己肯定感向上、子ども同士の理解に繋がるだけでなく、教師にとっても学びの機会になると考えました。(前川)

〇12 月 4 日

週末に行われる日本語ボランティアシンポジウムに向けて掲示物を作成しました。概要・日本語教員課程の流れ、地域日本語教室調査、県大日本語クラス支援の 3 つのグループに分かれて作業を進めました。皆で協力して、良い掲示物を完成させることが出来ました。（伊藤）

〇12 月 7 日

本日は、東海日本語ネットワーク主催の日本語ボランティアシンポジウムに参加しました。午前の部の教室交流会では、愛知県立大学の日本語教員課程としてブースを出展し、国家資格のことや授業に関することなど、多くの方から質問をしていただきました。また、他の教室のブースも見学させていただき、教室の雰囲気や成り立ちなどのお話を伺いました。午後からは、東京女子大学の松尾慎教授による講演を拝聴しました。難民的背景をもつ人々への日本語教育について貴重なお話をしていただきました。その後のパネルディスカッションでは、4 人のパネリストの方に日本で暮らしてきた経験や思いについてお話をしていただき、それぞれのライフスタイルに合わせて日本語教育や生活支援を行うことの必要性とニーズを感じました。1 日を通して貴重なお話をたくさん聞かせていただき、今回のシンポジウムのテーマである「ライフステージに寄り添う日本語教育」について理解を深めることができました。パネリストの方の「外国人も支援者になりうる」という言葉が特に印象に残り、学習者と支援者が学びあう関係を構築することに、「寄り添う」日本語教育の意義があるのではないかと思いました。（澤田）

〇12 月 18 日

本日は川崎直子先生よる就学前の外国にルーツのある子どもの支援についての講義でした。就学前教育のプレスクールと呼ばれる教室についてです。授業では、主に蟹江町で実施しているプレスクールの紹介でした。愛知県では 2017 年に 16 市町村がプレスクールを実施しており、2022 年に 14 市町村が実施しています。実施している市町村が減少した傾向が見られます。指導者の不足、財源の不足が重要な原因になっているようです。家では母語でコミュニケーションを取り、家庭の外では日本語でコミュニケーションを取るという内容がありました。確かに母語を保つのは非常に重要であり、文化的な継続が見られますが、このような環境で育った子供は「自分はだれか」アイデンティティの悩みに直面するだろうと思いました。（王）

○12 月 25 日

本日は 12 月 4 日に参加した TNN シンポジウムや以前の授業の振り返りや質問についてのまとめをしました。特に、地域日本語教室の在り方について議論が盛り上がりました。今まで学んできた知識を基に、自分の意見が出てくるようになり、より話し合いが深くなっています。残り少ない実習ですが、たくさんの考えに触れて、様々な立場で物事を考えられるようになれればと思います。（丹羽）

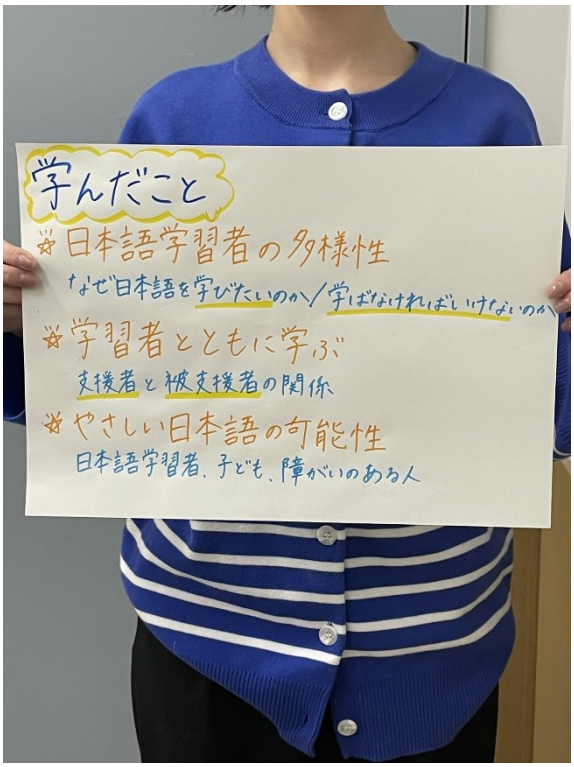
○1 月 8 日

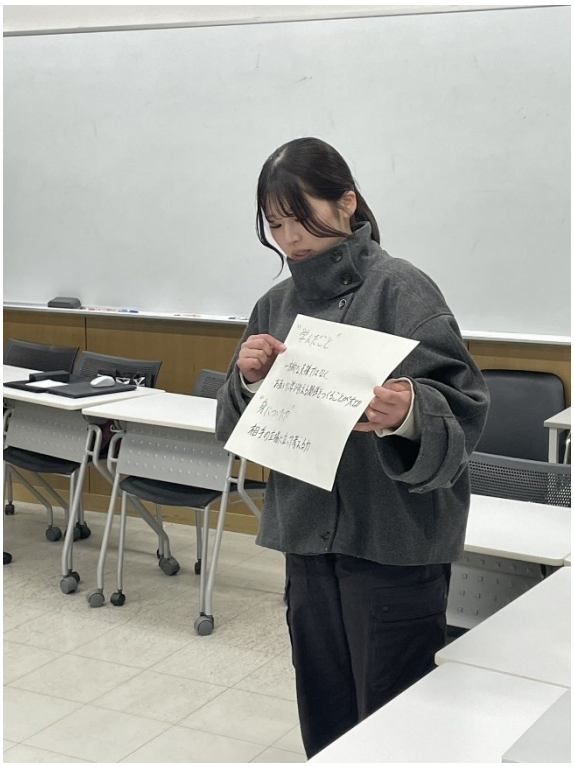
本日は、12 月 18 日の川崎先生によるご講演「就学前の子どもの学習」について意見交換を行いました。私たちのグループでは、蟹江町のプレスクールは、学校説明会での各家庭ごとの通訳設置や、小学校入学後もコンタクトをとれる環境であると言った点でかなり理想的であるとの意見が共通していました。

こういったモデルが全国に普及することが期待されるが、自治体の規模や人材確保といった現実的な課題についても話し合いました。今年度の実習も終わりを迎えようとしており、これから報告書の作成に取り掛かろうとしています。（深田）

○1 月 22 日

本日の授業では、報告書についての確認を行うとともに、実習生が一年間を通して学んだことや身につけたことを発表しました。実習生それぞれが実習での経験を通して様々なことを考え、学びを得てきたのだと分かりました。「実習の前後で日本語教育における支援者と学習者の関係性への印象が変化した」という人も多くみられました。また、この実習では、日本語教育を通して、日本社会や地域の抱える課題についても考えることができたと思います。他の実習生とともに学び、話し合うことで、私自身も新しい視点をたくさん持つことができました。ほんとうに貴重な機会でした。この課程で学んだことは、将来どんな道に進んだとしても、それぞれの糧になると感じています。（米山）





3. 個人レポート

出会いと学びの1年間

豊岡 菜帆

1. 実習全体の学び

実習全体で主に二つのことを学びました。まず一つ目は物事を多角的に見ることです。1年間の日本語実習を通して、様々な人と出会うことができました。それは学習者だけではなく、支援者、教室主催者、行政の人、ボランティアの方など全員立場は違えど、日本語教育に様々な形で関わっている人々でした。地域日本語教室を運営していくにあたって多くの人の立場に立って考えてみると、自分が最善と思ったことも、そうではないことがあるなと感じることが多かったです。特に行政と地域日本語教室現場での考えの齟齬は大きく、日本語教育には多くの改善と可能性があると感じましや。いい教室を作りたい、いい教育を提供したいという思いから学習者の立場ばかりにたって考えるのではなく、いろいろな立場にたって教室をみてみると必要とすべき支援や、改善すべき点が見えてくることを学びました。これらは実習中に多くの講演会や、セミナーで学ぶことができ、すばらしい機会を与えていただいたと思います。特に TNN 日本語ボランティアシンポジウム 2024 では東海地方の日本語教室の関係者の皆さんとお話しすることが出来ました。日本語を教えたい、という気持ちと同時に、かれらの 居場所となるような場所や、安心できる環境を提供してあげたいという気持ち、そして自分自身もボランティアで地域のコミュニティとの輪を紡いでいる方も多く、地域日本語教室の存在意義をあらためて考えなおすことが出来ました。

二つ目は小さな一歩を大切にすることです。日本人として日本語を完璧に教えたいという気持ちがはじめはありましや。しかしボランティア経験を通じて、完璧ではなくてもコミュニケーションはでき、小さなワンステップを実感しながら進むことが大切であると学びました。「先週書けなかった漢字が書けた。」こういった学習者の小さな一歩に着目することで、自分においていたプレッシャーも解け、学習者と楽しく過ごすことができました。また日本語教育業界は改善の余地が大きくあることを、実習を通じて知りました。まだ可能性のある日本語教育だからこそ、小さな変化を大事にするべきであると思います。今日はいつもより多くのボランティアが来てくれた。行政の人が教室を見に来てくれた。小さな変化がいつか大きな変化となり、着実に良い方向に向かうと信じます。まずは日本語教育に興味をもってくれた目の前の人、継続するかはわからないけど、今日来てくれた学習者とちょっとした成長を実感しようと思えました。これらは地域日本語教室訪問や、シンポジウムで多くの人と話しながら学ぶことが出来ました。

2. これからの地域社会と・日本を生きていくために

想像力をもって柔軟に社会に貢献していきたいです。これから日本はどんどん多文化社会に

なっていきますが、相手がどういう立場であるのか、どういったバックグランドをもっているのか、そういったことを考えながら、外国人＝支援対象としてひとくくりするのではなく、同じ地域社会を生きる大事な人材として、ともに良い日本が作っていけるようにしたいです。卒業後は日本語教育とは少し離れた仕事に就きますが、外国人の方と接する機会も多くあるので、4年間で得たことを活かして、相手の立場を想像しながらコミュニケーションをとっていきたいです。

また外国にルーツを持つひとだけではなく、地域住民や周りのマイノリティの人たちに手を差し伸べることの出来る大人になっていきたいです。

3. 後輩に向けて

実習の初め、特に地域日本語教室にひとりで参加し、学習者の方にいざ日本語を教えようとするときは緊張で不安でいっぱいでした。しかし話したいという気持ち、伝えたいという気持ちさえあればコミュニケーションは自然と可能です。実習では多くの場所に立ち合い、多くの人との出会いがあります。恐れることなく、自分から積極的に人と関わり、スポンジのように、固定概念をとっぱらいなにごとも吸収できると新たな価値観や、可能性を学ぶことが出来ます。また実習期間は外部の人だけではなく、違う学部の友達もでき、大学生活がより楽しいものになります。

日本語実習を通して学び

王 暁飛

実習全体の学び

日本語支援を通じて、学習者ごとに異なる課題があることが気づきました。例えば、文法の理解や会話の自信があるかないかなど。最初、私はテキストに沿って支援を進めることを意識していましたが、学習者の反応を見ながら、より双方向的な学習方法が必要だと感じました。

また、日本語支援を通じて、一方的な「教えてあげる」ことではなく、学習者との「相互学習」の過程であることを実感しました。単なる言語の支援にとどまらず、学習者との相互理解を深める貴重な機会であることを学びました。自分自身も学習者の疑問や考えを通じて多くのことを学び、教育や支援など一方的なものではなく、共に学び成長していくことであると強く実感しました。

さらに、実習を通じて、異なる文化的背景を持つ子供たちが複数言語の環境で育てられ、自分のアイデンティティについて、「自分はだれ？」というような悩みを抱えていることに気づきました。このような外国ルーツを持つ子供が日本語を学ぶことで自分のルーツを理解しようとする一方で、日本語がうまく話せないことに対して、劣等感を持つこともあります。また、外国からの移住者の子供たちが母語を維持しながら、日本語も覚えなければならず、言語的なギャップを感じることもありました。そのような学習者に対して、彼らの背景を尊重しながら、彼らが自分のアイデンティティを肯定的に捉えるような支援が非常に重要だと感じました。

これからの地域社会・日本社会で生きていくため

前の部分にも触れましたが、教育や支援が単なる「教える」ではなく、外国ルーツを持つ子供たちの背景を理解し、尊重したうえで、支援を行うことが非常に大切だと思います。しかし、多文化理解の環境を作らなければならないと思います。そのため、地域や社会では、異なる文化背景を持つ人々と積極的に交流し、多文化共生の意識を広める活動を行ったら良いではないかと考えています。また、実習を通して、外で外国籍の親と母語で交流しないというような子供が結構いるようです。なぜかというと、子供たちが「恥ずかしい」と思っているからです。なので、自分のアイデンティティを肯定的に捉え、親のことも肯定的に捉えるようになるため、自分のルーツや親のことを誇りに思えるような環境を整える必要性があります。言語の支援だけでなく、心理的なサポートの環境も整えるべきだと思います。

後輩に向けて

「実習」という言葉を聞くと、「難しいかな」「もし現場に入ったら、自分ができるかな」などの不安な気持ちがあるかもしれませんが、実際にそんなに難しくないと思います。逆に、非常に楽しく、有意な実習です。ボランティアとして地域日本語教室や県大日本語クラスに入って、実際に参加してみて、地域と学校の支援方法が違うところが実感できます。

学習者たちが異なる背景を持つため、日本語支援を行う際、学習者の多様性（文化や習慣や考え方）を尊重し、柔軟な対応を心掛けて行ったほうが良いと思います。

日本語教育実習での成長と学び

坂根 葵

1．実習全体の学び

この 1 年間の実習を通して、日本語教育が単なる語学指導にとどまらず、学習者の文化的背景や社会的ニーズに応じて、学習者一人一人の目的や状況に合わせて、個別にアプローチを変える必要があることを学びました。私がボランティアとして関わった地域日本語教室では、さまざまな文化的背景を持つ方々が参加しており、異なるニーズに応じた支援が必要でした。例えば、簡単な日本語を学ぶ初級者には、ジェスチャーを多めに使ったり、その方の母語を交えたりして、日常会話ができるようにサポートしました。また、学習者が日本語を使う際の不安を感じている場面では、積極的に声をかけ、自信を持って話せるような環境づくり意識しました。ボランティアを通じて単に言葉を伝えるだけでなく、その文化や背景に配慮する重要性を学びました。

さらに、ボランティア活動を通じて、私自身の日本語スキルも向上しました。学習者に説明するためには、“やさしい日本語”でより簡単でわかりやすい表現を使う必要があり、その過程で自分の日本語の使い方にも意識が向くようになりました。地域日本語教室に参加し、学習者の方との関わりの中で日本語や日本の文化、生活について共に学んでいく上で、自身も日本につい

て深く知る良いきっかけとなりました。日本語に関しては助詞の使い方、数の数え方など日本語特有のルールがたくさんあることに気づいたり、普段自分が当たり前のように使っている日本語での表現を噛み砕いて学習者に説明したりするなどして、日本語の難しさを実感するとともに日本語って面白い言語だなと感じました。このように 1 年間の実習を通して日本語の特徴や面白さに気づくことができたのは、地域日本語教室でのボランティア活動や県大日本語クラスで留学生と交流をして、日本語という言語を一歩外から引いて新たな着眼点で見てみたからこそ気づくことができたのだと思います。

2．これからの地域社会、日本社会で生きていくために

これからの日本社会で生きていくためには、言葉だけでなく、文化や社会に対する理解が重要だと感じています。日本語教育は、単に言葉を覚えることだけでなく、日本の社会でスムーズにコミュニケーションを取るための橋渡しとなるものです。特に、地域社会においては、言葉の壁を越えて、互いに理解し合い、協力しながら共生することが求められます。

現在、日本には多様なバックグラウンドを持つ人々が住んでおり、これからますますその数が増えていくと予想されます。その中で、日本語を学ぶことは、単に言葉を使うためだけでなく、社会の一員として、さまざまな文化や価値観を尊重し、共存していくための重要な第一歩となります。地域日本語教室などを通じて日本語を学ぶことで、外国人住民が地域社会にうまく溶け込み、地域活動や社会参加をするための基盤を築くことができるのではないかと考えます。日本社会の一員として生きていくためには、相手を理解し、共に支え合う姿勢が重要です。日本語教育はその土台を作るものであり、私たちがより良い社会を作るために、言葉と文化の理解を深めていくことが大切だと考えています。この実習を通じて、日本語教育がその役割を果たす重要な手段であることを再認識しました。

3．後輩に向けて

日本語教育実習を通じて、私は「教えること」が自分の学びにもつながることを実感しました。皆さんも、実習を通して多くの学びがあると思いますが、特に大切なのは学習者一人ひとりの背景やニーズに応じて柔軟に対応することです。地域日本語教室に参加すると、最初は学習者の方との接し方に戸惑うかもしれませんが、学習者が安心して日本語を学べるようになるためには、まず私たちが「とりあえず話しかけてみる」ことが重要です。このはじめの一歩があれば学習者との信頼関係を築くきっかけになります。

また、言葉だけでなく、文化や社会の理解も一緒に深めていくことが日本語教育には必要です。異なる文化的背景を持つ学習者と接することができるため、言葉だけではなくその人々の価値観や生活習慣も知ることができるので、自分の視野も広がります。この日本語教育課程の履修は、日本語教育への知識だけでなく多文化共生の今の社会に必要な知識をも身につけることができるチャンスです。日本語教師を目指している方もそうでない方も、是非楽しんで実習に臨んでください！応援しています！

日本語教育実習を経験して

丹羽 琴美

実習全体の学び

この実習の一番大きな学びは「互いに学び合う」ということです。私は大学の授業で日本語の授業の仕方や外国人と外国ルーツの人々を取り巻く現状などを学んできました。「教育」と聞くと、「教師が生徒に教える」という関係を無意識のうちに持ってしまい、実際にボランティアにいっても最初は「私が学習者に日本語を教えてあげなきゃ」と意気込んで教室に参加していました。しかし、たくさんの学習者やボランティアの方と話すうちに、徐々に私も学習者から学んでいるのだと考え方が変化しました。日本語についての理解を深めるきっかけになったり、多様な文化を教えてもらえたり、違う角度で日本について考える機会が出来たりと、学習者と関わったからこその学びが多くありました。「互いに学ぶ」ことを実感してから、会話を通して学習者のニーズを把握して、一緒に学ぶことを意識して取り組みました。その結果、学習者とのつながりが増え、彼らのことを深く理解できるようになったと思います。「一緒の立場で、一緒に学ぶ、一緒に楽しむ」、義務のように感じていたボランティアが心から楽しいと思えるようになりました。

これからの地域社会・日本社会で生きていくために

これからの地域社会・日本社会で生きていくために必要なことは、「外国人＝言葉の通じない人」などのように持っている固定概念で判断するのではなく、目の前の人「どんな環境で育ってきたのだろう、何を求めているのだろう」などと相手を深く知ろうという気持ちで接することだと思います。日頃目にするニュースや国のイメージは良いものも悪いものも知らず知らずのうちに頭に定着してしまいます。この先入観が原因となって、無意識に壁を作ってしまうことがありました。しかし、日本語教室で様々な学習者と関わる中で、その人自身と向き合うことが大切だと気付き、それがコミュニケーションを楽に進めることに繋がりました。「固定概念を取り払って、目の前の人と向き合う」、これは何よりも大切だと思います。また、外国人が増えていくと考えられる社会で生きるために、「相手を理解しようとする姿勢」が重要だと感じます。共通言語が無い学習者と日本語教室でペアになったとき、日本語も自由に使うことができないため、どのように学習者に日本語を伝えたらいいのだろうと困ったことがありました。しかし、言葉が通じなくても、ジェスチャーやその人の動きなどに注目することで気持ちを理解できることができ、充実した時間になりました。この経験から相手を理解する姿勢を持って、地域の人に接することが大切だと考えます。

日本語教員課程を取得しようとしている方へ

日本語教員課程を取得することで、外国人を取り巻く環境について様々な観点から理解することができます。実際に日本語教育に携われている先生のお話を聞く機会があったり、日本語教室に参加して先輩ボランティアの人と話したり、実習生と意見交換をしたり、といろんな意見に触れる機会があるので、私自身視野を広げることができたと思います。日本についてもっと知

りたい方、外国人が置かれている現状について多角的に知識を深めたい方にお勧めです。
地域日本語教室に参加しなくできなくても、日々の生活で活かせる大切なことをたくさん学びました。自分の世界が広く深くなる機会なので、ぜひ履修してみてください。

国内実習全体をふり返って

手塚 渚月

1. 実習全体の学び

最初は日本語教育に関する知識はほとんどありませんでしたが、一年を通して、日本で暮らす外国人を取り巻く環境や日本語教育に対する解像度が少し上がったように感じます。私にとって日本は生まれ育った場所であるため、日本で生きていくことに対する困りごとというのが思いつきにくかったのですが、外国人にとっては日本語が分からないことが障害になるというのはもちろんのこと、彼らの居場所やコミュニティを確保する必要があることや、行政などのサポートにつなげるまでのところも難しいことを知りました。

実習の一環として地域日本語教室に継続的に参加し、日本語教室全体では定められたカリキュラムはなく、学習者に合わせた指導をしているということ、文法重視であったり、会話重視であったりと学習の内容もさまざまであることを知りました。また実習生同士で訪問した教室について発表の機会があったことで、地域日本語教室や日本語教育の実態が本当に多岐にわたっているということが分かりました。そして何より日本語教室はただ日本語を学ぶだけの場所ではなく、学習者にとって、また支援者にとっても他者との交流の場になっていると感じました。

2. これからの地域社会・日本社会で生きていくために

この実習を履修する前までの私の大学生活は、家と大学とアルバイト先の往復が主で、地域日本語教室のような地域に根ざした活動に参加したことはありませんでした。実習をきっかけに教室に毎週行くことになりましたが、今では教室の中の一つのクラスの一員として、最近あったことについて話すなど、地域のコミュニティに自分も参加することができていると感じています。

加えてこの実習では、他の実習生と意見交換をしたり、資料作りをしたりと実習生同士の関わる時間が多くありました。最初は自分と同じ専攻の実習生がおらず、心細かったのですが、一年間の実習で他の学科や専攻の皆と話すことができ、仲良くなれたのも実習で得られたことの一つだと感じています。

このように、勇気を出して新しいコミュニティに参加し、学んだ経験は、これから社会で生きていく上でも役立つのではないかと考えます。実習で学んだ知識と積極性を糧に、日本人・外国人問わず多くの人と関わり、継続して学ぶ姿勢を大切にしたいです。

3. 後輩に向けて

「教育実習」と名前がついているので、私たちが一から授業を作って、日本語を教える活動ばかりをしているように思えるかもしれません。実際、私もそうでした。確かにこの一年、地域日本語教室にボランティアとして参加したり、県大の日本語クラスにお邪魔したりする中で日本語を教える場面はありました。「日本語を教えるなんて」と不安に思ってしまうかもしれませんが、実際に参加してみると、私が日本語を教えること以上に、自分が学習者や日本語教室・日本語クラスから学び取ることが多かったように感じます。

また、実習では毎回授業後に書くふりかえりに基づいて実習生同士で意見を出し合います。授業時間外の活動や、それに伴う記録など、やる事は盛りだくさんですが、その分知識が深まりました。自分の学科・専攻にプラスαで何か学びたいと思っているみなさんへ、履修をおすすめします。

1 年間の実習を通して

深田 琴音

実習全体の学び

私がこの実習を通して学んだことは、学習者の多様性と、自身が積極的に行動することの大切さです。実習では、多くの講義を通して、日本語教育の課題や現状、学習者について知ることができました。さらに、地域日本語教室でのボランティアや、愛知県立大学内の留学生日本語クラスにて学習者と交流し、ひとりひとりの日本語レベル、目指している日本語力、学ぶきっかけ、学習意欲等の全てが学習者ごとに違うことを身をもって感じました。この経験から、日本語学習者というひとつの枠として捉えるべきではなく、学習者個人について知ることが大事だと気付きました。特に、地域日本語教室では、親の都合で来日したために日本語を学ばなければならない外国にルーツを持つ子供と出会い、日本語学習から義務感を取り除くためには何ができるのか、悩みながら活動しました。今でも明確な答えは出ていませんが、このように学習者のことを考えることが日本語教育を学ぶ身として必要なことであると気付きました。

また、1 年間を通して積極的に活動することの大切さを学びました。ボランティアやシンポジウム、留学生クラスでは、日本語教育だけでなく自身の生活につながる様々な経験を得ることができました。実習に参加していなければ、留学生と仲良くなり、日本で暮らす外国人について知らないまま社会に出ていたでしょう。しかし、意欲的に日本語教育に関する活動に参加することで様々な人と出会うことができ、知見を深めることができました。これは自分の専攻のみを学習していたら手に入れることができないものでした。社会人になると、関わり方の形は変わるかもしれませんが、日本語教育について関心を持ち続けたいと思っています。

これからの地域社会、日本社会で生きていくために

多文化共生が注目されている日本社会では、これからも在留外国人数は増え、それと同時に様々な問題を起こりうるでしょう。しかし、そのときに大切なのは、外国人だからとひとくくりにするのではなく、出会う人を見つめることだと思います。また、外国人の増加に伴い、日本語教育の重要性も増すと考えられます。日本人だから日本語を知っていると決めつけるのではなく、今一度自身が使用している日本語について立ち返ることが大切です。

後輩に向けて

今は自分の専攻の学習だけで手一杯かもしれませんが、この実習は日本語教育を様々な経験を通して学べる非常に貴重な機会です。副専攻としてもし迷っている方がいれば、ぜひ受講して欲しいと心から思います。大変なことを乗り越えた先に新しい学びが待っています。日本人だから、わざわざ日本語教育について学ばなくてもよいと思う人もいるかもしれませんが、それが違っていたことに気付くでしょう。自分から何事にも積極的に動いてみてください。応援しています。

日本語教育実習での出会いと学び

前川 礼奈

1. 実習を終えて

一年間の実習を一言でまとめるならば、「出会いと学び」の言葉に尽きます。地域日本語教室調査では、手話を第一言語とする日本人、外国人の学習者に出会い、ろう者が日本語を学べる環境や人材の不足といった課題、手話ができない私にも可能な支援があることを学びました。また、日本語教育の場は学習者同士にとっても出会いの場であるという気づきがありました。これは、特に地域日本語教室に顕著でしたが、留学生クラスや国外実習でも、学習者のコミュニケーションの様子から日本語教育現場が果たすもう一つの役割であると認識しました。

日本語教師の魅力は、学習者と対等な立場で学べることだと考えます。確かに、日本語教師と学習者の構図を、支援者と被支援者として捉えることが必要な場面もあるかもしれません。しかし、学習者から質問を受けて日本語を見つめ直したり、お互いに文化を共有したりする場面は多く、私たちも学習者なのです。この認識を心に留めることができれば、学習者と支援者の双方が多くの学びを得ることができると考えます。

こうして一年間の学びを締めくくることができたのは、学校内外の様々な方のご協力があったからだと考えています。私たちの学習を支えてくださった方々に、心よりお礼申し上げます。

2. これからの地域社会・日本社会で生きていくために

実習を通して身についた力の一つに、「相手を理解しようとする力」が挙げられます。これは、

人と接する上での基本的な姿勢ですが、実習のあらゆる場面で実感することとなりました。私たちが異なる人生を歩んできたように、日本語学習者にも多様な人生があり、中には望んだ来日でなかった人々も多く存在することを学びました。これから社会に出る私たちには、そういった人々が日本で生活する上で必要な情報、もの、サービスは何か、どのような態度で接するべきかを考えることが求められるのではないでしょうか。

また、日本語教育に関する知識と経験を身に付けた私たちが発信できることは多くあると考えます。同じ地域に住む外国にルーツを持つ人々について、地域日本語教室の実態、やさしい日本語の使用等、1 年前の私たちが知らなかった事実を伝えることは、誰かの知ろうとするきっかけになり得ると考えています。自身が多文化社会の一員であるという自覚を持ちながら、日本語教員課程を修了した身としてできることに取り組んでいきたいです。

3. 後輩に向けて

日本語教育実習を修了した今、後輩のみなさんには履修を強くおすすめします。私が実習で得た「出会いと学び」を、共に学んだ実習生の存在なしに話すことはできません。他の実習生も述べているように、実習の中で困難を感じる瞬間は来るかもしれません。そんな時は、専攻や興味が様々な友人と意見を交わし、仲間の存在の大きさを感じてください。出会いを大切に、充実した実習になることを願っています。

まずは自分の「正しさ」を疑うこと

米山 茄穂

実習全体の学び

私がこの実習で印象的であったことは、支援者と学習者の関係性についてです。実習を行うまでは、日本語教室での「支援者」と「学習者」は、例えば学校における先生と生徒のような関係だと考えていました。それは、私が「教える側」と「教えられる側」という一方的な関係性の中で学習してきたからだと思います。でも、実際はその学習形態が全てではなく、「学び合う」ための工夫ができると分かりました。そして、学習者は「一方的に支援される側」ではなく、「支援する側」にもなれる可能性についても知ることができました。

また、参加したシンポジウムで、「「消しゴム」や「はさみ」がなかなか覚えられない子どもがいる。日本語への学習意欲が持てない子どもにどう接するのか」という質問に対し「その子が日本語で話したいと思える環境づくりが大事」という旨の回答がされたことが印象的でした。私は子ども向けの日本語教室にボランティアとして通っていましたが、「子ども達が意欲を持てる環境づくり」という視点がありませんでした。無意識に「学校の勉強に意欲を持つのは当たり前だ」と思っていたからです。自分の意思で日本にきた訳ではない子ども達の立場にたてていなかったなと感じています。

このような経験から、私は、これからも自分の中にある「正しさ」に懐疑的でありたいと思っています。自分の固定観念に気がつくのは難しいので、もっといろいろな経験をして、たくさんの人の意見を聞きたいです。

これからの地域社会、日本社会で生きていくために

日本政府は「移民」を受け入れていないというけれど、実際は様々な形で外国人労働者を受け入れています。そして、地域で日本語を学ぶ人達の国籍や年齢、ニーズも様々です。彼らの支援を行う地域日本語教室にはそれぞれ設立経緯があって、それは日本社会の課題と結びついていました。私は、実習を行うまで、地域日本語教室がここまで社会の課題を反映しているなんて全く気がつきませんでした。

そんな日本社会の中で、私は、相手のことを知るという姿勢が大切だと感じています。外国にルーツを持つ人達のバックグラウンドは、その人の国籍や仕事、属性で括ることができないからです。例えば、日本国籍であっても、日本語支援が必要な子ども達がいます。その反面、外国籍であっても、日本語での学校教育しか受けていない人もいます。日本の大学で学び、日本語の会話に問題はないように感じても、自分の日本語に対して不安を抱えている人達にも出会ったことがあります。相手の持つ属性からくるイメージで判断するのではなく、その人自身にきちんと向き合っていきたいです。

後輩に向けて

私自身は、日本語教員課程を修了することが大学生活の目標のひとつでした。外国にルーツを持つ友人たちが日本語を学ぶ姿を見て、日本語教育について知りたいと考えるようになったからです。この実習では、実習生のみなさんとの話し合いや、先生方からのアドバイスなどを通じて、日本語教育についての視野をぐんと広げることができました。

また、地域日本語教室や留学生の日本語クラス、シンポジウムへの参加を通じて、いろいろな側面から日本語教育に携わる人達の姿を知ることができました。その中で、日本語教育やそれを取り巻く社会の状況について様々なことを考えました。そして、この実習の履修をきっかけに、将来は教員免許をとって子どもの日本語教育にも関わりたいと思うようになりました。

この課程を履修するにあたり、別に「日本語教育や外国人支援に関わりたい！」という確固たる意思がなくてもいいと思います。日本語教育や関連する分野に少しでも興味があれば、ぜひ挑戦してみてほしいです。楽ではありませんでしたが、やってみて損はしません！将来、日本語教育以外の分野でも、必ず役に立つ学びが得られるのではないでしょうか。

実習を通して得たもの

朝岡 沙月

1．実習全体の学び

1 年間実習を通して、日本語の教授法だけでなく、教師やボランティア、学習者など様々な目線から多角的に日本語教育について学ぶことができました。

AIA 見学やシンポジウムの参加によって、ボランティアや教師、国際交流協会などの様々な方々の目線から今の日本語教育の取り組みや問題点について知りました。また、地域日本語教室に数か月間参加することで、在日外国人の多い地域の自治体の人々の思いや地域社会の取り組みについて知ることができました。特に、日本語教室はただ日本語を教える場なのではなく、地域と在日外国人や在日外国人同士の交流の場など、多くの役割を持つ場であると感じました。また、教室によって授業形態や内容は大きく異なり、様々なニーズに合わせた教室があることを学びました。

さらに、地域日本語教室で在日外国人の方々と関わったり、国外実習で海外の日本語学習者と関わることで、学習者の中にも様々なレディネスやニーズがあることを実感しました。特に在日外国人の中には日本語学習を望んではいないが、せざるを得ないといった状況の方々も多いことを知り、学習者のモチベーションも授業づくりに必要な情報だと学びました。国外実習で、ひらがなは分からないがローマ字は分かるだろうと予想しローマ字で資料を作った際に、高齢の学習者の中にローマ字は分からないがひらがなは分かるという方が数人いて驚きましたが、この時に無意識に学習者に対し偏見を持ち、学習者個人について考えていなかった自分に気が付きました。このような経験から、学習者を国籍や年齢でひとまとめにせず、の文化や背景をよく知ることの重要性を学びました。

このように日本語を教える側と学ぶ側の両方の目線を知る中で、やはり日本語教師の役割は日本語を教えるだけではなく、日本語学習者の目線に立って彼らを支えることなのだと体感しました。今の在日外国人の日本での待遇や地域社会の取り組み、学習者の背景や興味、様々な異文化など、より多くの情報を常に収集し、偏見をなくし多角的な視点を持つことで、より日本語学習者に寄り添った授業づくりが可能になることを学びました。

2．これからの地域社会日本社会で生きていくために

在日外国人や海外ルーツの方々本人だけでなく、私たち自身も、たとえ日本語教育に関わる者でなくとも、在日外国人や海外ルーツの方々の背景や待遇を知ること、常に興味を持っておくことが多文化共生社会の実現につながると感じました。在日外国人の方々は皆が皆望んで来日しているわけではなく、そこには社会的背景があること、そして私たちもいつ彼らと同じような立場になるか分からないということを常に頭において行動したいです。在日外国人は“無関係な他者”ではなく“同じ日本に住む者”だという認識を、まずは自分が持ち始めることが重要であると私は思います。そして、それは高齢者や障がい者の方々などに対しても当てはまり、社会的に弱い立場の方々を “同じ日本に住む者”として、彼らに寄り添った社会を作ることがいつかの

自分を助けると思って、彼らの目線に立って行動していきたいです。

3. 後輩に向けて

私は軽い気持ちでこの実習を履修しましたが、実習に参加することで想像もしていなかった経験が沢山出来ました。もちろん実習は楽しいことだけではなく、特に国外実習は日本での準備から実習中まで本当に大変でしたが、現地や他大学の学生と協力し、沢山の学びと経験を得ることができました。国内実習でも、他の実習生や留学生、地域の日本語学習者など多くの人々と関わり、沢山の友達ができました。実習の中では一人で新しい場所に飛び込むような主体的な行動が求められますが、勇気をもって一度行動してみれば本当に多くのものが得られます。日本語教師を目指していなくても、大学生活で何か得たいと思う方にはぜひこの実習をおすすめします。

多様な人々との出会いと新たな気づき

前田 凜子

1. 実習全体の学び

一年間の実習を振り返ると、日本語教育を通して、今までの自分には無かった考え方や価値観を多く知ることができたと思います。実習では、多文化共生を支える現場で働く方にお話を聞く機会や、学内の留学生向けの日本語クラス、学外の日本語教室へ参加する機会などが多くありました。実習に参加する中で、私の中での日本語教育へのイメージが一面的であったことに日を追うごとに気づき、一言で「日本語教育」と言っても対象の学習者や環境が異なる分だけ、多様な日本語教育があると知りました。そして、実習を受ける前と今では、自分の住む街の見え方が変わりました。行政の多文化共生への取り組みがまだ不足していることや、日本人と外国人住民の間にはまだまだ見えない壁があると、実習での学びを通して気づきました。

実習の一環として行った地域日本語教室調査は、実習生が訪問先の教室に直接アポイントメントをお願いする段階から始まりました。訪問先の教室との交渉や訪問スケジュールの相談など、日本語教育以外にも勉強になることが多くあり、貴重な経験となりました。特に、教室で日本語を学ぶ児童と関わる際、言葉自体の説明を日本語ですることは本当に難しいことだと肌で感じました。コミュニケーションの難しさを改めて感じることも多くありましたが、学習者の出身国と日本の学校文化の違いや、物事へのイメージ、価値観の違いなどを超えて互いに意思疎通ができた時には、言葉にできない喜びを感じました。

愛知県立大学に来ている留学生の日本語クラス支援も、多様な日本語教育の在り方について身を持って理解する経験になりました。先生ごとに授業の進め方が異なり、そのクラスでの目標に向けて会話中心の授業や文章表現中心の授業など様々なものがあり、私も実習生として授業に参加しながらたくさんの学びを得ました。

私は一年を通して支援に入らせていただいたクラスがありました。初めはお互いに壁があった留学生同士が、日本語という共通言語を通して仲を深めていく様子や、日本語が上達していく過程をそばで見ることができ、貴重な体験ができました。留学生からは、地域日本語教室の学習者とは違う角度からの質問を多く受けましたが、質問への回答が自分自身の学びにつながることがほとんどでした。留学生たちは文法を一通り学習し終わり、コミュニケーションはスムーズにできるので、「は」と「が」の違いなど細かい日本語の違いに関する質問が多く、うまく説明できないことにもどかしさを感じる場面もありました。人に何かを説明するということは、逆に自分のよくわかっていない部分を表面化させるのだなと度々感じました。同じ日本語教育というカテゴリーでも、学習者や環境が違うだけで全く異なるものになるということが身をもって学ぶことができました。

2. これからの地域社会・日本社会で生きていくために

実習で、愛知県内の多文化共生に力を入れている様々な地域について学びましたが、まず私たちにできることは、周りの外国人住民や外国にルーツを持つ人々に関心を持つことだと考えます。日本全国、そして愛知県に住む外国人住民数は年々増えています。講師の方のお話や外部講演会でのお話を聞くたびに、日本人と外国人がお互いに歩み寄ることがますます必要になってくると強く思いました。特に災害時には、日本人と外国人の間で溝ができてしまうと、命に関わる情報格差が生じてしまうと考えます。日頃から自分の周りの外国人に関心を持つ、近隣に住む外国人住民とのコミュニケーションをなるべく取ってみるなどの日々の積み重ねの行動が、非常時に役立つのではないかと思いました。

外国人住民の出身地域の多様化も進んでいると知りました。実習の中で講師の方から、今までは外国人の両親の国籍が同じだったのが、最近は国籍が違う外国人同士での結婚が増え、家族の共通言語が無い家庭の外国人児童も増えていると聞きました。今までのように、行政の資料をただ多言語化するだけでは追いつけない状況で、これからますます「やさしい日本語」が求められてくるのではないかと思いました。「外国人と話す＝英語が話せないとダメなのではないか」という思い込みをなるべく多くの人が無くし、日本人も外国人もお互いに理解できる「やさしい日本語」の認知がもっと進むと良いなと思います。

3. 後輩に向けて

はじめに、少しでも日本語教育に興味のある方は、日本語教員課程を履修することをおすすめします。私は、課程の中で定められている授業を受ける中で、日本語を理論的に説明することがとても難しく感じ、自分にできるのだろうかと何度も履修をあきらめそうになる瞬間がありました。

しかし、実習を終えた今、日本語教員課程にチャレンジして良かったと心から感じています。日本語教育へのぼんやりとしたイメージが明確化されたことはもちろん、実習を履修していなければ関わることのなかったのであろう多くの方と出会う機会を得られたからです。実習を通して出会った日本語教育に関わっている方々は、本当に様々な背景をお持ちでした。しかし、お話を伺って、むしろその多様な背景や経験こそが、外国の方と関わる際や日本語支援をする際に活き

ているのだとわかりました。日本語教育を受ける学習者は年齢も、国籍も、母語も多様であるがゆえに、指導者も柔軟性や多様性が求められると思います。みなさんも、日本語教師という職業が自分に向いているか、向いていないかということはあまり深く考えず、挑戦してみたいという気持ちを大切にしてください。

実習を通して、学び・考えたこと

上村 紗生

1. 実習全体の学び

実習全体で学んだことは、大きく分けて 3 つあると考えています。

1 つ目は日本語教育とは「相互のコミュニケーションであり、助け・助けられる関係」だということです。ここで「教育」という言葉を使わず、「関係」という言葉を使ったのは、実習を通して日本語教育とは「教育」という上下の関係でないことを強く実感したためです。これは、県大の留学生日本語クラスでの実習でも、地域日本語教室の小学生のクラスでの実習でも、同じ日本語教室の大人のクラスでの実習でも変わらず実感したことでした。実習を開始したばかりの時、水曜日 5 限の授業では「対等な関係で教えあう」ということをよく耳にしていましたが、正直なところ頭でわかっていても、対等に教えあうということがどういうことか本当にわかっているかと言われるとよくわかっておらず、日本語をわかりやすく「教える」と意気込んでいたことを覚えています。しかし、大学の留学生日本語クラスや地域日本語教室の実習に参加していく内に、日本語ネイティブだからこそ気づけなかったことに気づかされたり、日本語以外の分野で知らなかったことを紹介して貰えたりと「教育」というよりはコミュニケーションをとる「関係」だと捉えるようになっていたのです。そして、TNN 日本語ボランティアシンポジウム 2024 の松尾慎氏の基調講演「ライフステージによりそう日本語教育:地域で広がる学び合い」にて、日本語教室・活動 Villa Education Center では対等に学び合う関係で日本語教育をしているという話を聞き、実習で学び実感してきたことを再確認し、自分の考え方として定着させることができました。加えてこの基調講演の中で、活動中は「否定されない安心感」があるから積極的に交流ができるという話を聞き、これから関わる日本語教育・日本語支援においても、日常で関わる外国籍の方に対しても、実践してきたいと思いました。

2 つ目に挙げたいことは、日本語教育に関わる様々な情報です。日本語教育課程の実習では、日本語教育に関わる問題であるものの、独学では認知しきれない問題を知ることができる機会が多く、自分の視野を大いに広げられたと考えています。存在を知って自分の考えが特に変わったことはプリスクールの存在です。存在を知るまでは、外国籍の子ども・外国ルーツをもつ子どもが中学高校への進学時に大変な思いをしないように、小学校内や中学校内での対策を取るべきだと考えていましたが、外国にルーツのある子どもがプリスクールに通うことで、基礎的な部分から子どもたちの成長を支えることができるということを知り、衝撃を受けました。自分の

中では日本語教育に関わる部分はほとんどが対処療法であるという考えがあったので、予防療法的な教育があるということを知れたのは貴重な機会だったと考えています。

3 つ目は人のためになると思ったらどれだけ草の根的な活動になるとしても、とにかく行動するということの大切さです。こう考えるようになったのは、水曜日 5 限の授業で日本語教育に携わる様々な講師の方のお話や、日本語ボランティアシンポジウム 2024 の教室交流会で様々な教室の様子を知ったことがきっかけでした。どの方・どの団体も活動のスタートは小さな規模からということが多く、また、そのような小さな規模の時点で行動するという強い意志をもっていらっしゃった方が多いように感じられました。こうした姿勢に感化されましたし、このような姿勢が大事だということも実習を通して学びました。

2. これからの地域社会・日本社会で生きていくために

これからの地域社会・日本社会、外国人国籍の方や外国ルーツをもつ方が増えていくことは確実であるため、「より様々な人の視点を考えて生きていくこと」、「今まで以上に多文化共生の分野に対してアンテナを高くして生きていくこと」、「行動に移すこと」がこれからの地域社会・日本社会で生きていくために重要になってくると考えています。私はこのようにこれから生きていく必要があると考えられるようになったのが、日本語教員課程を通して様々な現実を知り、視野を拡大できたからだと思っています。

具体的に実践していきたいこととしては 3 つあります。1 つ目は新聞やニュースなどで外国籍の方関連のニュースは最新情報を知るということ、2 つ目は実習中にお世話になった日本語教室で日本語教育のボランティア活動を再開すること、3 つ目は様々な外国ルーツをもつ方と知り合い、コミュニケーションをとっていくことです。1 つ目の情報収集は行動に移したり問題意識をもったりする前準備として、視野を広く持ち、問題を認知するため、2 つ目のボランティア活動の再開は実習で学んだことや得た情報で行動に移すため、3 つ目の外国ルーツをもつ方とのコミュニケーションは情報収集と学びの実践を行うためです。これらの行動を通して、たとえどれだけ小さな影響であっても地域社会・日本社会に良い影響を与えていける存在になりたいと考えています。

3. 後輩に向けて

日本語教員課程は将来日本語教員になることを決めている人にとっても、日本語教員になる予定は今のところないけれども興味があって履修する予定がある人にとっても、とても意味のある課程だったと思います。

まず、日本語教員課程で必修となっている科目はどの授業も自分の見える世界を広げることができたと感じています。特に、日本語文法論や水曜日 5 限の実習の時間に日本語そのものや日本語教育に関する知識をインプットし、地域日本語教室の実習や大学内の留学生のクラスで実習をすることでアウトプットをするという流れがあったことで、自分の見える世界やアンテナを広げ、自分の行動によって知識を定着させることができたと考えています。

私は今のところ日本語教員になる予定はないのですが、生活の中で今まで以上に身近にいる外国人の方とより良い関係を築けるようになったと考えています。また、日本語の面白さにも

実習を通して気づけるようになり、今まで以上に生活が楽しく感じられるようになりました。

新たな学びや経験から得られたこと

柴田 美夢

1．実習全体の学び

一年間にわたる日本語教員課程の実習を通じて、柔軟な思考や多角的な視点を持つことの重要性を学びました。実習の中には、座学として地域日本語教室や日本語指導を必要としている人たちの実態などを学ぶという機会だけでなく、実際に自分で行動してお話を聞きに行ったり、経験したりという機会が多く存在していました。そのため、学んだことを知識として留めるのではなく、体感し、より身近に感じることができました。例えば、名古屋国際センターで実施される「お話を聞く会」への参加、地域日本語教室のボランティアの参加、愛知県立大学の留学生クラスへの参加など、学校内外問わず、様々な立場の人と会って話を聞いて、学びを得る機会がありました。それに加えて、実習内でも学生同士で意見交換する機会が多く用意されており、同じ立場の学生という視点からでも、自分自身の意見とは異なる発想や直面している課題などを共有することで、何度も「こういう考え方もあるのか」と気づかされました。このような経験は、物事に対する多角的な視点だけでなく、挑戦する力を養うことにも繋がったと思います。

実際にお話を聞いていて、「日本語教育に正解は無い」という話が印象的でした。地域日本語教室だけでも、先生と生徒という明確な区切りがある授業形式の教室や、少人数グループでの教室、イベントを通じて交流を促進させようとする教室など多種多様な形態があり、それぞれの人が考える「よい」教室を実現しようとしているのが感じられました。相手が求めていることは何なのかを相手の立場になって考えたり、「とりあえずやってみよう」と気負いすぎずに一歩踏み出したりすることで、より良いものへと変わっていきます。一つの正解にこだわるのではなく、新たな学びや経験を通じて得られる広い視点で、柔軟に物事を考えることの大切さを学びました。

2．これからの社会を生きていくために

これから日本の外国人人口は増加していくと考えられています。たとえ身近に外国人がいなくても、街で見かけることが増えるでしょうし、就職すれば一緒に働く機会も増えるのではないでしょうか。実習の中で、マイクロアグレッションという言葉を学びました。マイクロアグレッションとは、無意識の偏見や思い込みが言葉や態度に現れ、意図せずに誰かを傷つけてしまうことを意味します。相手に悪意が無いため、指摘したり非難したりがしづらく、言われた側だけがモヤモヤとした気持ちを持つことがあります。人種的な面で見ると、日本は多様とは言えず、こういった偏見を抱きやすいのではないかと思います。また、この偏見は、人種だけでなく、年齢や性別、出身地に対しても持たれ、多様性が求められるこれからの社会において大きな課題となると考えられます。この問題は解決が難しいかもしれませんが、フィルターを通さず、一人の人として向き合った

り、自分自身がマイクロアグレッションについて知ろうとしたりすることはできます。これからの社会では、マイクロアグレッションに限らず、さまざまな人や考えに触れる機会を通じて、自ら気づきを得られるようになることが必要とされるのではないでしょうか。

3．日本語教員課程に興味を持っている学生へ

日本語教員課程では、多くの経験を得る機会があります。計画的に履修を組んだり、実習のために時間を使ったりするのは、確かに大変な面もありましたが、それ以上に、実習生や先生、地域日本語教室のボランティア、学習者、外部講師の方など、多様な考え方や発想と触れることができる多くの貴重な機会に出会えました。私自身は、実習を通じて柔軟な思考の重要性を体感し、相手の立場になって考えたり、正解を追い続けるよりも、とりあえず挑戦してみたりすることの大切さを学びました。この実習は間違いなく自己成長に繋がったと思うので、挑戦してみて良かったと思っています。得られるものがとても多いと思うので、深く考えすぎず、少しでも興味や関心があるのであれば挑戦することをお勧めします。

多様な価値観を理解し受け入れる

伊藤　明依

1．実習での学び

日本語教育実習を通して「柔軟な対応」と「多角的な視点を持つこと」の大切さを学びました。日本語教育の現場では、学習者一人一人が異なる文化的背景や学習目的を持っています。日本語を学びたくて学んでいる人もいれば、学ばなければいけないから学んでいる人もいます。そのため、事前に立てた授業計画や習った指導法がそのまま使えるとは限りません。学習者の状況に応じて指導方法や指導内容を変える必要があります。学習者と積極的にコミュニケーションをとることで、どのような指導が適切なのかを考え、工夫することが求められます。固定された方法にこだわるのではなく、状況に応じて柔軟に対応する姿勢が重要だと学びました。また、実習の中で、日本語教育関係者、行政職員、学校関係者、地域日本語教室の主催者、ボランティアスタッフなど、様々な立場の人の話を聞く機会がありました。それぞれの立場から日本語教育に対する考え方や課題を学ぶことで、一つの視点にとらわれず、多角的に物事を見ることの重要性を改めて感じました。日本語教育は学習者だけを対象とするものではなく、地域社会やその周辺の様々な人々と関わり合いながら成り立っていることを学びました。日本語教育の現場では、学習者だけでなく、地域社会や教育機関との連携も求められます。多様な考え方を理解し、柔軟に対応する必要があります。一つの視点だけにとらわれず、多角的な視点を持つことで日本語教育の幅広い可能性を見出すことができると思います。さらに、柔軟な対応力を身につけることでより良い学びの場を提供できると考えます。 この実習を通して得た学びを今後の人生にも活かしていきたいと思います。

2. これからの社会で生きていくために

これからの社会では、多様な価値観を理解し受け入れることが求められます。近年、日本社会では国際化が進み異なる文化や背景を持つ人々が共に生活をする機会が増えています。このような社会で個人や地域が発展していくためには、言語や文化の違いを超えてお互いに理解し、共に暮らしていく意識を持つことが不可欠です。重要なことは、自分の価値観や地域の多数派の意見を押し付けるのではなく、相手の立場や考え方を尊重することだと思います。日本語教育では、学習者が日本語を学びながら、母国の文化も大切にしつつ、日本社会の価値観にも適応できるよう支援することが求められています。日本語を教えることは言葉を伝えるだけでなく、お互いの文化や考え方を知り理解し合うきっかけにもなると思います。そうした関わりのなかで、多様な人々が安心してともに暮らせる環境を作ることも、日本語教育の大切な役割ではないでしょうか。また、社会の変化に適応しながら、多様な背景を持つ人々と協力し合う力も必要です。日本語教育実習を通して、多様な価値観を受け入れる姿勢や、相手に寄り添う力を養うことができました。こうした力は、日本語教育の現場だけでなく、これからの社会を生きていく上での大きな強みとなると思います。

3. 後輩に向けて

日本語教育実習は大変なこともありますが、それ以上に学びの多い貴重な経験になります。この実習は新しい知識を得るだけでなく、多くの人との出会いがあります。そして、その出会いから学ぶことがたくさんあります。また、県大の留学生の日本語クラスに参加する機会があることが、この実習の魅力だと思います。授業の中でたくさん会話をするので、自然と留学生と仲良くなることができます。地域日本語教室に一人で参加することには不安がありました。でも、その不安を実習に参加する仲間と共有することで気持ちが楽になりました。同じ経験をする仲間と支えながら学べることも、この実習の良いところだと思います。不安なことがあっても、思い切って挑戦することで得られるものは沢山あります。ぜひ前向きな気持ちで実習に参加してみてください！私は日本語教育実習に参加して良かったと思っています。

お互いに学び合うということ

村林 芽明

実習全体の学び

実習を通じて学んだことは、一方的な支援ではなく支援者も学習者もお互いが学びあえる関係を築くことが大切だということです。学習者を「一方的な支援対象」として捉えるのではなく、対等な立場で接し、相手の主体性やニーズを尊重し、相互に助け合う姿勢を持つことで、支援活動がより効果的かつ持続可能なものになるということを学ぶことができました。この実習を通じて、相手の立場に立って考える力が身につけられたのではないかと実感しています。

また実習の中で、地域日本語教室は単なる言語学習の場ではなく、学習者と地域社会をつなぐコミュニティの中心でもあるということを実感しました。必ずしも日本語力を高めることだけが目的ではなく、学習者自身が教室に通う理由を尊重しながらサポートすることだと考えました。様々な活動に参加し、たくさんの方々との交流を通じて支援者としての役割を考える中で、自分一人ですべてを解決しようとするのではなく、周囲と協力して活動することの重要性を改めて感じました。

全体を通じて、今まで表面的にしか知らなかった問題について、この実習を通して多種多様な背景を知り理解を深めることができたと感じています。また、身近な社会問題に敏感になり、常にアンテナを張って情報収集するようにもなりました。今の社会の現状に常に疑問を持ち、多角的な視点で物事を見られるようになったと思います。この実習を通して様々な方と出会い、多くの学びを吸収し、従来の自分では想像もできなかった意識の変化や自身の成長を得ることができました。自分の視野を広げる貴重な経験になりました。これからも学び続けたいです。

これからの地域社会、日本社会で生きていくために

日本社会において、外国人住民が増える中で、相互理解と多文化共生はますます重要になるのではないでしょうか。住民同士が互いに理解し合う環境を作るには、日常生活の中で自然な接点を増やすことが鍵となります。実習を通じて感じたことは、日本語教育が単に「言語を教える」ことではなく、学習者の生活全般を支える役割を担うことだという点です。特に、支援者側が学習者の背景やニーズを把握し、柔軟に対応することが求められます。同時に、支援活動の枠を超えて、制度や地域社会全体が持続可能な支援体制を整える必要があります。教室だけでなく、企業や自治体など幅広い場面でのサポートが必要です。支援者側も学び続け、多様性を受け入れる柔軟な姿勢を持つことが求められます。

また、日本語教育だけでなく母語や母語文化の継承についても重要な問題だと感じています。各家庭だけの責任ではなく、地域や社会全体でサポートすべきだと感じました。

私自身も社会の一員として、個人ができることを考えつつ、地域や行政との連携の重要性を意識して行動していきたいです。

後輩に向けて

実習を進める中で、まず念頭においてほしいことは「過度に気負わないこと」です。私自身、人に教えることが苦手で、この実習に参加する前は「日本語を教えるなんてことが自分にできるのだろうか」と気負いしていました。しかし、初めの授業で「支援者がすべて何でもしてあげることが正解ではない」と教えていただき、この実習を通してそういった固定観念を取り払うことができたと感じています。支援には正解がなく多様な学習者の数だけ多様な支援方法があると思います。大事なのは、お互いに学びあうという気持ちで柔軟に対応することだと学ぶことができました。

言語はその人を表現するための大事なツールであると考えているので、その学びに携わることができるということは大変光栄なことだと思います。その分緊張したり責任感を感じたりしてしまうかもしれませんが、それでも私は実習の中で学習者の方がだんだんと日本語を身について

いく姿を見ると自分のことのように嬉しかったです。そのとき自分のことのように嬉しく感じられたのも、前述のように気負いせず、ともに学ぶ、成長するという感覚が身についていたからだと思います。

実習の中では正直大変なことも多かったですが、その分他ではなかなか得られないような貴重な経験を積むことができたと感じています。現場では、講義で学んだことがそのまま役に立つこともあれば、新しい課題に直面することもあります。困難に直面したときは、周囲のメンバーや指導者に相談することで視野が広がることも多かったです。もし迷っている方がいらっしゃったらぜひ履修をおすすめしたいです。みなさんの挑戦を応援しています！

日本語教育実習で得た学び

澤田 瑠依

1. 実習全体の学び

実習を通して学んだことは数多くありますが、中でも強く感じたことは「日本語教育はコミュニケーションである」ということです。実習に参加する前は、日本語教育では教師と生徒という立場、つまり教える・教わるという関係がはっきりしていると思っていました。しかし、先生方のお話を聞いたり地域日本語教室に参加したりする中で、地域日本語教育で重要なのは、お互いに学びあうこと、そして相手を理解しようとする姿勢であると感じました。留学生クラスでも地域日本語教室でも、教師が一方的に日本語を教えるのではなく、学習者の国の文化や言葉について教えてもらう場面が何度もありました。特に印象に残っているのは、私が参加した地域日本語教室でのボランティアさんとカンボジア出身の学習者さんのやり取りです。初回の授業で日本の挨拶を勉強したとき、ボランティアさんが「カンボジアではありがとうってなんて言うの？」「来週までに私はカンボジアの言葉を勉強するから、皆さんは今日の授業を復習しておいてください」とおっしゃっていました。学習者の国の言葉や文化を大切にする姿勢や、教える側も学ぶ立場であるという意識が、学習者との信頼関係を築くことにつながっているのだと感じました。日本語教育で重要なのはどれほど正確な日本語を教えられるかではなく、相手のことを理解しようという姿勢、学習者と一緒に自分も学ぼうとする態度、つまり学習者とのコミュニケーションです。目の前の学習者としっかり向き合い、尊重することが最も大切だと学びました。

2. これからの地域社会・日本社会で生きていくために

今後、外国にルーツをもつ人々の数はさらに増えることが予想され、多文化共生の重要性も高まっていくと思います。その中で必要なのは、日本語支援に対する世の中の理解が広がることだと考えています。実習を通して、現在の日本語教育には、行政や学校との連携や地域格差など、課題が多くあることを学びました。さまざまな立場の方のお話を聞いて感じたのは、日本語を学ぶことの難しさに対する理解が十分に得られていないのではないか、ということです。日本語

の学習が個人の努力に任されてしまっていたり、日本語教室の運営がボランティアに頼りきりになってしまっていたりすることも少なくありません。日本語教育に関わる人たちと自治体や学校が協力することで、より充実した日本語支援を提供することができるのではないかと思います。そのためには、行政や教育機関をはじめ、世の中全体に日本語教育への理解を広げることが必要です。私たちにできることは、相手を理解しようとし、尊重する態度を心がけることで、多文化共生や日本語支援の大切さを示していくことではないでしょうか。この実習を通して得た気づきや学びが、これからの多文化社会を生きていくうえで大きな力になると思います。

3. 後輩に向けて

愛知県立大学の日本語教員養成課程は通年で行われ、現場での実習だけでなく、講演会やオープンキャンパスへの参加も必要です。そのため、履修したいけど大変そうだな、と迷っている方もいらっしゃるかもしれません。たしかに大変なこともありますが、それ以上にとても貴重な経験をさせていただくことができます。留学生の日本語クラスに参加したり、日本語教育に携わるさまざまな立場の方のお話を聞いたりすることは、この実習を履修していたからこそできたことで、その一つひとつから多くの学びや気づきを得ることができました。日本語教育に興味のある方はもちろん、実践的な学びをしたい方、多文化共生や異文化理解に興味のある方には特に履修をおすすめしたいです。迷っている方もぜひ挑戦してみてください！

4. TA・SA からのコメント

毎年、日本語教育実習にはティーチングアシスタント（TA）、学生アシスタント（SA）が参加しています。今年度の実習を支えてくださった皆さんからのコメントを掲載します。

寺田 栞菜

私たちは、アシスタントとして授業をサポートする役ですが、授業では実習生の皆さんにアドバイスをしたり、イベントでは参加者として意見交換をしたりと、多くの場面で私自身も実習に参加させていただきました。私は学部 3 年次にこの実習を履修しましたが、その時とはまた違った視点で、新たな学びを得ることができました。また、実習生の皆さんとは毎週顔を合わせるわけではありませんでしたが、会うたびにぐんぐんと成長していく姿を見て、私の方が奮い立たされてばかりでした。実習生の皆さん同士もはじめは距離があったと思いますが、実習を重ねるたびに距離が近くなっていき、実習を終えた今、今後の活躍につながる良い仲間となることができたのではないでしょうか。実習生の皆さん、一年間お疲れさまでした。これからもさらに活躍されることを祈っています！

曽田 優奈

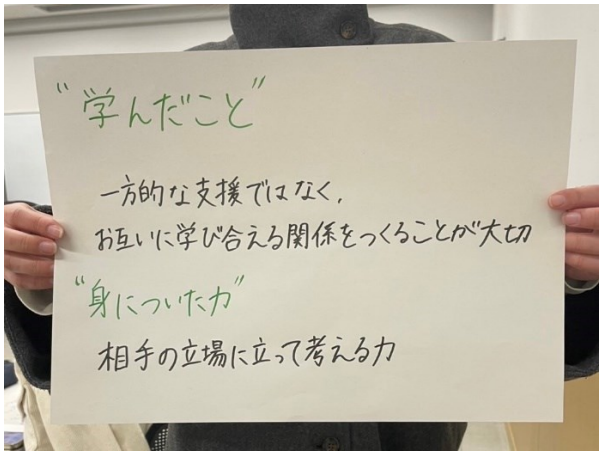
昨年度は国内実習生として、今年度は SA として実習に関わりました。授業中に出される多角的な意見や質問を聞きながら、みなさんがそれぞれの場所で得た経験や学びに触れることができ、とても勉強になりました。みなさんの今後のご活躍をお祈りするとともに、私自身も実習で得た経験を活かして成長していきたいと思います。

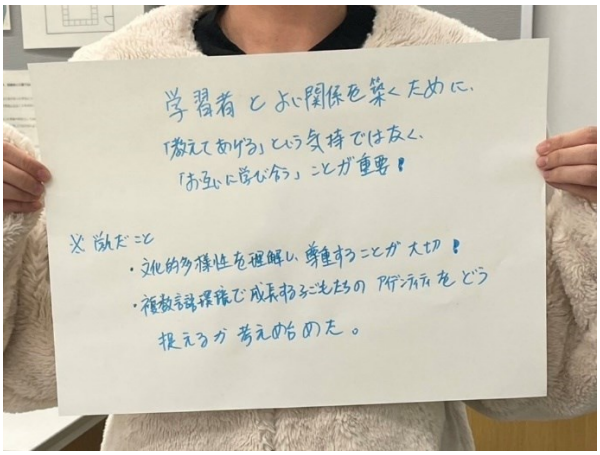
井上 稚葉

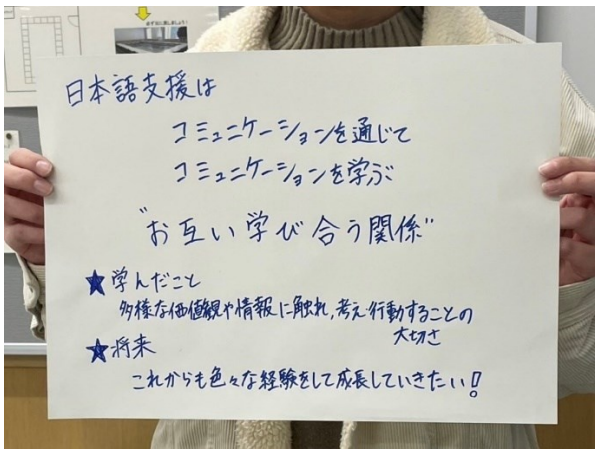
昨年度は実習生として、今年度は SA として「日本語教育実習（国内）」に参加しました。昨年度より多くの方が実習を履修したことを嬉しく思います。同時に、諸活動から得られた実習生の皆さんの日本語支援に対する考えや姿勢に触れることができ、私にとっても勉強になる経験ばかりでした。実習生の皆さん、1 年間お疲れ様でした。

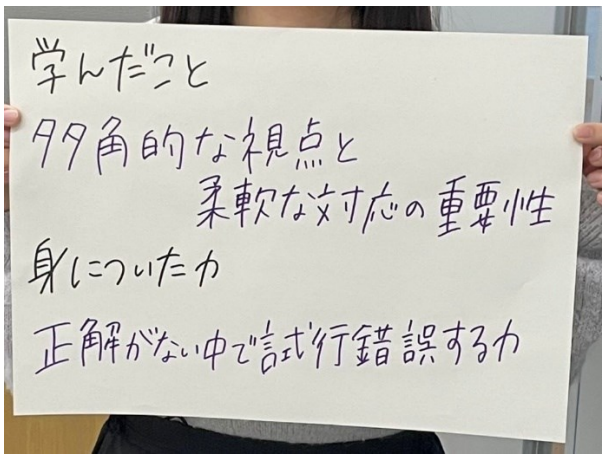
5. 一年間の学び

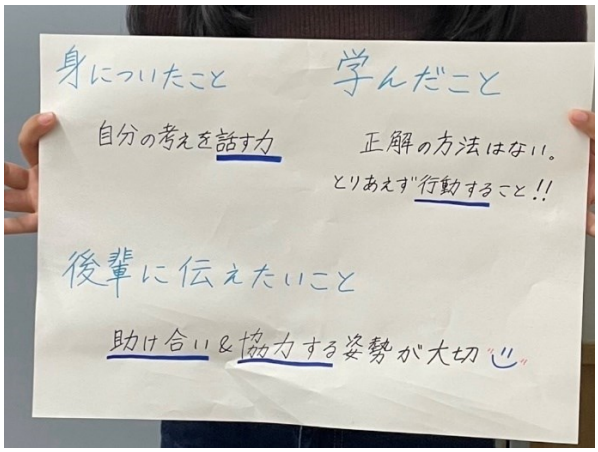
2025年 1 月 22 日の最後の授業では、実習生が一年間を通して学んだことや身に付いたことを、一枚の紙にまとめて発表しました。以下、内容を掲載します。

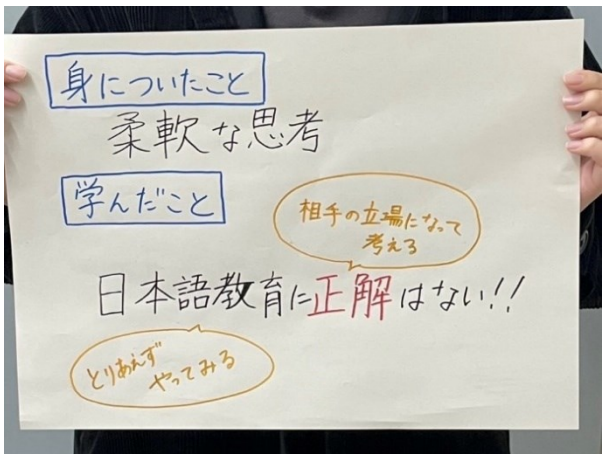


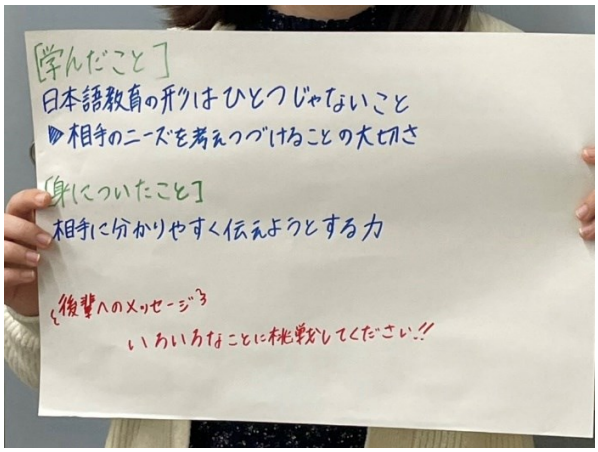


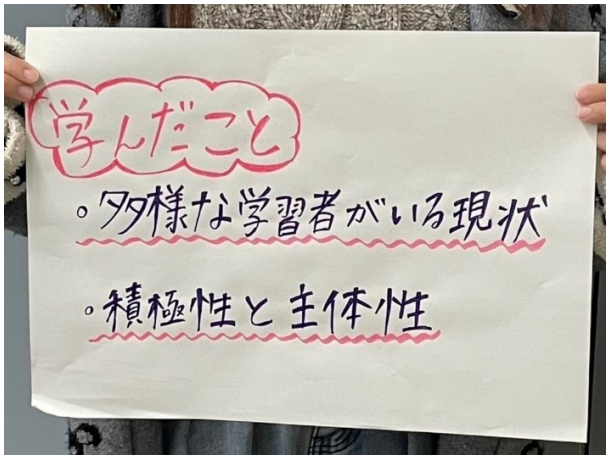


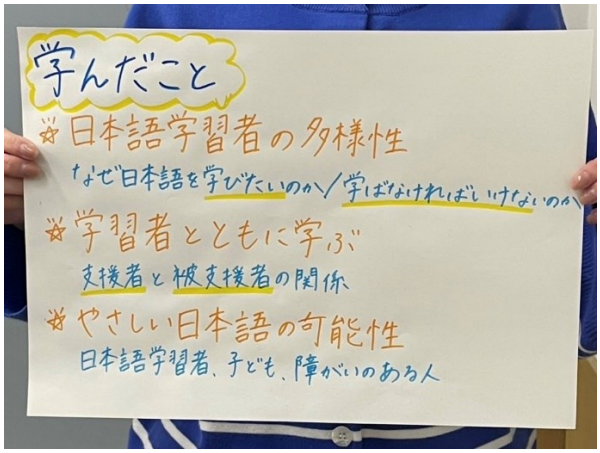


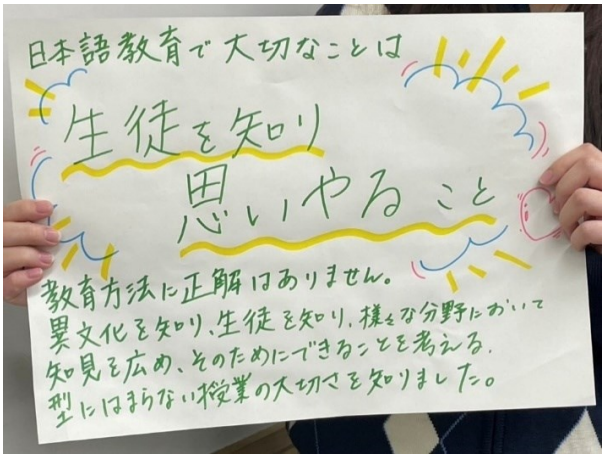

身についたこと
自分の考えを話す力
学んだこと
正解の方法はない。
とりあえず行動すること!!
後輩に伝えたいこと
助け合い&協力する姿勢が大切

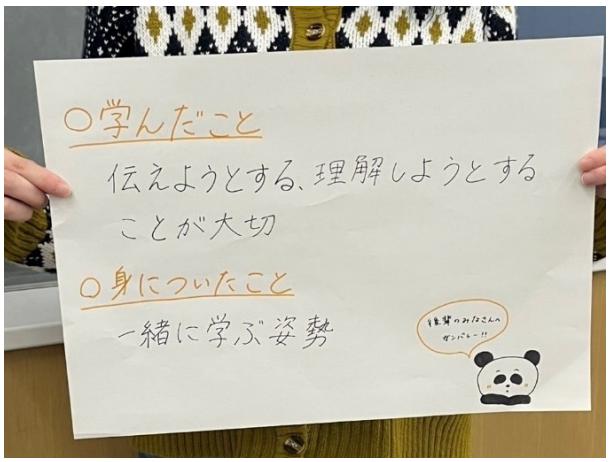

身についたこと
柔軟な思考
学んだこと
相手の立場になって考える
日本語教育に正解はない!!
とりあえずやってみる

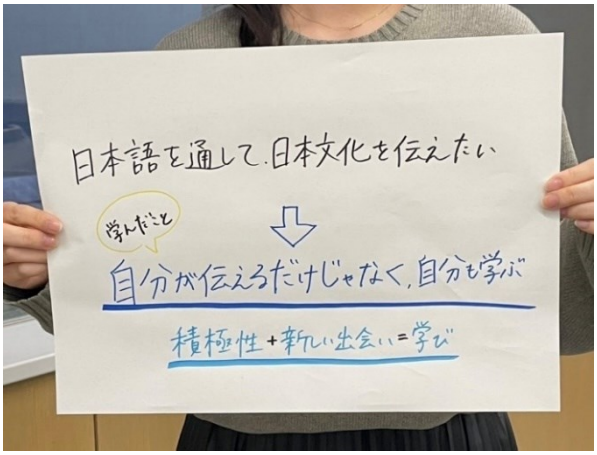

[学んだこと]
日本語教育の形はひとつじゃないこと
▶相手のニーズを考えつづけることの大切さ
[身についたこと]
相手に分かりやすく伝えようとする力
後輩へのメッセージ
いろいろなことに挑戦してください!!

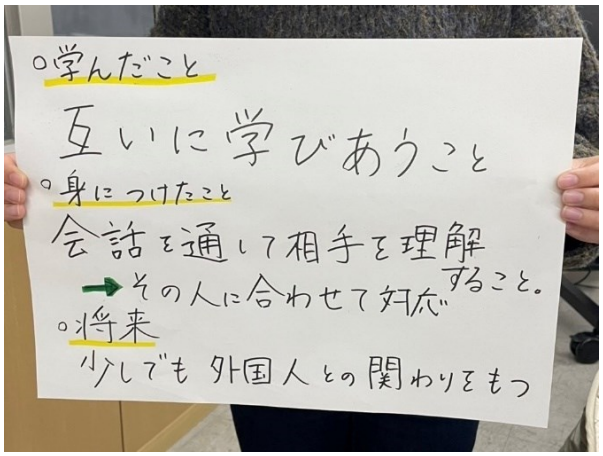

学んだこと
・多様な学習者がいる現状
・積極性と主体性

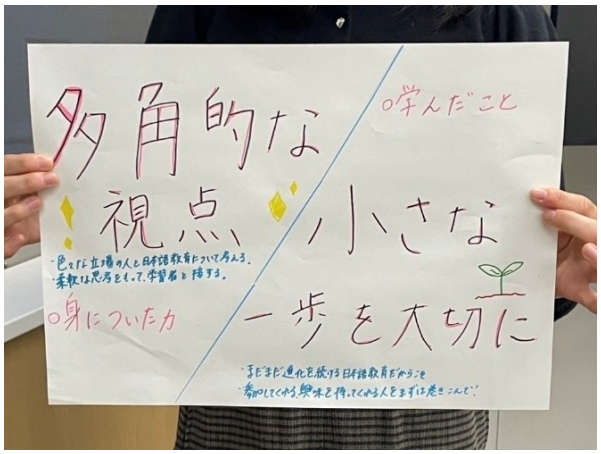

学んだこと
☆日本語学習者の多様性
なぜ日本語を学びたいのか/学ばなければいけないのか
☆学習者とともに学ぶ
支援者と被支援者の関係
☆やさしい日本語の可能性
日本語学習者、子ども、障がいのある人

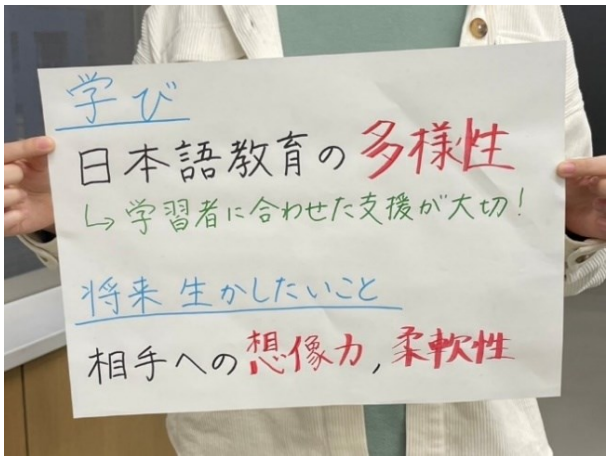

日本語教育で大切なことは
生徒を知り
思いやること
教育方法に正解はありません。
異文化を知り、生徒を知り、様々な分野において
知見を広め、そのためにできることを考える。
型にはまらない授業の大切さを知りました。


○学んだこと
伝えようとする、理解しようとする
ことが大切
○身についたこと
一緒に学ぶ姿勢


日本語を通して、日本文化を伝えたい
学んだこと
自分が伝えるだけじゃなく、自分も学ぶ
積極性＋新しい出会い＝学び


○学んだこと
互いに学びあうこと
○身につけたこと
会話を通して相手を理解すること。
→その人に合わせて対応
○将来
少しでも外国人との関わりをもつ


多角的な
視点
○学んだこと
小さな
一歩を大切に
○身についたか


学び
日本語教育の多様性
↳学習者に合わせた支援が大切！
将来 生かしたいこと
相手への想像力，柔軟性

Ⅱ．国外実習

1. 2024 年度「日本語教育実習（国外)」授業概要

東 弘子（授業担当教員）

① 授業の概要と渡航までの準備

本実習は、日本語教員課程のカリキュラムの中では、選択科目であり、「日本語教育実習(国内)」を履修中、もしくは履修済みの学生のみ、参加することができる。新型コロナウイルスの感染拡大による世界的な渡航制限により、2020～2022 年度までは、国外において実施できなかったが、2023 年度から台湾の東海大學を拠点として、国外実習が復活し、今回も引き続き、台湾での実習となった。本年度は、定員以上の申し込みがあり、8 名が選抜された。

以下、シラバスより、授業概要・授業計画の部分を一部抜粋して引用する。

■授業概要

海外における日本語教育機関（東海大學（台湾））を拠点に、約 2 週間の日本語教育実習を行う。5 月より、実習の準備段階として、日本語授業の教案作成、および、日本文化紹介に関する教室活動案作成に取り組む。実習では、前半は、東海大學の大学院生、学部生、甲南大学の学部生とともに、国際共修としての実習を実践する。毎回の授業のあとに、ふりかえりのディスカッションを行い、自分自身の学びについて客観的に分析する。授業の準備やふりかえりでは、実習生同士で相談しアドバイスをしあい、お互いに自身の学び共有することにより、学びのプロセスについても考察を深める。 実習の記録は、TEAMS を活用して蓄積する。後半は、台湾のいくつかの日本語学習現場の見学と、実習をおこなう。

■授業計画

A）地域の高校生、大学生、一般の日本語未修者を対象としたクラス

B）日本語クラス参加者に加え、大学生や地域の人を対象とした日本文化紹介

C）台湾の一般市民、もしくは高齢者を対象とした日本語教室の見学及び実習

（中略） 帰国後、学内での成果発表会で学習成果を発表し、まとめとする。

こうした実践の準備のために、授業参加者を 5 月までに決定した。特に三大学で実施する A)の「日本語キャンプ」は、東海大學 9 名、甲南大学 6 名、愛知県立大学 8 名、実習生 23 名の活動であり、三大学の教員 4 名が、協力して指導体制を取った。5 月 29 日に第 1 回の全体会議で顔合わせをしてから、三大学混合の 3 班（入門、初級 I、初級 II）ごとに作業を開始して、オンライン会議を開いて準備を進めた。 これについては、三大学の活動全体をまとめた『2024 年夏季日本語キャンプ 東海×甲南×愛知県立』[1]が、別途作成されている。また、動画としても、以下にまとめられている（右上 QR コード参照）。

https://www.youtube.com/watch?v=Pm8KMGL0B7s

B）は、昨年に引き続き、名古屋市の伝統工芸鳴海絞りの工房「こんせい」と協力し、東海大

[1] 東海大學日本語言文化學系国際交流専區
https://nihongo.thu.edu.tw/int-exchange/2024%e7%94%b2%e5%8d%97%e6%97%a5%e6%96%87%e7%87%9f/

學の地域貢献事業との共催で実施する準備を進めた。C)は、台中市内の高齢者を対象とする「長青学苑」および一般の語学学校であるYWCAのクラス見学を予定していたが、本年度は、JASSO に申請していた短期研修が採択されたことで、これらに加え日程を延長し、台南市の小・中・高校を訪問し、日本語紹介などを通じて交流活動を実施することとなった。これらの事前準備は、教員が打ち合わせを進め、学生は現地において準備する段取りとした。

また、渡航ガイダンス（7 月 12 日）では、海外における留意点、健康管理、生活、通貨、持ち物などの注意事項が確認された。

② スケジュール

台湾での実習の日程は、以下の表の通りである。授業活動としては 8 月 21 日～9 月 3 日までの 2 週間（1 名は集中講義科目の重複により短縮して帰国）で、JASSO 申請プログラムの追加参加者 5 名については、9 月 6 日まで 17 日間の日程となった。

台中市では、東海大學での「日本語キャンプ」「日本文化体験」と、学外の日本語教室への見学参加、市内観光をおこなった。

台南市では、小学生児童の家庭などでのホームステイを含め、小・中・高校生との交流活動という、得がたい経験ができたことが、今年度の特徴的な活動であった。

国外実習　日程表

	月日	曜日	宿泊地	内容		
				A　日程 （曽田）	B　日程 （豊岡、井上）	C　日程 （深田,朝岡,村林,手塚,前川）
	2024/8/18	日		終日　「日本語キャンプ」3大学の班ごとに直前打ち合わせ		
	2024/8/19	月		終日　「日本語キャンプ」3大学の班ごとに直前打ち合わせ		
	2024/8/20	火				
1	2024/8/21	水	校友會館	7：50　セントレア出発ロビー集合 出発（飛行機→MRT→高鐵→タクシー）東海大学		
2	2024/8/22	木	校友會館	「日本語キャンプ」3大学打ち合わせ　授業準備		
3	2024/8/23	金	校友會館	AM：実習 PM：ふりかえり　翌日の授業準備		
4	2024/8/24	土	校友會館	AM：実習 PM：ふりかえり　翌日の授業準備		
5	2024/8/25	日	校友會館	班ごとの作戦会議		
6	2024/8/26	月	校友會館	AM：実習 PM：ふりかえり　翌日の授業準備		
7	2024/8/27	火	校友會館	AM：実習 PM：ふりかえり　翌日の授業準備		
8	2024/8/28	水	校友會館	AM：実習　【成果発表会】 PM：ふりかえり　（うちあげ）		
9	2024/8/29	木	校友會館	日本文化交流（鳴海雪花絞り）　AM・PM（各時間帯に4人ずつ担当）		
10	2024/8/30	金	校友會館	AM：長青学苑教室見学（賈志琳先生）と会話練習 PM：ふりかえり 夜：19:00-21:00　台中YMCA教室見学（大力夕加先生）		
11	2024/8/31	土	校友會館	【帰国】	実習記録まとめ作業　買い物　等	
12	2024/9/1	日	校友會館		台中市見学	
13	2024/9/2	月	校友會館		各自自由行動	
14	2024/9/3	火	台南 ホームステイ		活動のまとめ →【帰国】	活動のまとめ→台南ツアー 蓮潭国民小学校
15	2024/9/4	水	台南 ホームステイ			午前：東山国民中学校 午後：家齊高等学校
16	2024/9/5	木	台南 煙波大飯店			台南観光
17	2024/9/6	金				活動のまとめ 解散　【帰国または旅行】

2. 「日本語キャンプ」報告書(東海大學版)からの抜粋

曽田 優奈

甲南大学、東海大學、愛知県立大学、三大学で報告書を作成した。

東海大學日本語言文化學系のウェブサイト「国際交流専區」に「2024 甲南日文営」として、報告書（全 234 ページ）が掲載されている。

https://nihongo.thu.edu.tw/int-exchange/2024%E7%94%B2%E5%8D%97%E6%97%A5%E6%96%87%E7%87%9F/

本報告書では、その中から一部抜粋引用して掲載する。

プログラム全体に関連した情報の中から引用した各ページには、引用元のページ番号を記述し、引用部分の下に、曽田が簡単な説明文を加えた。

募集ポスター(『「日本語キャンプ」報告書』p.6 より抜粋)

日本語キャンプの参加者を募るポスターである。小学生から 80 代まで、幅広い年齢の学習者が集まり、約 90 名を「入門」「初級Ⅰ」「初級Ⅱ」の 3 クラスに振り分けた。

参加者名簿(『「日本語キャンプ」報告書』p.7 より抜粋)

参與人員名單

		東海大學	甲南大学	愛知県立大学
指導老師		張瑜珊 菅田陽平	野々口ちとせ	東弘子
参與實習生	入門クラス	彭嘉誠 謝欣妤 曾品晶	ジョリーサンスステラ 佐藤和	朝岡沙月 村林芽明
	初級一クラス	黃妍欣 張家怡 吳沛恩	蓮井明莉 梶井万葉	井上稚葉 豊岡菜帆 前川礼奈
	初級二クラス	李妤柔 廖凰君 詹佳倩	駒橋由梨乃 西村穂香	手塚渚月 深田琴音 曾田優奈

東海大学の教員 2 人と学生 9 人、甲南大学の教員 1 人と学生 6 人、愛知県立大学の教員 1 人と学生 8 人で授業計画や教室運営を行った。準備は 5 月末から始まり、オンライン会議で打ち合わせを重ね、教員からの指導を受けながら計画を練っていった。

入門クラスの授業概要(『「日本語キャンプ」報告書』p.13～14 より抜粋)

入門クラス　日程と担当一覧

全体のテーマ：旅行 実際に使えるフレーズを学ぼう

	1 限目 9:00～9:50	2 限目 10:00～10:50	3 限目 11:00～11:50	午後 14:00～
8/23(金) 自己紹介 50 音の練習 五日間の計画説明	・自己紹介 ・50 音	「[OOOO] の1/ 2/ 3/4年生です」 「[数字]さいです」 「[OOOO] が好きです」 「すみません」 「ありがとうございます」 「おはようございます」 「さようなら」	・二日目から四日目授業の導入 ・旅行プランを説明する ・漢字から注意事項を推測する	反省会 次の日の授業内容の確認と教員の準備
	MT:彭嘉誠 AT:全員	MT:彭嘉誠 AT:全員	MT:彭嘉誠 AT:全員	
8/24(土) 大阪と神戸を旅行 移動で使えるフレーズ	・～から～まで ・「すみません、大阪駅に行きたいです。ホームはどこですか。」 ・「これは、三ノ宮まで行きますか。」	「(ループバスのバス停)はどこですか。」 「あそこ・ここです。」 「(1Day チケット)を買いたいです。」	RPG ゲームを通して、1限目と2限目で学んだ内容を応用する。	反省会 次の日の授業内容の確認と教員の準備
	MT:佐藤和 AT:全員	MT:ジョリーサンスステラ AT:全員	MT:曾品晶 AT:全員	
8/26(月) 愛知の紹介 レストランと買い物時使えるフレーズを	「○人です」 「○○でお願いします」 「○○はありますか」 「○○をください」	「これ、お願いします。」 「～は要りません」	RPG ゲームを通して、1限目と2限目で学んだ内容を応用する。	反省会 次の日の授業内容の確認と教員の準備
	MT:朝岡沙月 AT:全員	MT:朝岡沙月 AT:全員	MT:曾品晶 AT:全員	
8/27(火) 北海道の紹介とホテルで使えるフレーズや単語	「N+お願いします」 「チェックインお願いします」 チェックイン方法	「すみません」 「N はありますか？」 「N はどこですか？」 「何時からですか？」 「何時までですか？」 「Wi-Fi のパスワードを教えてください」	RPG ゲームを通して、1限目と2限目で学んだ内容を応用する。	四日目の反省会と五日目の授業準備 反省会 次の日の授業内容の確認と教員の準備
		「チェックアウトお願いします」 「荷物お願いします。大丈夫ですか」		
	MT:村林芽明 AT:全員	MT:村林芽明 AT:全員	MT:謝欣妤 AT:全員	
8/28(水) 5 日間のまとめ	RPG ゲームを通して、一日目から四日目で学んだ内容を応用する。	旅のしおり作成	修了式	
	MT:ジョリーサンスステラ、曾品晶 AT:全員	MT:佐藤和 AT:全員	MT:全員	

入門クラスの 5 日間のテーマは「旅行」であった。学習者が実際に日本を訪れたときに活かせるよう、体験型の活動を多く取り入れた授業計画であった。

初級Ｉクラスの授業概要(『「日本語キャンプ」報告書』p.77 より抜粋)

初級一クラス　日程と担当一覧

全体のテーマ：　観光とオーバーツーリズム

	1限目 9:00～9:50	2限目 10:00～10:50	3限目 11:00～11:50	午後 14:00～
8/23(金) オーバーツーリズムを知る	アイスブレイク 自己紹介 旅行が好きか質問 地図パズル	愛知と台湾の情報紹介、写真問題 愛知県、台湾の紹介 文法「(どこ)には(なに)があります」の導入 写真問題	オーバーツーリズムについての説明 概要説明 台湾の場合	2 日目授業準備
	MT:井上稚葉 AT:黄妍欣	MT:井上稚葉 AT:呉沛恩	MT:井上稚葉 AT:張家怡	
8/24(土) 鎌倉・江の島のオーバーツーリズム	鎌倉・江の島について知る インタビュー 人気な理由を説明 聖地巡礼	可能形を学ぶ 文法紹介 マス形から可能形に変換作業 鎌倉・江の島でできることを伝える	鎌倉・江の島のオーバーツーリズム 江ノ電の交通渋滞解決策について まとめ、ふりかえり	3 日目授業準備
	MT:豊岡菜帆 AT:呉沛恩	MT:豊岡菜帆 AT:呉沛恩	MT:豊岡菜帆 AT:呉沛恩	
8/26(月) 京都のオーバーツーリズム	京都について知る 文化の紹介 文法「テ形」の導入	京都について知る 観光地の紹介 文法「～てください」 アクティビティ	京都のオーバーツーリズム 京都のごみ問題の動画視聴 ごみ問題の解決策を考える	4 日目授業準備
	MT:蓮井明莉 AT:黄妍欣	MT:蓮井明莉 AT:黄妍欣	MT:蓮井明莉 AT:黄妍欣	
8/27(火) 大阪のオーバーツーリズム	大阪について知る 「テ形」の復習 文法「～てはいけません」 大阪を観光	大阪のオーバーツーリズム 大阪の特徴 間違い探し 黒門市場のオーバーツーリズム	発表準備 文法確認 文法練習 観光地とオーバーツーリズム問題の復習	5 日目授業準備
	MT:梶井万葉 AT:張家怡	MT:梶井万葉 AT:張家怡	MT:梶井万葉、前川礼奈 AT:張家怡	
8/28(水) 発表会	オーバーツーリズムの解決策を考える オーバーツーリズム問題と文法の復習	発表準備	発表 オーバーツーリズムまとめ 修了式	全体の振り返り
	MT:前川礼奈 AT:東海全員	MT:前川礼奈 AT:東海全員	MT:前川礼奈 AT:東海全員	

77

初級Ｉクラスのテーマは「観光とオーバーツーリズム」であった。日本各地のオーバーツーリズムの事例を紹介し、学習者に解決策を考えてもらうという授業計画であった。

初級Ⅱクラスの授業概要(『「日本語キャンプ」報告書』p.146 より抜粋)

初級二クラス　日程と担当一覧

全体のテーマ: 健康な食生活

	1限目 9:00～9:50	2限目 10:00～10:50	3限目 11:00～11:50	午後 14:00～
8/23(金) 学校の給食	自己紹介 5日間の内容紹介	日本の学校給食の紹介	献立を考える	反省会 二日目授業準備。
	MT:曽田優奈 AT:詹佳倩・手塚渚月	MT:曽田優奈 AT:詹佳倩・手塚渚月	MT:曽田優奈 AT:詹佳倩・手塚渚月	
8/24(土) 食中毒	食中毒について	食中毒の予防について	私たちができる予防について考える。	反省会 三日目授業準備。
	MT:駒橋佑里乃 AT:李好柔・西村穂香	MT:駒橋佑里乃 AT:李好柔・西村穂香	MT:駒橋佑里乃 AT:李好柔・西村穂香	
8/26(月) バランスの良い食事	学校の給食の復習でバランスの良い食事を説明する。 絵カードゲーム	MT、AT四人の食事に対してバランスがいいところ、悪いところを考える。 「食べすぎる/すぎない」「飲みすぎる/すぎない」「ないほうがいいです」の文型を学ぶ。	二時間目の文法の復習 「スイーツパラダイスに行ったら…」について話し合う。	反省会 四日目授業準備。
	MT:手塚渚月・廖凰君 AT:李好柔・駒橋佑里乃	MT:手塚渚月・廖凰君 AT:李好柔・駒橋佑里乃	MT:手塚渚月・廖凰君 AT:李好柔・駒橋佑里乃	
8/27(火) 食品の保存と管理	保存食と非常食について 非常食クイズ1	非常食クイズ2 非常食の試食 「と思います」「賛成/反対です」「なぜなら～からです」の文型を学ぶ。	非常食を買いたいですか？」「日本のように非常時のために、食品を備蓄しておくことには賛成ですか？ 反対ですか？」二つの質問を考える。	反省会 五日目授業準備。
	MT:深田琴音 AT:詹佳倩・曽田優奈	MT:深田琴音 AT:詹佳倩・曽田優奈	MT:深田琴音 AT:詹佳倩・曽田優奈	
8/28(水) ポスター発表	4日間の復習 発表準備	発表準備の続き	発表 まとめ 終了式	反省会
	MT:西村穂香 AT:深田琴音・廖凰君	MT:西村穂香 AT:深田琴音・廖凰君	MT:西村穂香 AT:深田琴音・廖凰君	

146

初級Ⅱクラスのテーマは「健康な食生活」であった。栄養バランス、食中毒、非常食など、様々な観点から「健康な食生活とは何か」を考えるという授業計画であった。

3. 日本文化体験：染め物（雪花絞り）ワークショップ

東 弘子

日本語キャンプが終了した翌日 8 月 29 日に、東海大学日文系（日本言語文化学科）、美術系（美術学科）および樂齢生活與科技創新中心（高齢生活と科学技術イノベーションセンター）と、名古屋市の伝統工芸鳴海絞り工房「こんせい」の協力で、東海大学において染め物ワークショップが開催された。右図のような案内チラシで、事前に募集され、当日の参加者は午前・午後合わせて約 50 名であった。

実習生は、午前と午後、4 名ずつで分担し、浴衣や上っ張りを着て、染め物体験の作業のアシスタントをした。布をたたむ作業の手伝いや参加者との記念撮影などの役割である。日本語キャンプで共に活動した東海大學の呉さん、曾さん、張さんも、受付や通訳などアシスタントとして活躍した。

参加者は、東海大學の養生村（高齢生活活動グループ）の関係者の他、日本語キャンプの学習者、日文系の教員や家族、一般の方などで、年配の方から子どもまで、日本の伝統染めの講義と簡単な手順でできる染め物体験を楽しんだ。それぞれが色と柄を選び、できあがった自分の作品を持って笑顔で記念撮影をしていた。台湾でも藍染めなどの伝統工芸があるが、江戸時代から続く日本の染色文化を気軽に体験できる本講座のお手伝いをすることで、台日文化交流の一端を経験することができた。以下の写真は、会場での活動の様子である。

4. 台中日本語教室見学

曽田 優奈

① 長青学苑

長青学苑は、台中の市民センター「十甲里等 3 里多功能活動中心」で開かれている高齢者向けの日本語講座である。

日本語キャンプの内容を交えた自己紹介の後、4 つのテーブルを順番に回りながら、学習者の手料理や果物、台湾のお菓子の説明を受け、食べた感想を伝えたり質問をしたりした。

学習者のノートに料理の説明がびっしり書かれていたのが印象に残った。料理の話以外にも、大学で学んでいることについて質問したり、日本の思い出や日本に滞在している家族のことを話してくれたりして、学習者が私たちと話すのを心待ちにしてくれていたのを実感した。

② 台中 YMCA

台中 YMCA では、日本人の先生が社会人の学習者に教えており、高校生も参加していた。

前半は、「～と書いてあります」という文型を、イラスト付きの教科書を用いて教えている様子を見学した。音読や会話練習だけでなく、例文の暗唱を取り入れているのが印象に残った。

後半は 4 グループに分かれて自己紹介をし、それをもとにお互いについて質問し合った。稿者のグループでは、日本の歌手の話や、学習者が日本を旅行したときの思い出話が弾んだ。

授業の最後には、グループごとに教壇に立ち、クラス全員に向けて各グループの実習生を紹介してもらった。

活動を通して、日本語を学びたい、日本に来たいという学習者の熱意に触れ、日本で生活者に日本語を教えるのとは違った楽しさを感じた。

5. 台南ツアー

蓮潭小学校訪問（9 月 3 日）

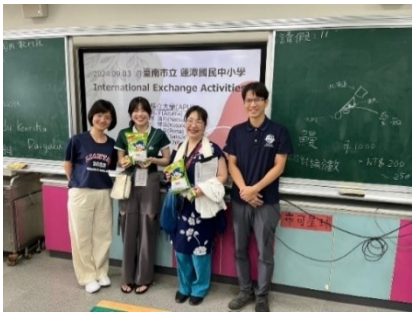
朝岡 沙月

早朝、東海大学から大型タクシーで出発し、午前 10 時に蓮潭小学校に到着した。

到着後、英語で簡単な自己紹介などを行い先生方との交流会を行った。国際交流を活発に行っている学校ということもあり先生方は英語が堪能な方が多い印象だった。また小学校のキャラクターグッズや台南の特産品など記念品を贈呈された。

その後、実習生は二人ずつでペアになり、1 クラス 1 限ずつ、3 つのクラスの授業を行った。実習生と共に英語が堪能な小学校の先生が付き添い最初のあいさつや簡単な導入を行ったため、先生方のサポートのおかげで授業の雰囲気が作れたように感じた。自己紹介や簡単な日本語、愛知県立大学の紹介などのスライドを事前に用意したが、私たちのペアは小学校低学年のクラスを担当したため自己紹介の後は小学生からの質疑応答のみで授業が終了した。私たちは基本的に英語のみを使った。小学生からの質問は自己紹介や日本にまつわるものが多く、英語で質問をするよう先生が促していたが、低学年の為英語が苦手な生徒も多く、中国語の質問の際には先生の通訳に助けられた。二回目からは授業の雰囲気や流れを把握できたため、最初から子供たちが質問しやすいような明るい空気を作ることができた。クラスによっては時間が余った際に簡単な日本語（挨拶など）を教えたり、日本の有名なダンスを I フレーズ教嬉しかった。全員で踊るなど、“日本語、日本文化を教える”ということより“外国人との交流の楽しさを知るきっかけにする、習った英語を外国人に実際に使う場にする”ということをより重要視した授業だったため、自由度が高く、授業の時間やその場の状況に合わせて授業展開ができた。授業後は子供たちがサインをお願いしてきたりプレゼントを渡してきたりなど、中国語や英語、知っている日本語などを使ってとても積極的に話しかけに来てくれたことが嬉しかった。

また、授業を通して台湾に日本文化が予想より浸透していることに気が付き驚いた。外国語や国際交流に小学校だからということもあるかもしれないが、力を入れている日本に行ったことがある生徒がクラスの 3 分の 2 ほどおり、日本の地名や挨拶などを言える生徒が多かったり、日本のアニメキャラクターがとても人気であるなど、日本や日本文化に好意を持ってくれている生徒が多かった。



（付き添いの先生方と）

（授業の様子）

昼食は学校の給食を食べ、その後ドイツ人とアメリカ人の先生方と国際交流をした。二人とも私たちと同じくらいの年齢であったが単身で台湾に住み込んで働いており、彼らの話は日本教師資格取得を目指す私たちの刺激になった。

（国際交流の様子）

食後は実習生全員で体育の授業に参加した。体を使った簡単なゲームを生徒たちと共に行った。先生は授業では基本的に英語を使用しており、文章ではなく同じ単語を毎回使っているため生徒たちも理解しているようだった。また、先生が手をあげたら見る、笛を吹いたら集まる、など言葉を使わず指示を出すルーティンを取り入れており、子供たちも口で説明するよりスムーズに動いているように感じた。

体育後はホームステイ先の家族と小学校で会い、そのままそれぞれのホームステイ先に帰宅した。

（体育の授業）

東山國民中學（9 月 4 日）

村林 芽明

台鐵の在来線で南科駅から新営駅へ移動し、次の訪問先である東山中学校に向かった。

まずは学校の校内見学と養蜂体験を見学し、その後教室で中学生たちと交流をした。校内見学では、校長先生からの案内があり、自然豊かで開放的な校舎を見て回った。校長室の壁には、世界地図と今まで来校した外国人たちが紹介されており、校内で国際交流の機会が設けられていることが見受けられた。また、校舎の壁にはこの学校を象徴するハチとコーヒーの実、テコンドーのマークが描かれていた。ちなみに全校生徒はわずか 80 人ほどだそうで、小規模でアットホームな中学校だと感じた。

養蜂体験は、この中学校の大きな特徴のうちの一つともいえる活動であり、専門家を呼んで学校内でミツバチを飼育しているそうだ。専門家の方は軽装でハチの巣を取り扱っていたが、私たち学生や中学生は専用の帽子をかぶり見学をした。見学の際、実際に希望者に

はハチを触らせてもらえたが、怖がっている生徒も多かった。教室内では蜂蜜水が置かれているそうで、適宜飲めるらしい。

生徒たちとの交流では、愛知県立大学とその周辺について英語で紹介し、それぞれが学ぶ言語の簡単な挨拶も紹介した。前日の小学生たちと比べると、中学一年生の生徒たちは大変恥ずかしがり屋で、最初は質問があるか聞いてもあまり反応がなかった。しかし、担当の先生が英語を中国語に訳してくださり、内容の確認や質問も交えながらサポートしてくれた。また、生徒たちは慣れない英語での質問に抵抗があっただけで、先生のサポートのおかげで「英語が完璧にわからなくても大丈夫」という温かく素敵な雰囲気に包まれていたように思う。活動終了後には個人的に話しかけてくれる生徒が何人かいて、一緒に写真撮影をした。

その後、校長先生のはからいで老街でとてもおいしい麺線と豆花を堪能することができた。また、校長先生の案内で学校近くの東山碧軒寺にも訪問できた。

半日ではあったが、他では味わえないような貴重な体験をすることができた。中学生たちにとっても、心に残るものになっていたら嬉しく思う。

家齊高等学校（9 月 4 日）

深田 琴音

電車とタクシーを使用し、高校に到着した。教育旅行として来日の予定がある約 60 名の高校生に向けて 50 分程度の発表を行った。内容は、スライドを使用し、県大紹介と挨拶等の簡単な日本語紹介であった。基本英語で発表を行ったが、日本語の紹介場面では、生徒達に日本語を声に出してもらう箇所も用意した。その後質疑応答の時間を設け、愛知県立大学のことや、私たち自身のことなど高校生が興味を持った部分を深掘りして発表した。質疑応答の最初は高校

（家齊高校での発表の様子）

生達が緊張してしまい、なかなか手が挙がらなかったが、生徒の近くに行ったり、質問内容はどのようなものでも良いと言うことを伝えたり徐々に質問してくれるようになった。生徒達は旅行として日本に来るため、「おすすめスポットはどこか」「なにがおいしいか」等の質問が主であった。しかし、実習生自身に興味を持つ生徒もいて、私たちが愛知県立大学外国語学部に入学した理由などもきかれた。

その後、教室を移動し、バリスタ体験とソーイング体験を行った。ここでは、家齊高校にきているドイツとメキシコからの留学生との交流も行うことができた。さらに、高校生ながらバリスタという夢に向かって努力している学生の煎れた本格的なコーヒーや、カプチーノと共にケーキを食べた。自分たちと同年代かそれ以下の人が頑張っているということに感銘を受けた。そして実習生達もよりやる気をいただける貴重な機会であった。

ケーキと飲み物を後には、家齋高校の制服の柄があしらわれた生地を使用した縫い物体験を行った。説明は事前に勉強した日本語と英語で、私たちのために日本語を学んだことが非常にうれしかった。縫い物になれていない実習生ばかりであったが、手取り足取り優しく教えてもらった。できた作品がそれぞれが持ち帰ることができ、大切な思い出の品になった。

（縫い物体験で使用した布地）

（振る舞われたケーキと飲み物）

そして、4 日にホームステイ予定の家の先生達と合流し、それぞれの家に向かった。ホームステイの間も会話は主に英語で行っていたが、中国語が話せる実習生は簡単な中国語も使用しそれぞれが積極的にコミュニケーションを取っていた。私自身ホームステイ前は自分の英語力に自信がなく、中国語も全く話せないため、会話が成立するか不安な部分があったがそれは取り越し苦労で、実際は私の拙い英語もなんとか理解しようとしてくれる優しい家族で、楽しい時間を過ごすことができた。

6. 帰国報告会

手塚 渚月

① 概要

11 月 6 日(水)12:10 から、大学の異文化交流スペース CroCuS にて日本語教育実習（国外）の報告会をした。PowerPoint を使い、台湾で行った日本語学習キャンプのことや、日本文化体験、台中市の日本語教室訪問、台南での活動などについての報告を、実習生 8 人全員で行った。右の写真がその様子である。

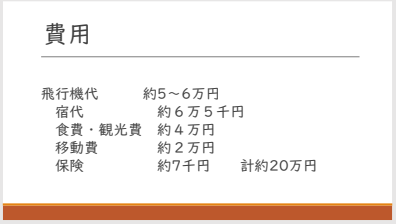
来場者は日本語教員課程に関心がある学生が多く、加えて国内実習の実習生もいた。スライドを用いて発表した後は質疑応答の時間を設けた。この報告会が今後の国外実習に参加する人にとって、少しでも参考になっているといいなと思う。

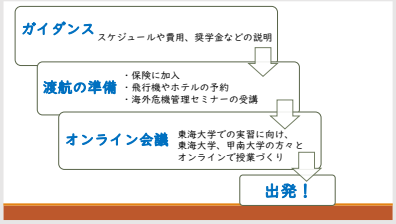
② 告知ポスター

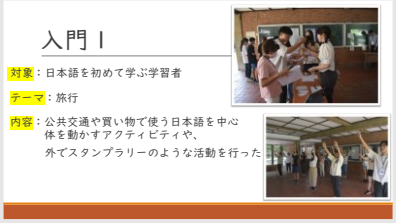
以下は、帰国報告会の告知のために作成したポスターである。

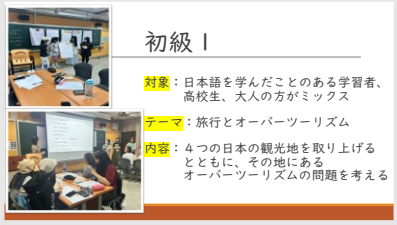
③　PowerPoint スライド

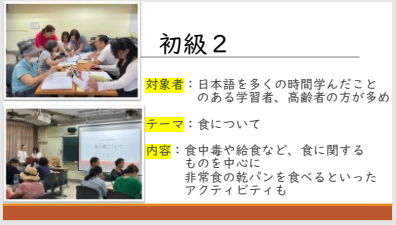
以下の資料は帰国報告会で使用したスライドである。

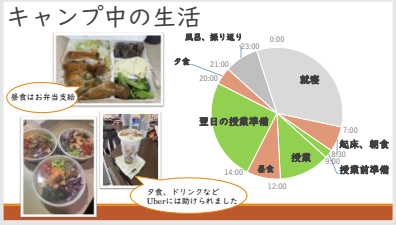


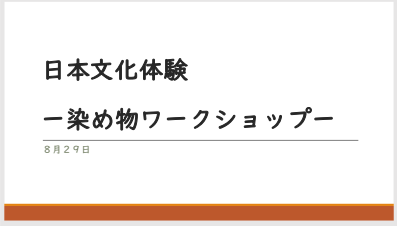












台湾の日本語教室訪問

8月30日

長青学苑

ひとりずつ
自己紹介

用意していただいた
お菓子や果物、
手料理を食べながら
お話

台中YMCA

前半：授業見学　後半：グループ活動

グループで自己紹介

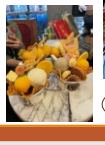
最後は私たちの
ことをみんなに
紹介してくれまし
た！

台中観光

9月1日

スーパーで
お土産探し！

待ちに待った
宮原眼科の
アイスクリーム



宮原眼科には
お土産もたくさん

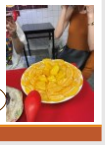
小籠包も
食べました

タピオカミルクティー
発祥の店
「春水堂」

台中国家歌劇院

台中市の大きな夜市
「逢甲夜市」

東海大学近くで食べた
マンゴーかき氷



台南での活動

9月3日～9月6日

学校訪問（English）

３校を訪問（小中高それぞれ）
学生と交流（自己紹介・大学の紹介・日本語のフレーズ紹介等）
先生達ともコミュニケーションを取った
高校では裁縫体験やコーヒーショップ体験等も

ホームステイ

台南２泊（１泊目は小学生の家・2泊目は高校の先生の家）
家族で出かけたり、家でゆっくりご飯を食べたり過ごした方は人それぞれ
会話は基本英語（中国語ができる人は中国語も）

台南観光

9月5日

林百貨店

国立台湾文学館

河岸珈琲

度小月

石獅下鮮果冰城

台南市美術館２館

「文学の力」展
（国立台湾文学館）

孔子廟

7. 実習生ふりかえり

新たな出会いと新たな学び

村林 芽明

学んだこと

今回の実習を通じて、学習者の視点に立って授業を構成する重要性を深く学ぶことができたと思う。

特に印象に残っている活動は日本語キャンプだ。これまでオンライン会議を重ね、十分に準備を整えたつもりでいたが、実際に授業を進める中で多くの課題が浮かび上がった。特に、学習者個々の習熟度に対し配慮しながらも、授業の進行を滞らせないことが大きな課題であった。例えば、私たちの入門クラスでは五十音が読める人と読めない人、ローマ字に慣れている人とそうでない人が混在しており、その差が授業進行のネックとなっていた。また、学習者の中で 13 歳から 70 代までと年齢の幅も広く、それぞれのニーズに対応する必要があった。自分が学習者の立場だったらどう感じるかを常に考えて授業を作ることを意識することができた。

こうした中で、私たちは受動的ではなく「主体的に学んでもらう」という目標を掲げ、グループワークやクイズ（クエスト）を多く取り入れた。授業では一人一人を取り残さないことが重要ではあるが、特定の学習者に集中しすぎて他の学習者を置き去りにしてしまうということが多々起こってしまった。こういった状況はどの教室でも直面する課題だと思うが、今回は実習生が複数いたために対応できたものの、今の未熟な状態の自分一人では到底対処できなかったと感じた。この点は今後の課題としてさらに取り組んでいきたい。

感じたこと

課題を痛感する一方で支援者側を体験しての喜びもあった。最終クエストを通して、短期間ながらも学習者が日本語を習得している手応えを感じた。学習者が自ら五十音表を手に取って調べてくれるようになったり、翻訳機を使って自らコミュニケーションを取ってくれるようになったりと、学習者の嬉しい変化が多々見受けられた。授業内でグループワークやクエストを組み込んだことで「主体的に学ぶ」姿勢が育まれていたということは大きな成果だと思う。支援者が学習者に知識を一方的に詰め込む授業の方が簡単ではあるかもしれないが、自発的に学ぶ機会を提供する方が、学習者の理解や吸収が深まることを実感することができた。

この国外実習は非常にハードなスケジュールで、辛いと感じるときもあった。しかし、学習者が楽しそうに学んでいる姿を見て、準備した甲斐があったと達成感を強く感じている。また、中国語を専攻している身として、個人的に今回の実習を通して自身の語学力の無さを痛感できた。た

だ、伝わらない中でも諦めずにどうにかして伝えようとする力がついたと思う。そして台湾の方々も、ゆっくりでいいよと待ってくださったり、簡単な中国語に言い直してくださったりといったコミュニケーションをとろうとしてくださる優しい姿勢に何度も救われた。何よりも相手に伝えたいという気持ちを持つことの大切さを学んだと思う。この悔しさをバネに語学勉強にも励みたい。

この貴重な機会をいただけたことに感謝し、今回の国外実習で出会えたご縁を大切にしていきたいと思う。

国外実習を通して-柔軟な対応力と”学ばせる”授業の重要性

朝岡 沙月

私は国外実習を通して主に 2 つのことを学んだ。

1 つ目は、授業づくりにおける柔軟な対応力の重要性である。日本語キャンプが始まる何日も前からオンラインでグループの方々と話し合い、先生のアドバイスを聞き、何時間も試行錯誤して授業案を練ったにもかかわらず、いざ東海大学での実習が始まると、直前に生徒数が変更したり、初級クラスの学習者が私たちの入門クラスに変更したいと希望してきたりと、想像していない面での変更が多々あり、グループワークを中心に授業を考えてきた私たちはグループや生徒の変更に臨機応変に対応しなければならなかった。

また、入門クラスの学習者を、年齢などは把握していたが、“日本語がほとんど話せない学習者“としてしか認識しておらず、蓋を開けてみるとローマ字は読めないがひらがなは読める方、勉強したことはないが趣味などの影響から簡単な単語は理解できる方、一切日本語を知らない方など、様々なレベルの学習者がいた。学習者のレディネスを理解することは授業づくりで重要だと十分に習っていたはずなのに、実践でようやくその難しさに気が付いた。急な変更や学習者の様々なレディネスは、その全てを事前に予測し対応できるようにしておくことは難しいが、授業づくりの段階でもっと様々な面から予測しておく必要があると感じた。しかし、このような学習者がいる、という気付きやこの変更にはこう対応したが別の方法があったかも、など感じたことを授業毎に共有して次の授業に生かすことができたと思う。

2 つ目は、”教える”のではなく”学ばせる”という意識である。今回の日本語キャンプで、教師が知識を与える授業ではなく、学習者が自ら知識を得ようとする授業が学習者にとって最も意味のある体験になるのではと感じた。私たちは日本語学習に直接関係があるわけではない（授業内容には関係する）アクティビティも頻繁に行い、教室の外で動くような学習方法も取り入れ、学習者が聞くだけにならないような授業づくりを心掛けたが、学習者から動く形にすることで学習者が受け身でなくなり、ゲームのクリアなどのために自分から日本語を使おうとする姿勢が見られた。また学習者が授業の流れをつかみ、慣れてくると自主的に動き、スムーズに授業が行えたと感じた。このように、いかに学習者が自分から動きやすいような授業を考えられるかが授業

づくりにおいて難しくもあり重要なことだと学んだ。

台南での実習では高校や小学校でその場で臨機応変な授業を行ったが、学校や学習者の空気感や会話の中から授業が興味を持ってもらいやすいものになるよう考えることが大変だが楽しかった。また、日本を好きだと言ってくれる人に沢山出会うことができ嬉しかった。
ホームステイ先ではとても良くしてもらい、台湾の文化をたくさん教えてもらう良い異文化交流の場となった。実習中はホストファミリーを始めとするたくさんの現地の方々のご厚意のおかげで様々な経験ができたと感じる。

国外実習を通して、台中でも台南でも特に授業づくりにおける臨機応変さの重要さに気が付いた。事前準備をいくらしても全くその通りにできるか否かより、授業を行っていく中で最善を考えることが大切なのだと感じた。思うようにいくことの方が少なく反省だらけの実習だったが、学習者の方々の感謝の声や成長から達成感を感じ、私にとってこの国外実習はすごく貴重な体験となった。

国外実習をふりかえって

井上 稚葉

日本語キャンプでの活動

私は初級 1 のメンバーとして、「観光とオーバーツーリズム」をテーマとした授業づくりに参加した。初めは、慣れないオンライン会議で自分の人見知りな性格や緊張が原因し、うまく自分の意見を伝えられなかったり、他のメンバーの意見に同調したりすることしかできなかった。しかし、担当する日を決めてからは、自分がその日の授業を作る中心になるんだと自覚し、自分なりの考えをメンバーに少しでも多く伝えようと意識するようになった。特に私の担当日は初日であったため、その後の授業への期待を高められるような授業にしたいと考え、競争形式をとったグループワークや日本と台湾の魅力を共有し合うような活動を盛り込んだ。

初日は学習者のレベルが全く分からず手探りの状態で授業を行ったが、学習者が質問に積極的に答えたり、熱心に話を聞いてくれたりしていたのを見て、教案やスライドを練り上げたかいがあったと安堵した。初級 1 の学習者にとっても、この 5 日間の授業が日本語学習意欲をより高めるきっかけになっていたらとても嬉しい。

苦戦したことは、時間配分に気をつけることである。色々なことを伝えたいと思い、多くの情報を詰め込んだ教案を作成した。しかし、実際に授業が始まると、1 つの活動を行うだけでも想像以上に時間が必要なことが分かった。そのため、時間内に全てを説明することができないと判断し、発表する内容に優先順位を付けることになった。全てを紹介したいという思いはあったものの、特に重要である部分に時間をかけることで、翌日以降の授業にもスムーズに繋げられたため、必ず発表したいという内容を予め決め、時間配分を設定することが重要だと思った。

日本語キャンプに参加したことで、初級 1 のすばらしいメンバーと出会うことができた。全員で 5 日間の授業を作成できたことは私にとってかけがえのない経験である。これからもこのご縁を大事にしていきたい。

その他の活動

長青学苑や YMCA への訪問では、台湾での日本語学習の実態を垣間見ることができた。日本語を学ぶ理由や目的は多様であるが、日本語母語話者として、自分の母語を熱心に学んでいる人がいるのだという事実を嬉しく思った。同時に、台湾の文化や言葉も教えてもらい、互いを知り合うという姿勢はどのような支援方法であっても重要であると感じた。

台湾での出会いと経験

前川 礼奈

日本語キャンプ

私にとって東海大学での 5 日間は、日本語教師の楽しさと難しさを再認識する経験となった。授業内容や教材を一から構成する初めての機会であり、授業内容においては、ルビの量は適切か、通訳はどの程度お願いすべきか、どんなアクティビティが主体的に参加してもらえるのか、といった点を考えることに難しさを感じた。学習者と関わって初めて分かったことも多く、例えば文字の表記に関しては、漢字圏であることから、ひらがなにするとかえって読みづらくなることが気づきであった。また、授業を展開するにあたって、ひたすら情報を提示する授業は時間の見通しが立てやすいが、学習者が楽しく参加できることを考慮すると、主体的に活動し理解が深まるようなアクティビティを組み込む必要があることを学んだ。さらに、教室のレイアウトにおいても、意見を出しやすいようなグループ構成、座席の配置を行い、自身も学習者と意見交換を行うことで授業をより発展させていく楽しさを感じた。 一方で、日本語の難しさにも改めて向き合う機会となった。学習者の方は積極的に質問をしてくださったが、うまく答えられないこともしばしばで、自分の勉強不足と日本語の難しさを実感した。しかしながら、教師と学習者という関係であっても、一緒に考えて取り組めることが日本語教師の魅力かもしれないとも考えた。

私は最終日の授業を担当し、1 日ごとの学習者のリアクション、理解の様子を見ながら授業を構成することに面白さを感じていた。学習の集大成となるようなアクティビティとして、実習前は制作物を作成する予定はなかったが、2 日目の模造紙を使ったアクティビティに対する学習者の様子から、最終日も取り入れることとした。このような点で、日本語教師には学習者に応じた臨機応変さが求められることも学んだ。

その他の活動

染め物ワークショップ、日本語を学ぶ地域の方々や台南の小中学校や高校での交流を通して、日本語教育の場は国際交流の場でもあると認識した。私たちが日本の習慣や文化を改めて見つめ直すことは、学習者目線の理解に繋がり、日本語教師としてのスキルのひとつともいえるのではないかと考えた。

実習を終え、台湾での出会いは一生ものだと感じている。日本語キャンプでは、全員が授業を良いものにしようと意見を出し合い、デリバリーしたドリンクとともに毎日夜遅くまで作業をした。最終日に実習生が一言ずつコメントをする時間が設けられた時、私は話すと同時に涙が溢れてしまった。自分でも涙が出るとは想像もしておらず、それだけ大変で、達成感のある日々であったと同時に、仲間とともに楽しく頑張った日々が終わってしまうことの寂しさを感じていたように思う。また、台南のホストファミリーとは現在も連絡を取っており、クリスマスにはプレゼントを贈り合った。国外実習は、日本語教師としての成長の機会だけでなく、大切にしたい出会いに恵まれた経験となった。

自分を見つめ直す２週間

豊岡 菜帆

日本語キャンプ

五日間の日本語キャンプは新しい場所、新しい人との出会い、新しい知識、新しい価値観など、得るものが多く、日本語教員課程を経るうえだけではなく、自分の人生においてかけがえのない時間となった。

キャンプを振り返ると当日のことではなく、準備期間が一番初めに頭によぎる。初級 1 を担当し、メンバーと一緒に「旅行とオーバーツーリズム」というテーマに決めた。様々な案がでるなかで、自分は日本人として台湾の方と何かを伝えあい、教えあい、学びあえるテーマにこだわり、オーバーツーリズムを提案した。日本が好きで日本語を学びたい学習者に旅行公害の現状を教えるのはどうなのか？日本にもう行きたくないと思ってしまうのでは。そういった不安もありながら、日本に興味をもってくれる学習者の方だからこそ、そうした日本の現状を知ってもらい、日本だけではなく、世界の素晴らしい風景が当たり前なのではなく、一緒に守っていく何か対策を考えていきたいなと思った。アンケートからはテーマが難しかったなどといった意見ももらったが、メンバーの素晴らしいアイデアとともに実りある授業を提供できたではないかと思う。

私はキャンプ二日目を担当し、「鎌倉・江の島と交通問題」について取り上げた。鎌倉・江の島の魅力を伝えつつ、聖地巡礼や映え写真などといったカルチャーな部分も取り込んだ。また文法項目として可能形を採用した。学習者はすでに学習済みであり、復習科目としてとりあげたが、高校生や大学生以外の学習者はあまり親しみのない文法項目であり、自分の想定してい

たよりも時間がかかってしまった。また体系的なものとして教えたが、学習者の方は想像以上に理解しようとしてくれた。自分は学習者の探求心を少し軽く見ていたなと反省する時間だった。どうしてこうなるのか？自分が納得し、一人で可能形に変換できるまで向き合い続ける学習者の姿勢をみて、指導者としてどうあるべきなのか、教えるだけでは足りない、そこから学習者の理解できたという実感につなげるためには何をするべきなのかを考えるべきであると思った。

頼もしい初級Ⅰのメンバーと力をあわせてアットホームに楽しく学べる教室を提供できたと思う。最終日には学習者の方が学んだ日本語を使って感謝を伝えてくれ、がんばってよかったなと心から思った。彼らからの言葉は一生忘れない。

他の活動

実習中、東海大学だけではなく、さまざまな日本語教育現場にお邪魔をし文化交流をした。どの学習者の方も熱心に日本語を勉強し、積極的にお話しする姿勢を見て、コミュニケーションとは「話したいという気持ち」から始まるのであると改めて感じることができた。 難しいことは考えず、目の前の人と話したいという気持ちから、優しい日本語や、聞きやすいスピードで会話をすることはできる。話したい、聞きたいという環境作りが大事なのであると考えることができた。

国外実習を終えて

曽田 優菜

私は初級Ⅱクラスで、初日のメインティーチャー（以下、MT）を担当した。当日は時間配分がうまくいかず、判断に迷い指示が出せなかったり、反対に計画になかったことを急遽頼んだりしてしまい、自分の段取りの悪さを痛感した。しかし、全体を俯瞰して授業の進め方を提案してくれたり、学習者の様子をこまめに報告してくれたり、説明が伝わりづらそうなときにその場で通訳をしてくれたりと、グループのメンバーに何度も助けられ、無事に授業を終えることができた。

活動を通して、学習者に活動の目的を明示することの大切さを学んだ。初日の前日の打ち合わせで、「動画をただ流すだけでは、音声を漏らさず聞き取ることに専念してしまったり、動画のどこに着目すればいいか分からなくなったりしてしまう」と指摘があった。そこで、何に注目してほしいか伝えたり、動画を途中で止めながら解説を加えたりしたところ、内容の理解に集中してもらうことができた。また、資料の作り方や配り方の工夫も学ぶことができた。1 日目は資料やワークシートを授業冒頭に配ってしまったため、学習者は今必要なものがどれか分からなかったり、グループで話し合うための時間にワークシートを書き進めてしまったりした。そこで、作業の直前にワークシートを配布したり、個人で書き込む資料と、グループ全員で見てほしい資料とで枚数や大きさを変えたりすることで、授業が円滑に進み、学習者にとっても授業資料の用途が視覚的に分かるようになった。

日本語学習者の目線で授業づくりや学習者とのコミュニケーションを助けてくれた東海大の3人、大学の模擬授業の経験を踏まえて提案したり、会議の進行を担ってくれたりした甲南大の2人、海外経験や地域日本語教室での経験を活かして学習者のサポートをしてくれた県大の2人のおかげで、初日のMTとしての役目を果たすことができた。今後、異なる経験や背景を持った人たちの中で活動するときに、グループのみんなのように自分なりの強みを活かすことができるよう努力していきたい。

長青学苑や台中 YMCA では、伝えたいことをびっしりと書いたノートを手に、一生懸命料理の説明をしてくれる学習者や、社会人として働きながらも日本語を学びに来ている学習者と話すことができ、日本や日本語への関心の高さ、熱意に圧倒された。

私は、海外で日本語を教えたいという動機の他に、「外国人」になる経験をしたいという動機で国外実習に参加した。地域日本語教室で外国にルーツを持つ児童・生徒の支援をしており、彼らが感じているような、母語の通じない環境で暮らす不安を少しでも知っておきたいと思ったからである。

東海大学にいる間は、東海大学の 3 人がいなければままならなかったのではないかと思うほど、食事、買い物、バスでの移動などあらゆる面でお世話になった。東海大学を出てから帰国するまでの間に初めて単独行動となり、MRT のアナウンスで日本語を聞いた瞬間、母語での案内があることでどれほど安心できるかを身をもって経験した。この経験を忘れず、今関わっている子どもたちや地域に暮らす外国人に対して何ができるかを今後も考えていきたい。

台湾での貴重な経験

深田 琴音

台湾で過ごした約 3 週間は私にとって忘れられない貴重な経験になった。台湾に行く前は、日本語キャンプの準備に追われ、自分が全く中国語を話せないことも相まって不安でいっぱいであった。特に、自分は実際の学習者を前に日本語の授業を行った経験がないため、自分の授業が分かりづらい、おもしろくないと思われたらどうしようとずっと考えていた。しかし実際に授業を東海大学で行ってみると、反省点は毎日たくさんあるものの、学習者が非常に意欲的に授業を受けてくださり私自身も充実した時間を過ごすことができた。授業の準備は大変だったが、5日間のプログラムを終えた後頑張って良かったなと思える貴重な経験であった。

私達のグループは今の私たちにしかできない授業をしようと考えており、テーマ選びからワーク内容まで細かく何度も修正を行った。私がメインティーチャーを担当した日は「非常食」をテーマに授業を行ったのだが、自分の日本での災害経験を伝える、試食をする、様々なクイズを用意するなど、日本人で大学生である自分を生かした授業を行えたかなと思った。一方で、学習者の日本語レベルや性格もまちまちなため、スライド表示方法、学習者に対する説明の仕方、どこ

まで中国語で補足をいれてもらうか等、改善点が多く残ったところが少し悔しい。また朝から晩まで外国で日本語教育について学んだり考えたりできる機会も非常に貴重なため、その空間で見聞きできるもの全てが新鮮であった。大学の講義では学習者の多様性について座学で学んでいても、実際に学習者と触れ合える機会は限られているため、東海大学での日本語キャンプ、染め物ワークショップ、長青学苑、YMCA 等様々な環境、背景、年齢の学習者と交流できて良かった。

一方で、適度に観光や自由時間も確保されていたので、台湾を楽しむ時間や、しっかり休息をとる時間もあった。初めての台湾であったため、食べ物や観光名所、建造物等日本語教育について学んだり考えたりしながらも、しっかり台湾そのものも楽しむことができた。さらに、東海大学の学生や交流した学習者から、おすすめのスポットやご飯屋さんを聞くことができたのがこの実習ならではで、観光のみで台湾に来ていればできないことだなと感じた。

今回の実習を通して学んだことは、授業や学習者との交流に正解はないと言うことである。台湾にきてより学習者は非常に多様であることを思い知った。そのため、これが完璧な授業計画だと思っていても学習者の行動を全て予知することはできないため、なにかしらの問題や課題は生じる。しかしこれは失敗ではなく、ここからどのように臨機応変に対応していくかが日本語教師に求められていることなのだと感じた。対応の仕方も人それぞれでこれという正解はない。だからこそ学習者を考慮し、常にどうしたらより良いものになるか思考を続けることに意味があると知った。この台湾での経験を生かし、これからも学習者の立場にたち学習者との関わり方や、日本語の授業について模索を続けたい。

国外実習全体をふり返って

手塚 渚月

台湾に行く約 3 か月前から、日本語キャンプのために、私たち初級 2 クラスはオンライン会議を何度も重ね、授業テーマや内容を決めていった。それにあたって「日本の私たちがわざわざ台湾まで出向いてやる意味があるか」を常に考えなければならなかった。このことを意識しながら 50 分×3 の授業の教案を書くのは難しく、自分が教壇に立って授業をしている様子が全く想像できず、緊張と不安でいっぱいであった。振り返ってみると、私がメインティーチャーをした授業において、最初の頃の教案と当日行った授業では、アクティビティの順番や内容にかなり差があり、苦労して授業を作ったことが思い出された。

台湾に来てからも、毎日学びがあった。初級 2 クラスの学習者は、授業中の反応が良く、グループワークなどのアクティビティにも積極的だったため、初めて大人数を前に授業する側としては授業がしやすかった。一方、グループワークのはずが個人作業になってしまう学習者もいて、どのように私たちの意図通りにグループワークに参加してもらうかが初級 2 クラスの中での課題であ

った。私は 3 日目のメインティーチャーを務めたが、1 日目と 2 日目の授業後の反省会で出た意見を基に、配布物をグループで一つにすることで、一つのアクティビティに対して協力する姿勢が生み出され、グループの全員がグループワークに参加するようにできたことが良かったと思う。また、学習者アンケートであったり、授業後の反省会をしたりすることでフィードバックを得られたのも勉強になった。

日本語キャンプの中で一番心に残っているのは授業準備である。3 日目の教具づくりは前日の夜遅い時間までかかってしまったが、初級 2 クラスのメンバー皆の協力で翌日の授業を何とか形にすることができた。メンバー皆の熱意や思いやりによって、より良い日本語キャンプになったと感じた。

日本語キャンプの後は、引き続き台中で染め物ワークショップ、長青学苑や YMCA への訪問をした。海外でこれほど日本文化や日本語に興味を持って、熱心に取り組む人がいることを目の当たりにして、純粋に嬉しい気持ちになった。同時に、異文化を互いに知ろうとする点や、積極的なコミュニケーションの姿勢などを自分にも取り入れたいと思った。

その後台中を離れて台南では、2 日間で小学校、中学校、高校の 3 校を訪れ、交流をした。3 校とも同じスライドを使って発表をしたが、学年やクラスによって理解度やリアクションが想像していたよりも異なっていた。同じ一つの事柄を伝えるときでも、相手の属性や反応をみて表現を変えるなど、臨機応変に対応することの重要性を感じた。

実習中は全く中国語が分からずで、言葉の壁が少なからずあったはずなのに、多くの人々のコミュニケーション力や温かさに触れ、無事実習を終えることができた。ここで得られた経験や学びを今後に活かしたい。

編集後記

編集委員 豊岡 菜帆

この度は、私たち実習生が作成した『2024 年度日本語教育実習（国内・国外）報告書』をお読みいただき、ありがとうございます。

今回は編集委員として原稿作成、原稿修正、編集に携わらせて頂きました。12 月に参加させていただいた日本語ボランティアシンポジウムにおいて愛知県立大学日本語教育実習ブースには昨年の報告書を展示させていただきました。じっくりと報告書を読んでくださる方が多く、報告書が私たちの活動を多くの人に伝え、多くの方々との関係を継続することの出来る大切なツールであると改めて実感しました。今回編集委員としてそのような報告書作成に参加することが出来、大変うれしく思います。

編集などをしながら実習生の原稿を拝見すると、1 年間の思い出がよみがえり、懐かしい気持ちと同時に、充実した実習生活を改めて実感することが出来ました。なんといっても愛知県立大学の日本語教員課程は課外活動が多く含まれており、実習生が教室を飛び出して様々な場所で体験したことを綴っております。皆様が楽しんでいただくことが出来ましたら幸いです。

編集委員 前川 礼奈

『2024 年度日本語教育実習(国内・国外)報告書』をお読みいただき、ありがとうございます。100 ページ以上にわたる報告書を編集しながら、本実習がいかに多くの方々に支えられた貴重な経験であったかを改めて感じました。実習を開始した 4 月を思い返すと、専攻、学年の異なる仲間との出会い、盛りだくさんの活動に対する不安から、やや緊張感のある教室内だったように思います。1 年間の活動を経て、いつのまにか意見の飛び交う、笑いの絶えない教室となりました。多くの学生の学びに見られるように、実習中は一人一人が初めての経験に戸惑い、悩みながら乗り越えてきました。特に、地域日本語教室調査では、他の実習生がいない状況で目の前の学習者との関わり方を考える機会が多く、考えたことを授業に持ち帰り、実習生同士で意見を交わすことが私たちにとって大切な時間でした。このようにお互いに切磋琢磨してきたことが、実習生同士の繋がりを深めてきたのだと考えています。

個人レポートには、本実習のシラバスの一つである「さまざまな人で構成される地域社会、日本社会に必要なことを考え、実行できる」という目標に対する各々の考えを記しました。学習者、講師の方々、先生方、実習生等といった多くの出会いと経験から、私たちがどんな考えを持って社会に出ようとしているのか、お伝えできていましたら幸いです。

最後になりますが、今年度の実習に関わって下さった全ての皆様に、心より感謝申し上げます。今後とも、愛知県立大学日本語教員実習へのご理解、ご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

2024年度　日本語教育実習（国内・国外）報告書

2025年3月20日発行
発行：愛知県立大学日本語教員課程
編集：豊岡菜帆、前川礼奈
編集指導：千葉月香、東弘子

〒480-1198　愛知県長久手市茨ケ廻間1522-3
愛知県立大学
e-mail：nihongo@for.aichi-pu.ac.jp

本報告書は、令和6年度愛知県立大学実習諸経費により刊行された。